

書評編集委員会

第
110
号

書評



特集 読書案内

特集 ● 読書案内

特集にあたって

自家製「読書のすすめ」…………… 福瀧 博之(法学部教員) 5

アードルフ・ヒトラーの「わが闘争」…………… 小川 悟(文学部教員) 9

人はどのようにして自分になるのか…………… 若森 章孝(経済学部教員) 15

「道楽」本位…………… 広瀬 幹好(商学部教員) 19

ラッセル・ポパー・グッドマン…………… 雨宮 俊彦(社会学部教員) 22

自然との付き合い方を見直そう…………… 野口 太郎(工学部教員) 26

タコ壺よ、さらば…………… 竹内 理(総合情報学部教員) 29

若い時こそ小説を…………… 北川 尚(非常勤講師) 33

特集 ● 教育問題 (続)

悲劇の散乱…………… 桑原 尚史 37

——授業評価を素材として——

講演録

『キャンパス分断の問題性』…………… 粉川 哲夫 47

寄稿

「ひどぎ」については、シバさんあなたも敗けていませんね。 … 蘆田 東一
 — 『週刊朝日』 はなせ司馬遼太郎の講演記録を連載するのか —

連載

日本中国ことばの往来ゆきま その55 …… 芝田 稔 71

△研究茶滴▽

フランス詩の歴史（その四） …… 山村 嘉己 79

おいてけぼり—宮本輝試論X— …… 芝田 啓治 91

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート23 …… 梁 永厚 98

パン・チヨッパリ（半日本人） …… 蘆田 東一 112

研究ノート（日本の法・政治思想史）⑤ …… 蘆田 東一 112

震災の私的記録（下） …… 三谷 真 132

短評

パニック …… 本野 栞 146

幻想の未来 …… はなばたけ 148

羅針盤 …… 2

編集後記 …… 152

題字 ■ 網千善教（文学部教員）

1997.4 羅 針 盤



ツパク・アマル革命運動（以下、MRTA）の決起―ペルー日本大使公邸占拠によって、97年の幕は劇的に切つて落とされた。NHKによる終夜体制での中継を筆頭に、新聞・テレビを通じた本事件の報道には膨大なエネルギーが注がれている。その結果として、事件をめぐる多くのことが語られた。と同時に多くの本当に重要なことは一切語られようとしていない。

例えば、占拠された公邸内で多くの「人質」が「苦痛」を味わっているだろうことは語られる。次にMRTAという組織に関する「分析」が、「人質の解放」をめぐる交渉の方向性とともに語られた。「誘拐や略奪をこととする犯罪者集団」「追い詰められた組織の最後のかげ」「ペルー国民からは孤立している」「金目当ての犯行」云々といった言説が振りまかれ、ご丁寧に「MRTA幹部の豊かな生活」なるものがまことしやかに、かつ伝聞調で新聞の紙面を賑わしさえしたのだ。

彼らにとつて、公邸を武力で占拠し、「何の罪もない」日本人に「苦痛」を強いるMRTAは、無条件に、理屈の通じない暴虐な「テロリスト・犯罪者集団」でなければならなかったのであり、そのことを裏づけるための「事実」を草の根わけても探し出し、なければそれを作り出さなければならなかったのであろう。だが、それがしば

しば誰の目にも低次元の中傷としか映らないようなものであったことに、事態の本質が示されている。

この事件をめぐる報道に貫かれている発想は、公正でも中立でもない。その根底にあるのは明白に「MRTAは一致団結して排除すべき敵である」という論理であり、報道はそのために必要な役割を果たしていかねばならないという論理である。いわゆる朝日の「突入取材」をめぐる、日本政府の対応などは典型的なケースである。

日本政府・独占資本が、ペルー・フジモリ政府に大量の援助をおこなない、その見返りとして労働力や資源を安価に供給させていること、つまり日本のペルー（をはじめめとした、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国）への搾取・収奪が、日本を「豊か」にし、ペルーの特権層を肥え太らせ、そして圧倒的多数のペルー民衆を貧困へとつなぎ止めていることを、MRTAは今回の事件を通じて暴露した。7割以上の失業率とそれに基づく飢餓へと直接的に結び付いた貧困、警察・軍によって多くの人々が「行方不明」にされ虐殺されるといふ恐るべき政治的抑圧の実態。日本・ペルー政府の結託がこうした支配を生み出す中で、彼らMRTAの主張やその行為の必然性は、実はありのままのペルーの現実を見つめ、伝えることで明らかなものとなるはずだ。

語らなければならぬ点が多い。例えば、MRTAによつて人質とされている日本人は断じて問題と無関係な人々ではない。多くの民衆が貧困に苦しみ、今日の糧に事欠く中、高い屏と武装した警備員に守られた大使公邸内で、日本の侵略の象徴である「天皇」の誕生日を祝う豪華なパーティーを催して恥じない彼らの多くは、日本の経済侵略の尖兵である侵略加担企業の社員に他ならない。電気・水道がなく、不衛生といつた公邸内の生活は多くの貧しいペルー民衆にとつて「当り前」のことである。だがこうした事実が伝えられたことはほとんどない。

多くのことを語りつつも、日本とペルーの間に存在する抑圧的な関係性への言及を注意深く回避する姿勢、「公正中立」を装いつつ、MRTAを「敵」として描き出すための「事実」集めのみに腐心する姿勢、抑圧や貧困の存在に見て見ぬ振りを決め込んでおきながら「平和的」解決を口にするこの矛盾。MRTAの決起が、日本のあり方をも問うものである以上、かかる報道姿勢は不毛を越えて犯罪的ですらある。と同時に、この事件を傍観的に捉えることの問題性は単に報道を巡つてのみ捉え返されるべきではなく、なによりも今の日本の社会を支えるわれわれ一人ひとりこそが事件の本質に真摯に向き合つていかねばならないのだ。

(東)

読書への誘い

読書案内目次

福瀧博之 (法学部)	5
小川 悟 (文学部)	9
若森章孝 (経済学部)	15
廣瀬幹好 (商学部)	19
雨宮俊彦 (社会学部)	22
野口太郎 (工学部)	26
竹内 理 (総合情報学部)	29
北川 尚 (非常勤講師)	33



読書案内 特集にあたって

今回、書評編集委員会では、特集として「読書案内」を取り上げてみました。新入生の皆さんは、これからの4年間に様々な本と出会うことになるでしょう。授業の参考書としての読書、趣味のための読書、就職のための読書など多くのジャンルの本を読む機会に恵まれます。

自分の人生を決定するような本と出会うことは、大学生活でこれ程、重要なこととは言えません。「読書案内」では、関西大学の教員の方々に「本との出会い」について執筆していただいています。皆さんが、大学生活で読書の一助となれば幸いです。

さて、数ある読書へのアプローチの中で、編集委員からも一つアドバイスを。それは、自分で読んだ本の中で感動できた本、納得させられた本を必ず一年後、二年後に読み返してみる事です。自分の成長の過程で、同じ本でも全く違った印象を持つことに驚くはずです。その差異を認識することは、慌ただしい日常で唯一、自分の存在をじっくりと捉え返す機会であると思います。

本は、読み方によって様々な内容を私達にもたらししてくれます。素晴らしい本との出会いが皆さんにありますように！

自家製「読書のすすめ」

福 瀧 博 之
法学部教員

一、現在、わが国の大学は、明治以来の最大の激動の時期を迎えている。明治以来、担ってきた高等教育機関・研究機関としての存在が脅かされつつある。かつては大学に入れば、それなりの教育的成果を期待できた時代もあったが、現在では、われわれは、好むと否とにかかわらず、自分から積極的に働き掛けて勉強しないと大学に籍を有するだけではまったく無意味な時代にいることを自覚せざるをえない。また、大学を卒業した者も従来のように大学四年間に

修得した知識だけで生涯、知的エリートとして社会をリードできた時代との訣別を迫られている。卒業生も継続的な勉強を迫られる時代である。大学生も卒業生も、そして大学の教壇に立つ者も自覚的・自発的に研究・勉強・自己研鑽を積む者のみが社会において名誉ある・充実した活動を行うことを許されていると云ってよいであろう。

二、以上は、私がここ数年、大学を卒業する私のゼミナールの諸君に繰り返し話していることである。なるほど、別に知的エリートだとか、知

的生活だとかには関心も興味もないという諸君もあるであろう。

しかし、私は、少なくとも、ゼミナールで共に勉強する諸君には、自分の選んだ道に情熱を傾ける生き方を期待している。これも、一教師としては、出過ぎたことかも知れない。ただ、そのような情熱のない者は知的生活に向いていないだけではなく、会社その他のビジネスの世界にも向いていないと確信する。

「そういう人はなにかほかのことをやった方がいい。なぜなら、いやしくも人間としての自覚のあるものにとって、情熱なしになしうるすべては、無価値だからである」(マックス・ウェーバー『尾高邦雄訳』『職業としての学問』〔岩波文庫・一九三六年・一九八〇年改訂〕二三頁)。

三、このような生き方(知的生活)にとって、具体的に何が必要かが次に問題となる。イメージは語りえて



も、具体的にこのような問題を論ずるのは容易ではない。しかし、少なくとも、大学という文科系学部の教育を前提とする職業との関係では、「本を読むこと」がその中心に来るといってよいであろう。

ひとりで考えたり瞑想する時間、ひとりで書物に向かう時間、そして、ひとりで文章を書き推敲する時間を大事にすべきである。

近時のインターネットに代表され

るような情報処理・通信システムの発展に伴い、書物（本）の有する意義を過少評価する向きもあるようであるが、人間はその五感を通してのみ情報を知覚・確認する存在であり、私の個人的見解によれば、書物という情報伝達手段は、生物としての人間の性質に相応しい方法として、これからもその重要性を失わないと確信する。

二

一、以上が、私の我流または自家製の「読書のすすめ」である。では、どのような書物を読むべきであろうか。あるいは、どのような書物から始めるべきであろうか。

文学・哲学・社会学・経済学・法学といった専門の書物に関する読書案内も一の問題であるが、ここでは、より一般的に学生諸君に薦めたい書

物を問題にすることにする。

実は、私に対するこの原稿の依頼の趣旨は、「感銘を受けた書物の紹介」というものであった。学生諸君に推薦したい書物、あるいは私が大学で勉強を始める契機となったような書物を挙げればよいのであろう。

しかし、まじめに考えれば考えるほど、そのような書物として挙げるべきものが私にはないように思われる。たとえば、最近の一時期、このような書物として、水上勉『破鞋（はあじ）』（岩波書店・同時代ライブラリー・一九九〇年）を挙げたことがある。これは、若き日の西田幾多郎、鈴木大拙らがその下に参禅した禅僧「雪門玄松の生涯」を書いたものであるが、禅に関する特別な興味も関心もなかった一読者である私のところに響くものがあつたからである。しかし、大学生を対象とする本稿において、この本を挙げてよい



かどうかは、また別の問題である。二、ところで、私の専門は、法律学であるが、特に一年生諸君を対象とする講義においては、折りをみて、読書のすすめ(読書への誘い)ともいべき話をすることにしている。法律学にとつても、本を読むということが重要な点と考えるからである。そのような場合に、先ず言及するのは、井上ひさしの一連の書物である。井上ひさしの作品は多いが、『モッキンポット師の後始末』(講談社

文庫・一九七四年)と、『四十一番の少年』(文春文庫・一九七四年)を必ず挙げることにしている。取り敢えず、井上作品の面白さを味わってもらうためである。この二冊を読んだ者はおそらく他の作品も読まずにはいられないはずである。しかし、井上ひさしに教室で言及する目的は、むしろ別のところにある。

読書を実のあるものにするには、いうまでもなく、言語(われわれの場合には、日本語)を知っていることが前提となる。日本語の文法、文章、そして書物について書かれた井上ひさしの三部作ともいべき次の著作は、専門の研究者によるものではないといえ、素人のわれわれが問題意識をもつ契機となる話題に充ちている。すなわち、①『私家版 日本語文法』(新潮文庫・一九八四年)、②『自家製 文章読本』(新潮文庫・一九八七年)、および③『本

の枕草紙』(文春文庫・一九八八年)である。



三、なお、このような読書案内には、通常出て来ない問題に言及しておきたい。それは、外国語による読書のすすめである。よい翻訳書の多い時代に外国語で読書するのは効率的ではないとする意見もあるが、賛成できない。英語や第二外国語で書かれた書物も読書の対象にすべきである。最近、日経新聞一面「春秋」欄は、英語教育の問題を取り上げた。右のコラムの執筆者は、同時通訳で教師でもある鳥飼玖美子氏の「読むこと

はすべての出発点であるという「ことば」を引用して「読むこと」の重要性に注意を喚起している（日経新聞、一九九六年一月二三日）。日本語で本を読むのとは違って、外国語による読書の実践は容易ではないが、情熱をもって挑戦すれば、語学の力が向上するだけではなく、日本語の読書からは想像できない新しい地平が開けるはずである。

もっとも、具体的に何を読むかは、日本語で書かれた書物の場合にも増してむづかしい問題である。門外漢は、発言を差し控えるべきであろうが、私の考えているのは、たとえば、Pearl S.Buck, Letter from Peking, 1957 (A Mandarin Paperback) であり、Irngard Keun, D-Zug driver Klasse, 1990 (dtv 11176) である。パール・バックに関しては、多言を要しないであろう。後者は、一九〇五年にベルリンに生まれ、女優であ

ったが、後に三〇年代の初めに作家として成功を収めた著者が亡命中の一九三八年に公刊したロマンである。ドイツ語を勉強する学生諸君は是非とも挑戦してみて頂きたい。

三

付言するに、読書のよろこびは、書物というチャンネルを通すことによつて、空間と時間を超えて、居ながらにして古今東西のあらゆる知性に学ぶことができることである。インターネットの比ではない。

しかも、類は友を呼ぶ。かつて、先人は「友をえらばば書を読んで六分の俠気四分の熱（与謝野鉄幹「人を恋ふる歌」より）と詠じたが、書物を介して友人ができることもあり、友人・知己から興味深い書物を教わることも稀ではない。本稿の執筆中にも、愉快なできごとがあった。若い友人からヨースタイン・ゴルデル

（池田香代子訳・須田朗監修）『ソフィーの世界』（日本放送出版協会・一九九五年）の一読を薦められたのである。

周知のように、これは、一九九六年度の年間ベストセラー（文芸・単行本）の第二位（トーマン調べ）の書物である（週刊朝日一九九七年一月一七日号）。内容は、「哲学の歴史の物語」であり、「一四歳以上のおとな」を念頭において著された「哲学史ファンタジー」であつて、読者によつては、L・キャロルの「不思議の国のアリス」や「鏡の国のアリス」を連想するともいわれる。

この機会に、是非一度、同書を手にされることを学生諸君にも薦めておきたい。とまれ、右の「ソフィーの世界」の紹介をもつて、この「読書案内」のひとまずのエピローグとしたい。

（ふくたき ひろゆき）

最近、卒業論文でナチズムについて書きたいという学生諸君が、少数ではあるが私のゼミにいる。一口にナチズムといっても、そんなに簡単に論文の対象にできるものではないのだが、これらの諸君はそれでもナチズムについて書きたいというのである。たいていの学生の場合は、私の講義を聞いてナチズムを論文の対象にしたいというのだが、いわばモティヴェーションは、私の講義にあったということだろうか。もちろん、映画の影響（たとえばシンドラーのリスト）や、その他のあの時代にか

んする書物の影響もある。しかし、肝腎の「わが闘争」は読んだことはない。つまり、ナチズムを外から見て関心を持ったということである。これは、別に間違つてはいない。「わが闘争」がナチズムの研究にいかん重要なものであるかということ、後にわかつて来る。それでよいのである。

学生は、この本を（もちろん翻訳を参照してよいのだが）あの難儀なドイツ文字で読まなければならぬ。今日、ドイツでは「わが闘争」の新版が出ていないからである。学生は、

ナチスがユダヤ人を迫害したことや、アウシュヴィッツを始めとした強制収容所のことには知っている。こういう歴史的な事実、たいていの日本の若い人々は知ってはいるが、ナチスのこの迫害の淵源については、殆ど知らないのではないだろうか。しかし、ナチズムの教科書ともいうべき「わが闘争」を読んでいる中に、学生は、ナチズムの根幹をなしているのは、人種主義であることに気付く。

ヒトラーの反ユダヤ主義は、政治的プロパガンダのための、あるいは人心掌握のための道具であったといえよう。彼は、このプロパガンダによって、ドイツ国民にユダヤ人憎悪の念を植え付けたのである。ドイツ人とユダヤ人の混血は、ナチズムの人種主義者にとっては、もつとも忌まわしいものであった。混血のもたら

アードルフ・ヒトラーの「わが闘争」

小 川 悟
文学部教員



す民族の退化にかんするヒトラーの主張の一部を引用する。「歴史的経験は、このことについて無数の例を示している。それは、びつくりするほど明瞭に、アーリア人種がより劣等な民族と混血した場合、かならず文化のない手であることを止めてしまったという結果を示している。その住民のほとんど大部分が、劣等な有色民族とほとんど混血したことがないゲルマン的要素からなり立っている北アメリカには、主にロマン民族の移住民が、幾度となく広い範囲に亘って原住民と混血した中央アメリカや南アメリカとは、違った人間と文化が混在している。」長い引用になったが、簡単にいえば、北アメリカにいるのは彼の言葉によれば純粹の「ゲルマン」であり、しかるが故に、アメリカ大陸の支配者になつたのである。ドイツ人がユダヤ人と混血することで、アーリア

種たるドイツ人は、遂には「文化の創始者」であることを止めてしまう。実際に、ヒトラーがドイツ人とユダヤ人の混血をどの程度にまで恐れていたのかということは分からない。ただ、この本を通して、彼が奇妙にも「ユダヤ人体験」を全くといってよいほど持つていなかったことを、学生は知ることになる。

彼は、人間は戦争によつては滅ぶものではないという。人間及び文化を滅ぼすものは、「人種の水準の低下」であるとす。人間は、「ただ純粹な血液だけを所有することのできる抵抗力を失う」ことによつて滅びる。彼の独善的主張は、「あらゆる世界史的事件は、よかれあしかれ人種間の自己保存衝動の表現にすぎない」と結論づける。こういった主張は、容易に一定の状況下にある受け手の心を把える。優れた人種とし



てのアーリア人種は、たとえば、雌雄の關係において見られるように、雄は雌のために餌を探すが、結果的には両者は子供たちのために努力する。即ち「一方を守るために、ほとんどつねに他方が味方し」、この「味方」を、彼は「犠牲的精神」と呼ぶ。「家族のせまいわくの限界を破つて、この精神が拡張されると、より大きな結合、および限りなく形式的な国家を形成するための前提が生じる。」彼のいう犠牲的精神は、この

ように機能するものであり、「地上のもつとも劣等な人間では、この特性は、非常に小さな範囲にだけ存在しているだけであつて、家族の形式を多くの場合越えないものである。」この「犠牲的精神」は、遂には、共同体への奉仕という具体的な形式をとることになる。そして、ここでは、個人は全くその存在を認められなくなる。まさしく戦時中に日本でも声高に唱えられていた「滅私奉公」の精神と同じである。この日本であるが、日本についても、ヒトラーは述べている。いわく、日本人はアーリアの如き「文化の創始者」ではなく、「文化の支持者」であり、ヨーロッパやアメリカの文化的影響が途絶えてしまうと、日本の科学も技術も衰退し、文化そのものが衰えて七十年も昔（江戸時代をいう）に帰つてしまふ、といっているのであるが、この辺りから学生は、ナチズ

ムを「わが闘争」との関連で考え始めるのである。つまり、この本の何んたるかを知るようになる。閑話休題。ヒトラーは、アーリア人種はその精神的特性のみが最大というのではなく、「自己の持つあらゆる能力を共同体に喜んで奉仕させようとする程度が最大なのである。彼らにおいて、自己保存衝動はもつとも高尚な形式に達したが、そのさい、かれらは自分の自我を全体社会の生活に進んで従属させ、必要な時には犠牲にさえた。」この部分で、ナチズムの持つ全体主義的イデオロギーの骨格がほぼ明らかになって来る。

この本では、「文化」が大きな枕になつてゐる。つまり、ヒトラーは、固有の文化論的視点で語つてゐる。彼の帝国主義的侵略思想は、人種主義的イデオロギーと不可分離である。ドイツの政治の歴史の中で、この時

代、いわゆる「第三帝国の時代」ほど、政治的プロパガンダの盛んな時代はなかった。ナチスは、非常に巧みに情宣活動を行った。第二次世界大戦が勃発してからは、ドイツはもちろんのことであるが、アメリカ、イギリス、ソヴィエト連邦、そして日本も含めて、それぞれの国が政治的宣活動を行った。これらの活動は、国内に対するものはいうまでもないが、国外にも及んだ。ラヂオの普及が、この宣活動に大いに役だつたのである。ヒトラーが、この宣活動にどんなに関心を抱き、それがどんなに重要であるかということをよく認識していたことを、やがて学生は知ることになる。彼ほど、このプロパガンダを重要視した政治家は、ドイツの歴史の中でいないといつてもよい。彼は、演説も重視した。彼の意見では、演説こそ大衆掌握のための直接的な武器である。ヒト



ラー自身、演説は巧みであつた。彼が生存中に行つた演説の数は実に大きいものである。こういう表現はいささか乱暴ではあるが、彼は、その人種主義的排外思想と、それに基づく文化・政治政策を演説という形式で巧みに表現することで人心を掴んだともいえる。

「一つの民族・一つの国家」というスローガンは、彼の演説を通して、

当時のドイツ国民の耳には、心地よく響いたのだろう。ヒトラーは、「わが闘争」の中で、「宣伝と組織」について自身の体験を交えながら、情熱的に述べている。彼は、「指導者」について指導者は、理念を大衆に伝達する能力を持つ「煽動者」であらねばならないという。つまり、「指導者」は、大衆を動かす能力を持つていなければならない。かつまた、優れた指導者は、理論家と組織者と指導者という三つの要素から成り立っているが、こういう人物を探し求めることは容易ではない。この三要素を兼ね備えた人物こそ、アードルフ・ヒトラーその人であるとは書いていないが、少なくとも彼自身を想像させる。「宣伝が、うまく働けば働くほど、組織はそれだけ小さくともよい。そして支持者の数が多ければ多いほど、それだけ党員の数は少なくてよい。そして逆に、宣伝が拙

劣であればあるほど、それだけ組織は大きくなければならない。」

ナチスの政策推進にかんじていうならば、そのプロパガンダは、かつて類を見ないほど優れていたといえよう。これは、明らかにヒトラーの示唆によるものである。彼の側近たちは、演説にかんじては特段の神経を使ったようである。プロパガンダに関して重要だったのは新聞である。ヒトラーは、新聞についてはこの本の中で、特に力を込めて語っている。「フランクフルター・ツァイトウング」、「ベルリナー・ターゲブラット」といった民主的な新聞は、ヒトラーの意見では民主的な装いを凝らした上品な、インテリ相手の新聞であるが、所詮はユダヤ人の戦術の所産であるというのである。ヴァイマル共和国時代には、国民を墮落させるユダヤ系の新聞に対して政府は何の手も打たなかった。ただ、これら

の新聞が、特に激しく政府批判を行ったり、大衆煽動的に機能した時には、これをヒトラー流でいうならば、「あまりにもひどくかまれた折には、時々そのような新聞社のまむしを二、三週間、あるいは二、三カ月間拘禁するが、その蛇の巣そのものは丁重にそつとしておいたのである。」ヴァイマル共和国の矛盾は、新しい器に古い腐った酒が入っていたことにある。言論・表現の自由が憲法で保証されていた。画期的なこの時代において、なお新聞や刊行物に対する発禁という弾圧・抑圧があったのである。

ヒトラーの頭の中では、マルクス主義とユダヤ人がオーバーラップしている。新聞に対する権力の攻撃について、彼は、次のように書いている。「ユダヤ人は全く賢明だったので、自分の全新聞を一様に攻撃させるようなことはけっしてなかった。



否、その新聞の一部は他をかばうために存在したのだった。マルクス主義的新聞が、人間にとつて神聖でありうるようなあらゆるものに対して、もつとも野卑なやりかたで出兵し、国家と政府をもつとも下劣なやりかたで攻撃したり、民衆の大部分を相互にけしかけたりしたのに対して、上記の新聞は、つまり「ブルジョワ的にして民主々義的なユダヤ新聞は、評判のよい客観性の外観で身を包むことを心得ており、またすべての頭

の空っぽな人は外面だけからしか判断できず、内面に入り込む能力をもたぬことをじゅうぶんに知っているので、すべて無遠慮な言葉を使うことは綿密すぎるくらい慎んだ。」フランクフルター・ツァイトウングが、まさにこの「特性」を備えているのだ。この新聞の闘争形式は、「精神的」である。この新聞は、「つねに〔精神的〕武器による闘争に訴える。奇妙なことにこの精神的闘争こそ、もともと精神に欠けている愚かな人々が一番深く心にかけているものである。」新聞の読者にかんして、彼は三つのタイプに分類しているが、三つ目のタイプは全く無批判に新聞報道を受け入れる読者である。ここ

でいう愚かな人々である。

しかし、彼は、これらの人々を絶对的に必要としたのである。彼が侮蔑する知識人は、左翼的な思想の持ち主であったし、またマルキストで

あったし、リベラリストでもあり、要するに反ナチであった。彼らは、ナチズムのイデオロギーに基づく政策の推進には不必要であったし、またこれらの人々の中に、ユダヤ人も多くいた。しかし、ナチズムに迎合し、かつまた、ナチズムの信奉者になった知識人も多くいた。彼らを惹き付けたナチズムの本質を、「わが闘争」に見ることができると、また、危機的状況の中で知識人について考えることもできると、ここでまた、学生は考える。与えられた紙幅は尽きようとしている。ヒトラーの対外政策や、革命論や突撃隊にかんする論述についても述べるべきであったが、もはやそれはできない。ともあれ学生は、ナチズムについて最初は観念的にしか分かっていなかったことが、今やかなり具体的に把握できるようになって来た。

同時に、この本の持つ危険性にも

気付くようになった。この「わが闘争」は、先にも書いたが、読者に対して、一定の状況下ではきわめて魅力的に作用する。今日の世の中は、この本が未だに危険な機能を發揮する可能性を孕んでいる。「わが闘争」は、決して古典になつていないのである。こういう類の本は知らない方がよいのかも知れない。しかし、知らないことの方が危険だろう。卒業論文のテーマを「わが闘争」に求める学生は、いろいろ考え、更にテーマを絞る。しかし、どこに絞っても、姿を現すのが人種主義である。決して荒唐無稽な本ではない。

使用した翻訳は、平野一郎・高柳茂共訳、黎明書房刊。1. 昭和三九年—四二年。

(おがわ さとる)

わたしは若い人に、とりわけ大学に入ったばかりの新入生に、「人ほどのようにして自分になるのか」という問いを考えつづけてほしいと思っている。しかし、この「自分になる」というのはなかなか難しく、「青年老易く学成り難し」のことわざが示唆するように、残るのは「あの時にああしておけばよかった」という後悔ばかりで「自分になる」という感動のないままに人生の晩年を迎えることが意外と多いのである。「戦争と平和」の作者が言っているように、後悔は人生を不幸にする。

一般に早熟の人は自分になるのが早いし、晩成型の人は自分になるのが遅い。まだ若い時に、早熟型の人さわやかであつたりすると、自分を探しあぐねてうろろしている晩成型の人はあせって自分のペースを乱してしまふことがある。しかし、各自が人生というマラソンのなかで自分のペースを守るならば、例えば短期的に両親を含む周囲の人の期待を裏切ることを恐れないならば、早熟型の人も晩成型の人も、その人のもっているものを成熟させ実らせるこ

人はどのようにして自分になるのか

—平田清明『市民社会と社会主義』との出会い—

若 森 章 孝
経済学部教員



とができるのである。

このように、早熟型であれ、晩成型であれ、両者の中間型であれ、どのタイプの人も「自分になる」可能性をもっている。それは早いか遅いかの違いである。ひとまずそのように言うことができる。しかし、「自分になる」という経験は生涯に一回だけのことだろうか。わたしはそうではないと思う。開高健のエッセイに「見る」、「統・見る」があるが、彼はこのなかで晩年のゴヤの銅版画集とそれにつづく最晩年の傑作「黒い絵」を見た時の衝撃をつぎのように書いている。「ゴヤは多彩、多作の人だったし、長い生涯だったから、作品はたくさんこのれされている。宮廷画家時代の作品のあるものは上手だなと思う。あるものは美しいなと思う。……けれど私にいわせればただならぬ気配、『おれはゴヤだ、スベインのゴヤだ、そしておれだ！』

というつぶやきが洩れはじめ、通過していく足がとどまり、たゆたいにぶりはじめるのは銅版画からである。異形の者たちの登場からである。そして黒い絵の一群にとりかこまれたとき、かつても今後も語られることのない歴史に形があたえられているのを目撃して、一瞥でひきづりこまれるのをおぼえる（『白いページ』角川文庫、一四一—一四二ページ）。開高健によれば、多数の有名な作品によってすでに何回も自分になっていたはずのゴヤが本当に「自分になる」のは、最晩年であった。世間的に早く認められても、その人がすでにその人になっているとは言えないのである。成功や評判によって自分に自信をもち過ぎ胸をパンパンに張って生きていると、その人の生活の仕方や考え方がいつの間にかワンパターンに陥り、「自分になる」機会を永久に失ってしまう人もいる。成

功のゆえの失敗という真理を、失敗のゆえの成功という真理とともに、忘れてはならないだろう。

では、人はどのようにして「自分になる」のだろうか。人はその人だけの道を通って自分になるのである。模倣は通用しない。自分になるための方程式も存在していない。しかし自分になるためのきっかけやチャンスはたくさんある。本との出会いがそのひとつである。そして、本との出会いはたいがいの場合、人との出会いをとともなっている。



わたしの場合、まだ自分になっていない、これからだという気持ちが残っている。しかし、これまでの短いはいえない人生のなかで、三回ほど、決定的な出会いがあった。一度目は、大学院進学を準備していた二二才のころ、平田清明氏の講演を東京外大の学園祭で聴いたことである。二度目は、関西大学の海外学術研修員としてパリに滞在した一九八四年から八五年にかけて、リビエツやアグリエッタなどのレギュラシオン学派に出会ったことである。三度目は、つい最近の一九九七年の一月の下旬に、「制度と進化の経済学」で国際的に著名なホジソン教授の講演を聴き、氏の本と論文を読んだことである。以下、わたしが経済学を専攻し経済学の研究者になるきっかけになった平田清明氏の本を紹介することにした。

わたしは、平田清明氏のすべての

本と論文を繰り返し読み返すことによつて、「ああ、これが経済学なんだ」、「論文を書くということはどういうことなんだ……」ということを自分なりに納得すると同時に、平田清明氏の著作を通して氏の著作に影響をあたえそこに流れこんでいる無数の本や学説や知的遺産を理解し、自前の教養を作っていく核のようなもの

ができた。新入生のみなさんも、これはと思う作家や研究者を見つけたら、その人の本や書いたものの一つではなくすべて読んでいただきたい。知識や学問の継承は、若い人がすべての本を独力で読むことによつておこなわれるのではなく、人生の先輩である著者の著作活動のすべてをまると読むことを通じておこなわれ





るからである。そして、年齢とともに、これはと思う作者、「自分になる」きっかけをあたえてくれる作者は次第に増えていくはずである。そのような作者(知的アンテナ)を複数もってれば、ある人が独善とワンプラトンに陥るリスクがそれだけ少なくなるのである。

平田清明氏は七二年の生涯に六百近い著書、論文、対談、評論、翻訳を残されたが、主な著書に、『経済科学の創造』(岩波書店)、『市民社会と社会主義』(岩波書店)、『経済

学と歴史認識』(岩波書店)、『社会形成の経験と概念』(岩波書店)、『コンメンタール「資本」』(四分冊、日本評論社)、『新しい歴史形成への模索』(新地書房)、『経済学批判への方法叙説』(岩波書店)、『自由時間へのプレリユード』(世界書院)、『異文化とのインターフェイス』(世界書院)、『市民社会とレギュレーション』(岩波書店)、『市民社会思想の古典と現代』(有斐閣)などがある。平田清明氏に関心をもった若者なら、これらの本のすべてに目を通すだろう。わたしが学生のころ一時的にそれまで使っていた自分の言葉を失うほど影響を受けた本は一九六九年に刊行された『市民社会と社会主義』である。この本はソ連や東欧や中国の社会主義システムを「市民社会なき社会主義」として規定し、一九八九年一月の「ベルリンの壁崩壊」の二〇年以上前に、現行の社会主義

システムの欠陥と行き詰まりを歴史的かつ経済学的に解明した画期的な研究である。大学紛争の当時、平田清明氏の影響を受けて考へ行動し議論した学部学生や大学院生のなかから、かなりの研究者が生まれた。なかには、学部長や大学の評議委員といった管理職をやっている人もいる。人生のおもしろさやおかしさや不思議さを感じる昨今である。

最後にわたしが強調したいことは、人や本や映画や音楽などとのさまざまな出会いのうちのどれが「自分になる」きっかけにするかはその人の生き方に依存することである。後から考えて、「あの出会いがなければ今の自分はないかもしれない」というようなきっかけが、新人生のみなさんを待っているのである。

(わかもり ふみたか)

「道楽」本位

好 幹 瀨 廣
商学部教員

私自身の個人的なことで申し訳な

いが、大学院生時代、アルバイトをするのがいやでいやでしょうがなかった。生活費を稼ぐのにアルバイトはどうしても必要だったが、その代わり貴重な時間をとられたからである。並外れた能力を持たぬゆえ、そして学問の面白さを知り始めた私にとって、時間は惜しかった。だから、何とか生活できる程度だけを稼いでいた。とはいっても、金の苦労をしない生活も心のどこかで望んでいた。自分のやりたいことをやり、それでゆとりのある生活ができれば文

句はない。

修業時代が終わり、大学に職を得た。アルバイトはなくなり、これで何とか「自由人」として飯が食べられるようになった。漱石に言わせれば、「道楽者」となったわけである。夏目漱石の明治四四年（一九一一年）明石での講演に、「道楽と職業」というのがある（夏目漱石『私の個人主義』、講談社学術文庫、一九七八年に収録）。何てことはない話のようだが、なかなか味があり、私の印象に残っている。

漱石によれば、職業は人のために

するものだから自己を曲げて人に従わなくてはならない。曰く。

「元来己を捨てるということは、道徳からいえば己を得ず不徳も犯さうし、知識からいえば己の程度を下げて無知なこともいおうし、人情からいえば己の義理を低くして阿漕な仕打ちもしようし、趣味からいえば己の芸術眼を下げて下劣な好尚に投じようし、十中八九の場合悪いほうに傾き易いから困るのである。例えば新聞を拵こしらえて見ても、あまり下品な事は書かないほうが宜いと思いつながら、既に商売であれば販売の形勢から考え営業の成立するくらいには俗衆の御機嫌を取らなければ立ち行かない。要するに職業と名のつく以上は趣味でも徳義でも知識でもすべて一般社会が本尊になって自分はこの本尊の鼻息を伺って生活するものが自然の理である」

他方、科学者や芸術家はわがまま



で自己本位の道楽者である。だから、「そういう人をして己を捨てなければ立ち行かぬように強いたりまたは否応なしに天然を枉げさせたりする

のは、まずその人を殺すと同じ結果に陥る」。漱石曰く。

「科学者哲学者もしくは芸術家の類」は、「自己本位でなければ到底成功しないことだけは明らかかなようであります。何故なればこれらが人のためにすると己というものは無くなってしまふからであります。ことに芸術家で己の無い芸術家は蟬の脱殻同然で、ほとんど役に立たない。自分に気の乗った作が出来なくてただ人に迎えられたい一心で遣る仕事には自己という精神が籠るはずがない。すべてが借り物になって魂の宿る余地がなくなるばかりです。」

漱石は、自らもこの種類に属する「道徳本位」に生活する人間だと言いつつ、「道徳的職業」なる職業のあることを強調している。彼によれば、自分の場合文学を職業としているが、己を捨てて世間のご機嫌を取ったからでなく、たまたま自己本位の趣味

や批判が読者の気に合って読まれ、物質的報酬や感謝を得て今日に至っている。だから自分のような職業を道楽的職業と呼ぶのだと述べ、また道楽的職業に属する者である限り、この「たまたま」が壊れた時には自己本位に立ち返らざるをえない、と自身の心情を表している。





漱石は、この講演で、職業の中にも自己の信念を貫きとおす、すなわち自己本位の職業のあることを、自身を挙げて例示する。だが、彼のように世間に迎合せず、かつ困らぬ生活を送れるような人が、どれほどいようか。そんな境遇は例外でしかない。漱石の講演が単なる自慢話あるいは成功物語でないとすれば、彼の一般聴衆へのメッセージは、あらゆる



る職業での自己本位の確立の必要であつたかもしれない。
それが規範やユートピアに終わるかどうかは、先ずは私たち一人一人の人格陶冶の努力の程度にかかっているのだろう。私のように単に「やりたいことをやって……」と夢を見る輩は、利己主義に過ぎぬ、と漱石先生に一喝されそうなので御用心のほどを。自己本位と利己主義とは違うのである。

自己本位と利己主義について考えたい人には、『働きすぎのアメリカ人：予期せぬ余暇の減少…』（ジュリエット・シヨアー著、森岡孝二他訳、窓社、一九九三年）が、意外に参考になるかもしれない。また、日本人に引き付けてこの問題を考えようとする人には、『定訳 菊と刀：日本文化の型』（ルース・ベネディクト著、長谷川松治訳、社会思想社、一九六七年）もいいかもしれない。
ともかく、人生は自己本位に楽しんでの方がいい、というのが私の信念である。

（ひろせ みきよし）

ラッセル・ポパー・グッドマン

— 分析哲学と私 —

雨 宮 俊 彦
社会学部教員

専門は一応、心理学ということになっている。しかし、専門家としての自覚にとほしく、ディレクタントの氣質がぬけない。児童画、変換視、運動技能、人間科学的人間工学、社会的相互作用のモデルと、中途半端な成果しかえられないままに、研究領域を転々としてきた。現在、記号論の枠組みを提示しようと模索している。そのめどがつかいたら、社会的相互作用のモデルと人間科学的人間工学をまとめたとおもっている。

とまらず苦勞している。しかし、専門の確定した畑で耕したり、作業の斡旋をしたりすることなどは、自分の任ではない気がする。どこまでつかいものになるか、わからないとしても、境界に橋を架けたり、辺境の地図を描くことが、自分の仕事だともっている。のりかかったんだからやれるところまでやるしかないというところだ。

この分野に志した、というようない冊の本をあげることはむづかしい。そこで、人間科学の領域で、ディレクタント的に、橋かけやら地図づくりやらを、こころざすようになった事情を、影響をうけた本の紹介とともにのべ、責を塞ぐことにしたい。

子どものころは、いろんな動物を飼ったり、「子どもの科学」とその付録をたのしみにしていた。漢字の書き取りは大嫌いだったけど、算数は苦手ではなく、自分を理科系だとおもいこんでいた。望遠鏡や顕微鏡でいろいろあそんだ。望遠鏡では、黒いビニルテープを何重にか重ねて、太陽をのぞき、ビニルテープの焼ける匂いで、眼をはなした記憶がある。脳天気な理科少年だった。

高校では地学部天文班に属した。高校二年の春休みに、文庫本でラッセルの「哲学入門」を読んだ。えらい哲学者で、入試にもでる、という

ようなことからだったとおもう。今、目の前にみえる机の感覚与件から、なぜかくかくの机がたしかに存在しているといえるのかというようなのはなしを、ふしぎな気持ちで読んだおぼえがある。そして、こういう浮き世離れたことにこだわるのが、コスモスの住民としての心の自由につながるといふ主張を、すごく気に入った。新入生の歓迎行事で、天文をやって、コスモスの住民にとか、ぶってしまった。このラッセルの本は、もともと見ることにこだわりがちなわたしに、視知覚の不思議を印象づけ、また、田舎者のコスモポリタン志向、社会秩序からずれたコスモスへの志向、などを強化、定着させたようにおもう。

水産試験場か、農業試験場でのんびりと研究生活をおくるというのが、高校をでるころの計画で、大学では生物学を専攻した。しかし、実際に

生物をやりはじめると、実験で手がおもうように動かず、また、実験生活も、おもっていたように牧歌的ではないことに気づいた。脳天気な理科少年の計画は挫折した。

挫折後、なぜ心理学へ転向したのか、理由ははっきりしない。経済や法律にはまったく興味がなかった。文学的なことにひかれたが、自然科学とのつながりもある領域ということだったような気がする。臨床心理学に関心があったし、世界がなぜこんなにあざやかにみえるのかということも不思議だった。心理学の本では、宮城音弥の入門書やジェームズ、フロムなどをよんでいた。フロムは、説教くさくて眠くなるところがあるが、当時は、向目的というか、少々おめでたいところが気に入っていた。学士入学した教育心理での、ロジャース派の臨床心理学は、あまりにあっけらかんとおめでたすぎる気が

して、ついていけなかった。ロジャー・ス派の先生は、ゼミでの的をはずれた発言にも、ふんふん、それで君はそう思うの式に、スチューデント・センタードに対応していた。少々いらいらしたおぼえがある。教育心理学では、国立教育研究所の中垣さんが主催していたピアジェ研究会で、いろいろ議論するのがおもしろかった。

大学院の修士では、知覚をやった。これは、教育心理にいて、より自然科学的な研究への郷愁を感じたのと、見えることの不思議を探究してみたという気持ちからだったとおもう。知覚では、アーヴィン・ロックの「ネイチャー・オブ・パーセプチュアル・アダプテーション」と「イントロダクション・トゥー・パーセプション」の二冊が、知覚屋としての考え方を身につけるのに役だった。また、イメージ研究会という研究者の

卯の集まりでの議論は刺激的でおもしろかった。

ピアジェ関係の本で、ひどい翻訳があることを知った。たとえば、明治図書からでているフラベルの「ピアジェ心理学入門」の一節には、「認識は経験の機能として成長する」といった箇所があるが、機能は、関数とでも訳さなければ意味をなさない。

ピアジェ自身の本の翻訳にもひどいのが多かった。また、ポパーの「開かれた社会とその敵」の古い方の訳本もそのころ読んだが、あのポパーの明解な英文が、こうも晦渋な日本語に化けるのかというような文章だった。「開かれた社会とその敵」については、あとで、未来社から新訳がでた。すごく明解な日本語だったので、愁眉をひらいた。

ラッセルやポパーを好んで読んだのは、著者の立場への共感だけでなく、主張が明確で文章がわかりやす

かったからだとおもう。コリングウッドも明解ですかつとしているから読んだ。ヴァリレーなどは少々気取りすぎているが、やはり文章がすきだった。これにたいして、フツサールなどの現象学系の文章はもたもたした感じがしてなじめないし、ポストモダン系の結構のくずれた文章にもしたしめない。吉本隆明の「共同幻想論」を読んだのはずっとあとだが、テニヲハがねじれていて、論の展開も要領を得ないので、おもわず添削したくなった。こういうのは趣味の問題だとおもうが、現象学系やポストモダン系や念仏系の文章に頭をひねっている学生がいたら、もうすこしべつの系統のを読んだらと、いいたい気がする。

ポパーは「開かれた社会とその敵」と「歴史主義の貧困」で社会主義を歴史主義的全体主義として位置づけ批判を展開している。また、「推測

と反駁」や「客観的知識」、「自我とその脳」では三世界論や進化的認識論を提唱している。これらはどちらも、自分にとって、気になっていた問題に、ある種の指針をあたえてくれるようなものだった。

わたしが大学にはいったのは、大争のほりだが、まだのこつていた。



教養の社会学の講義で文化大革命を賞賛している先生がいた。政治にはまったく興味がなかったけれど、それが、なぜか、うしろめたいことのようにおもえた。先輩にさそわれて、レーニンの「国家と革命」の勉強会につれられていった。ピントこないで、二回程度でやめた。そのうち、社会主義の暗部についての情報も、すこしは知るようになった。それでも、左翼的イコール良心的みたいな雰囲気の中になかったので（今でもそうおもっている人は、稲垣武の「悪魔祓いの戦後史」や「朝日新聞血風録」などを読んでほしい）、なんとなくすつきりしなかった。

ポパーの「開かれた社会とその敵」と「歴史主義の貧困」を読んで、知的な正直さへの倫理的コミットメント、血と大地の共同体主義への拒絶、これらのきつさに感銘をうけた。そして、歴史法則があったとしても当

為とは別であること、そもそも歴史法則の根拠がないこと、等々、社会主義のプログラムを、何重にもわたって、明確に批判していることに膝をうった。これで、法の支配の下を自由を基本とする自由主義を是として、社会主義と共同体主義にはつきりと背をむける姿勢がさだまったとおもう。

生物学出身のせいか、心理学に、進化的な展望が欠けていることには、ずっと違和感をもっていた。ポパーの三世界論と進化的認識論を読んで、これだとおもった。人間工学を担当するようになったこともあって、人工物、文化を媒介とした心の形成という発想はわたしの固定観念になっている。近年、メリリン・ドナルドの「オリジン・オブ・モダン・マインド」などのように、人工物の役割も射程に入れて、心の進化的モデルを提供しようとする試みが出てきて

いる。わたしも、あんまりおそくならないうちに、認知科学を背景とした相互作用モデルにもとづいて、記号の進化・歴史過程を生成的にとらえられるような理論を提出したいとおもっている。

最近では、記号論の準備として、クワインやグッドマンなどの分析哲学をおそまきに勉強している。グッドマンの記号分類や例示の理論など（翻訳には「世界制作の方法」がある）、視点は一面的だが、分析には銀のピンセットで腑分けするような精密さとするどさがあり、ずいぶん参考になる。この文章で、ラッセルとポパーが前面にでたのは、こうした最近の関心から過去への遡及的強調によるのかもしれない。

（あめみや としひこ）

自然との付き合い方を見直そう

野 口 太 郎
工学部教員

世の中は便利になり、日常生活は快適になった。

白熱電球↓蛍光灯↓ハロゲンランプ
↓HIDランプ。

ガリ版↓青焼き↓コピー。
算盤↓計算尺↓計算機↓電卓。

電子計算機↓コンピュータ↓スパコン↓パソコン。

電話↓留守電↓ファックス↓コードレス↓ポケベル↓携帯↓PHS。

団扇↓扇風機↓クーラー↓エアコン。
SL↓ディーゼル↓電車↓新幹線。

プロペラ機↓ジェット機↓ジャンボ機↓スペースシャトル。

身近なところで無作為に列挙してみても、ここ二―三十年の技術の進歩の早さが実感できよう。

大量生産、大量消費に支えられた二十世紀末の石油文明の爛熟期に生きる我々は、その便利さにとつぷりと浸かって、何か大事なことを忘れていないだろうか。

自然が遠くなり、季節が無くなった。

夏の暑さをいやすクーラー。その普及は家庭から電車、自動車、バスといった移動手段、食堂、教室、研



究室など日常生活の場全般におよび、夏の一日、暑さを感じるのはずかかに道を歩くとときくらいである。しかし、室内あるいは車内を冷やすために除去された熱はどこへ行くのだろうか。クーリングタワーや室外機などを經由して大気中に放散され、その結果、周囲の気温を高めることになる。密集した住宅街などでは、各

家庭の室外機から騒音とともに放射される熱のため、窓を開けて涼をとめることははや望むべくもない。やむなくクーラーに頼るといふ悪循環におちいらざるを得ない。

農産の工業化、流通の広域化によつて、食卓の食べ物に季節が無くなってきた。他方で、残留農薬や殺虫剤による健康被害が心配される。

自然を取り戻そう。

身近な生活を自然との関わりで見つめ直すきっかけとして、手頃でビ



ジュアルな三冊を紹介したい。いずれも生産↓消費↓廃棄↓生産↓……といった連鎖を損なわない豊かで健康的な生活のあり方を、実体験に基づいて平易に解説したもので、自然との共生を考えるにあたっての指針となるう。

「ナチュラルハウスブック」、デヴィッド・ピアソン著、前川泰治郎訳、産調出版（一九九五）

「パーマカルチャー」、ビル・モリソン／レニー・ミア・スレイ著、田口恒夫／小祝慶子訳、農山漁村文化協会（一九八三）

「自給自足の本」、ジョン・シーモア著、宇土卷子／藤門弘訳、文化出版局（一九八三）

水俣病・カネシ油症・PCB・ア

スベスト……。高度成長を謳歌した日本の繁栄の裏に生じた悲劇―公害。利便性・快適性の代償として、人間はなおも自然を汚し、破壊し続けている。目先の利便さを追求して生態系を破壊していることすら気づかないのか。気づいていても罪悪感を感じないのか。文明はいかに自然を、他の動物を、そして同胞人類すらを破壊し、絶滅させてきたか。今や自然の敵と化した感のある文明社会の一員として、自然との関わり方を自分自身の問題として見つめる必要があるう。

ALL SACRED.

Every part of the earth is sacred to my people.

Every shining pine needle, every sandy shore, every mist in the dark woods, every clearing and humming insect is holy in the

memory and experience of my people. The sap which courses through the trees carries the memories of the red man.

The white man's dead forget the country of their birth when they go to walk among the stars. Our dead never forget this beautiful earth, for it is the mother of the red man. We are a part of the earth and it is a part of us.

The perfumed flowers are our sisters; the deer, the horse, the great eagle, these are our brothers.

The rocky crests, the juices in the meadows, the body heat of the pony, and man—all belong to the same family.

前掲の英文は、アメリカ合衆国大統領からの土地譲渡申し入れに対するインディアン酋長シアトルの返書

の一節である。一八五四年に書かれたその全文は、環境に関してかつてなされたもののなかで最も美しく深い遠な記述として世界中の自然愛好家の間で静かなブームを呼んでいる。この意味するところを諸君も反芻してみてほしい。

大学は何を与えてくれるのか。

愚問である。何かを与えられることを期待する指示待ち人間を生産するのが大学ではないと信じる。



いかに早く出題者の期待する解答にたどり着くかの技術修得に終始した受験生活も一段落した今こそ、自身を問い直す絶好の機会である。

他人との交わり。組織、社会、国家、世界の中の自分。人類という種が生息する地球の中の自分。

誰も答えは用意してくれない。模範解答はない。自分で考え、友人、先輩、教員などと議論し、本を読み、悩み、恋をし、……。

大学は単なる知識の切り売りの場ではない。まじめに授業に出て良い成績を取るだけの四年間ではあまりにも寂しい。パッシブではなくアクティブに学生生活をエンジョイしようではないか。人生の中で唯一の機会かもしれないのだから。

(のぐち たろう)

特定の分野に関してはそれなりの知識を有しているが、分野が変わると全く話題が無い、あるいは興味すら示そうともしない人が増えているような気がする。専門化しているといえど聞こえがよいが、それは単なるタコ壺化現象であり、私には決して健全なことのように思えない。異質なものが出会い、ある時はぶつかり、ある時は融合しながら新しいものが生み出されていくのである(もちろんその過程は大変なことだけだ)。私が大学生だったX年前には(もう具体的には書けなくなった、

タコ壺よ、さらば

竹内 理
総合情報学部教員

悲しい)、異質なものとの出会いを求めて、できるだけ色々な分野の本を読み、色々なジャンルの映画を見て、そして色々な人々との出会いを作り出そうと努力した。映画や人の話はまた別の機会に譲るとして、ここでは私の無茶苦茶な読書歴を少しばかり紹介して、新しく大学の門をくぐった学生さんたちへのメッセージとしたい。

の私は敢えてそこから挑戦を始めてみたのだ(ちなみに、ノンフィクションの世界と歴史書が大好きだった)。最初に読んだ本は、サリンジャーの *Catcher in the Rye* (邦訳『ライ麦畑でつかまえて』(白水社)。以前からそのタイトルに何かしら惹かれていた本だ。原書に挑戦するといふ快感も味わってみたかった。そこに描かれていたのは、ステイブ・キングの映画(といってもホラーではない) *Stand by Me* に描かれている世界と同様、若者が持つ鋭い感性と、世の矛盾に対する憤りと、大人への入り口で戸惑う姿であり、いたく共感をもって読んだことを覚えていいる。この一作がフィクションへのアレルギーを取り去ってくれた。その後、ジョージ・オウエル (*Animal Farm* など)、オー・ヘンリー (*Green Door* など)、ヒュリエル・スパーク (*Goaway Bird*,

Memento Mori など)、レイモンド・カーバー (The Girls in their Summer Dresses など)らの作品を読んだ。やがて、文学青年ではなかったことが災いし(?)、読む内容が「堅い、文学的な」ものからジャック・ヒギンス (The Eagle Has Landed など)、ジェフリー・アーチャー (Kain and Abel など)、シドニー・シェルダン (Blood Line など) といった「柔らかい、世俗的な」ものへと変化していった。しかし「堅さ」は変わろうとも、小説に描かれている「人の欲望」、「心の葛藤」の世界に常に魅了され続けていたようである。

フィクションに少しばかり飽きたころ、詩を読むようになった(なんかキザだな...)。漢詩の持つ音の美しさに魅了され、内容は余り判らないまま、繰り返しテープを聞いていた。とても耳に心地よいものであ



後、詩の意味を考えながら読むようになる。やはりそこに描かれているのは「人の欲望」であり「心の葛藤」の世界なのだ。

政治学、国際関係論、経済学などには高校時代から興味を持っていたので、今度は社会科学関係の本を読んでみることにした。まずは、授業の参考文献に上げられていた名作と言われるものを幾つか読んでみることにした。理論あり、実践あり、右あり、左あり、中道あり、色々とりまぜて読んでみた。そこに提示されていた国際社会の分析、社会制度や市場の分析は確かに精緻なものであり、それなりにうなずけるものも多々あった。が、そこではしばしば「人の欲望」、「心の葛藤」の問題が軽視されており、果してこれが総てであるのか、という疑問が絶えず残った(私の理解が足りなかったことが原因かもしれない)。

この頃、宗教的な面からアプローチにも興味を持ち宗教関連の読み物を読んでいた。まずは、西洋人の考への基礎にある聖書。いきなり原典にあたっては判からないと思い、旧約、新約の解説書（『英語学習者のためのキリスト教入門』英友社、『聖書の英語』サイマル、など）からスタートした。次は仏典の解説書を少々。般若心経、古神道、コーラン、大本教の解説書あたりを読んだところで挫折した。それでも宗教の面から「心の問題」にどう説明を付けるか（そして付けられないか）がホンの少しだけ垣間みられたような気がした。副作用は、宗教を簡単に信じられなくなったこと。（フォイエルバッハの『キリスト教の本質』岩波文庫、などを読むと、最近問題を引き起こした某宗教など頭から信じられない。）

今度は、なんだか理系の分野の知

識が欠けていることに不安を感じて、いわゆる理系の書物も少し読み始めてみた。フリーエ解析や量子力学の易しい解説書（『フリーエの冒険』ヒッポファミリークラブ、など。この英語版は、多くの米国の大学の教科書にもなっている）、音声科学の本（*Speech Science Primer*, Williams & Wilkins など）、脳科学の本（『脳とコミュニケーション』朝倉書店、など）、推計統計学・多変量解析の本、ファジー理論の本、生命科学の本、情報科学の本、確率論の本、など。理系の本は英語で読むと分かりやすいことに気がついたのは収穫だった。また、いわゆる文系とはひと味違った「心の問題」へのアプローチも具体的に知ることができた。そして、ようやく（大学3年の頃）長らく魅了されてきた「心の問題」に科学的に取り組むため心理学の本を読み始めた。最初は精神分析系の

書物を読んだが、その説明の仕方になじめず、認知心理学、社会心理学、心理言語学の方へと手を伸ばした。

そこでエイチソンの *Articulated Mammal*（邦訳『ことばを持ったほ乳類』新曜社）という本に出会うことになる。この本は、決して、「心の問題」全体への解答を提示してくるような大それたものではないが、その一部分、つまり人間の知的活動、情報活動の源である「言語・コミュニ



「ケースション」と「心」の問題に迫る研究が生き生きと描かれている。そろそろ自分の進路決定を迫られる頃になっていたこともあり、「心の問題」への挑戦という大それたテーマから敵前逃亡して、心理言語学とその延長線上に現れる応用言語学、教育工学)の分野を、自分の職業的関心にしてしまった。

いったん専門が決まると、どうしても読む本はその専門分野に限られがちである。しかし大学院時代も努めて色々な分野の本を読むことを心がけた。その当時読んだものの中で未だに印象に残るのがアラン・ケイの一連の論文 (OpenBook から CD-ROM で『アランケイ』として出版されている) とイリッチの『脱学校の社会』(東京創元社)である。どちらも今の文脈で読むと、それほど新鮮味を感じないかもしれないが、出版された今から一〇数年―二〇年

前に「ネットワーク社会と教育のあり方」を見据えていた眼力には、まさに頭が下がる思いがする。「上質なもの」とはこういう書物のことを言うのかもしれない)さらに、この当時読んだものとして、教師という職業のあり方を考えさせられたコールの *Growing Minds on Becoming a Teacher* (Harper)、危機に直面した時の人間の生き方を分析した *Winning Life's Toughest Battles* (邦訳『生きぬく力』フォーユー)なども、今でも折りに触れて読み返す書物だ。

さて、こうして恥をしのんで(?) 学生時代の(ある意味では無茶苦茶な)読書歴を紹介してきたのは、その途中に現れた本を皆さんに読んで貰うためではない(個人的な好みを押しつけてもしかたがない)。それでは何のためかという、一人の人間の読書の幅(ひいて興味)が

いくらでも広がる可能性があることを見ていただきたかったからである。世は学際(学問の接触・融合点に新しいことが生まれる)の時代である。タコ壺に安住せず、広い関心を持ち続けてほしい。異なる分野のことをかじってみることは、自分の世界を豊かにする可能性を秘めていることを忘れないでいて欲しいのだ。

いま、私は友人の勧めもあり『保守革命とモダニズム』(山波書店)、『テクノクラートの世界とナチズム』(ミネルヴァ書房)を読んでいく。タコ壺にはまったために社会全体の動きを見失いヒットラーの台頭を招いた人々の話である。新入生の諸君、タコ壺にはまるのは実に恐ろしいことなのだ。忘れないでほしい。

(たけうち おさむ)

若い時こそ小説を

北川 尚
非常勤講師

新入生の皆さん、御入学おめでと
う。さあ、本を読もう。大学生活の
四年間は欠伸をしている間に過ぎ去
ってゆく。気が付いた時には卒業式
ということになる。時間はない。さ
あ、どんどん読んで下さい。

何を読んだらいいか。それは自分
で決める。自分で街へ出掛け、ぶら
りと本屋へ寄り、とにかく気に入っ
たものを適当に一冊選び、手に取る。
ページを捲り、面白そうだ、と思っ
たら、直ちに買う。これはある意味
で真剣勝負であって、どんな本を選
ぶかで、言わば、君達の感性と品性

と知性が試される訳です。心して選
ぶように。

人間誰でも、現実に対する違和感
や、もどかしさを抱えて生きている。
特に若い時期には強烈なものとして、
それ等はある。それ等のもどかしさ
や違和感が君達を良い本に出会わせ
てくれる。途方に暮れて、どうして
いいのか分からない時など、とにか
く街へ出掛けて、本屋へ入ってみる。
するとそこに、君達にとって最も必
要な本が、君達が来るのを待ってい
たかのように、必ずある。本との出
会いです。

この出会いを経験することは人生
の醍醐味でもあります。どんなに世
の中が便利になっても、自分に必要
な本は街へ出て探す、という姿勢は
大切だと思います。

さて、本を買ったら、時間をうま
く作り出して、どんどん読むこと。
君達は忙しい時代の人々だから、忙
しい中で上手に時間を作って、沢山
読んで欲しい。

何といっても、若い時には小説を
読んで貰いたい。感受性が豊かな年
頃に小説を読んでおくと、後の人生
が色々な意味で豊かなものになる。
そういえば、ジャーナリストの立花
隆がどこかで次のようなことを書い
ていた。

インタビュアーの上手なジャーナリ
ストというのがいる。仕事でインタ
ビューに行き、そこで相手に何か質
問をし、そして相手から答えが返っ
てきた時、インタビュアーの上手なジ

ヤーナリストは、相手のその答えをメモし、どうもありがとうございまして、と言つて、さつさと帰つて行くということは決してしない。彼等は、相手からの答えに対して、この答えはどういう筋道を辿つて出たのだろうか、この人はどういう人生感に立つて、この答えを答えたのだろうかと、相手の答えの背景に向けて想像力を働かせる。そして、相手の答え

が出て来たその背景の中の核心と思われるところへ、新たな質問を投げ掛ける。その新たな質問が相手の核心に届いた時には、相手の態度はガラリと変わり、相手はより高い次元で新しい答えを返して来る。そのよな質問と答えが往復し、インタビュール全体がダイナミックなものになる。ここで重要なのはジャーナリストの想像力である。そして、想像力が豊かであるかないかは、若い時の

読書の量と質によってほぼ決まる。良い小説を読むことは、想像力を養う最良の方法である。

立花隆はこのように書いていたと思う。これは他の分野のプロにも通じることはないだろうか。

だから皆さんには小説を大量に読んで頂きたい。という訳で、何冊か紹介することにします。読むか読まないかは勿論君達が決めて下さい。

ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』(新潮文庫)。私が初めてこの小説を読んだのは二十歳の頃で、六十年代が始まろうとしていた時だった。マルクス主義系の学生運動は殆ど低迷しており、その低迷に平行して、様々な新興宗教が姿を現わした。論理が衰退し、非合理が浮上したかのようにだった。

思うに、当時の新興宗教青年は昨今のそれと比べ、どこか破壊的で、



言葉は過激、吠えるように喋っていた。私としても、理論武装して対抗しなければならなかった訳だが、そんな時に、ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』に出会った。

この小説の中では、宗教者と無神論者の葛藤というテーマが徹底的に展開され、特に「大審問官」の章は圧巻だった。読んでいるうちに私は、私の知る宗教青年達も、そして私自

身も、チンケな下らない存在に思えて来た。ドストエフスキーの問題意識に直面した時、私達は何とお粗末な議論をしていたことかと、情無くなつた。それで、宗教青年達と関わるのはやめることにして、私はこの長い小説にのめり込んで行つた。

各章を読み終える度に、コーヒーを入れて煙草を吸い、下宿の窓から京都の北山杉を眺め、そして、読み続けた。何日か経ち、やつとのもので全章読み終わると、疲れ果てていた私は、そのまま眠りに落ちた。夢の中で小説の登場人物達が難解な議論を続けていた。目が醒めると真夜中で、私は煙草を吹かし、サントリー・ホワイトをひと口飲み、闇の中で、夢の余韻に浸つた。私はドストエフスキーの小説世界に完全に圧倒されていた。白々と夜が明け、北山の綾線が黒い輪郭となつて空に浮かぶ頃、私は中古のラジカセのスイ

ッチを入れ、ローリングストーンズの「ワイルド・ホース」を聴きながら、再び眠りに落ちた。

……などと、関係のない回想にまぐ入つてしまいましたが、とにかくこの小説を読んだ時の衝撃は凄まじく、それ迄の矮小な自分がぶつ壊された思いがした。

一昨年、オウム事件が発覚し、私と同輩の信者が警察に連行されるのをテレビで視た時、この人達は多分、若い時にドストエフスキーに出

会う機会に恵まれなかったのだろうと思つた。そう思うと、何だか遣る瀬ない気持ちになつた。

ヘルマン・ヘッセの『郷愁』（新潮文庫）。この小説家の深い優しさと、人生と自然への愛は、若い人達にこそびつたりです。年を取つてからは、読んでもリアリティーが感じられないのではないのでしょうか。

サローヤンの『ヒューマン・コメディ』（ちくま文庫）。こういう作品を傑作というのだろうか。素晴らしい。

フランツ・カフカの『変身』（新潮文庫）。現代の若者には、こつちの方がリアルかも知れない。ある朝目が覚めたら巨大な虫に変身していた男の笑うに笑えない話。この奇妙な小説を、今の若い人達はどう感じ取るだろうか。



フォークナーの『響きと怒り』（富山房、フォークナー全集5）。この小説の第一章を読み終えて、コーヒー牛乳を買いに外の街へ出たら、それまで見飽きていたはずの街が、全く新しいものとして目に飛び込んで来た。特に空の色が強烈で、今まで見たこともない色に輝き、雲などは白い炎でギラギラ燃えているかのようだった。

優れた小説を読んだ後は、このようになります。それまで眠ったように鈍感だった五感の感覚が、小説という芸術によって叩き起こされるからです。遠くへ旅に出た時、初めて恋をした時、親しい人と死別した時、私達の感覚は研ぎ澄まされ、目に映るもの、聞こえるものが、いつもとは違うように感じられる。これに匹敵する効果が、優れた小説にはあります。小説を読み続ける限り、老い



て惚けることはないんじゃないでしょうか。

日本の小説も紹介しておきます。大江健三郎『芽むしり仔撃ち』、『個人的な体験』、安部公房『砂の女』、『箱男』、開高健『日本三文オペラ』、『裸の王様』、安岡章太郎『質屋の女房』、立原正秋『冬の旅』、遠藤周作『海と毒薬』（全て新潮文庫）。どれ

も若い人に勧めたいものばかりです。

色々に紹介して来ましたが、世に優れた小説は数限りなくあります。繰り返しになりますが、それ等は自分で見つけることが大切です。皆さんには、想像力豊かな人になってほしい。私もそういう人間になりたいと思います。

（きたがわ ひさし）

悲劇の散乱

——授業評価を素材として——

桑原尚史

一 悲劇解読の素材 —— 授業評価とは ——

四月になり、また授業が始まろうとしている。これから始まる授業のことを思えば、いやがうえにも精神の緊張は高まる。しかし、「授業評価」の結果が脳裏をよぎると、それは一瞬にして陽炎のごとく消え去り、風光る季節に諦念という花冷えをもたらず。

授業評価とは、いうまでもなく学生が授業を評価するというものであり、昔日の大学を思えば隔世の感があるが、最近はその形式および運用の仕方は違えども、授業評価を実施している大学は数多くある。私の所属する

総合情報学部においても、この授業評価が学部開設時より導入されている。

総合情報学部においては、学生は、履修した授業について、「授業内容に興味を持つことができた」、「授業内容はよく整理されており、要点が理解できた」、「抽象的、理論的内容については分かりやすい説明があった」、「授業の進み具合は適切であった」、「話し方は明確で授業内容がよく聞き取れた」、「私はこの授業を友人に薦めた」等の十七の質問項目に対して、「強くそう思う(5)」から「そう思う(4)」、「どちらともいえない(3)」、「そう思わない(2)」、そして「全くそう思わない(1)」までの五段

階で評定することにより評価を行う。また、これに加え、学生は、教員に対して意見や要望を書くことができる。この授業評価の結果は、回答人数、平均値、分布等の記述的統計処理がなされたデータと共に教員の手元に届けられる。



二 ささやかな悲劇 — 私の授業への評価 —

それは、予告なしにメールボックスに届く、内容はこの三年間の経験からおおよそ想像がつく。したがって、すぐに開封する気にはなれない。それでも、暫くして、意を決して開けると、「心理学」への授業評価が出て来る。三百名の評価と意見が記載されている為、かなりの厚さだ。捲れば、いきなり「講義のレベルが低い」という意見が目射る。これだけで、もう倒れそうなのに、容赦なく「学生に媚びすぎ」、「下手な冗談を言わないでほしい」、「単なる用語解説で終わる講義はやめるべき」、「適当に講義を終わるな」といった辛辣な意見が続く。批判は、ときには人格迄及ぶ。「性格が嫌い」、「話し方が嫌い」、予想以上だ、年々厳しくなる。

戦後民主主義および平等主義への憎悪を深めつつ、孤独な反論を試みる。「早口をなおすべき」——「頭の回転のスピードが遅いんじゃない」、「おもしろいのは最初だけ」——「いつまでも冗談なんかいつてられるかよ」、「進度にむらがある」——「そういうのをメリハリというのよ」、「授業に関係のない話が多い」——「そんな話はした覚えがない、因果関係の理解が乏しいんじゃない」、「言葉使いが丁寧すぎて嫌み」——「大人として扱っているん

「ただけど」、「もつと一生懸命授業をしてほしい」——「確かに、でも誠意の演技にも疲れてしまつて」、「授業に遅れて来るな」——「でも、早くいくと次々と学生が……」、「もつと専門的な話をしてほしい」——「同感、でもそれでは授業が成立しなくなる虞れが……」。次第に、反駁よりも弁明の彩りが濃くなつてゆく。

誉め言葉もある。「早く終わるのが良い」、「内容はほとんど覚えていないけど面白かつた」、「素直には喜べない。「先生大好き」との意見に胸が熱くなるが、よく読めば、その後に「だつて単位がとりやすいんですもの」と続く。どうせ、私の講義の存在価値など、その程度のものだ。

数値に目を移してみると、これまた厳しく、すべての評価項目に1をつけている学生が何人もいる。良き点はまったくないということか。授業評価の結果は、諦観と倦怠とともに、机の上に放り投げられる。

三 悲劇の回想 — 私の授業 —

大体が私の授業など、失敗と迷いの連続だった。悲劇は喜劇の様相を呈して幕を開けた。最初に担当した講義は、「心理学研究法」と「社会心理学」だった。「心理学研究法」の講義では、黒板に数式を延々と展開しつつ、

何たる明快な説明と軽い眩暈を感じながら後ろを振り返れば、ほとんどの学生が熟睡した風景が広がっていた。「社会心理学」の講義では、理論を次々と概説しつつ、それに解釈を加えながら何と品位高き講義と満足していれば、数回の講義の後、何を言っているのかわからないと憐憫の表情を浮かべながら数人の学生が忠告に研究室を訪れてくれた。

それでも、慣れるに従い、その履修者のほとんどが心理学専攻の学生であるという事情も手伝つてか、講義はそれなりに進行するようになっていった。それとともに、自分は授業はそれほど下手ではない、それどころか、講義が旨いとさえ思うようになっていった。そして、私語に悩む同僚の教員の話聞くにつけ、口では「高校迄の教育が間違っているせいですよ」などと慰めながらも、胸中では「関心をひきつけわかりやすく講義すれば学生は聞くのだ」などと傲慢にも思っていた。

この自信は、受講者が三百名を越える心理学の講義を担当した途端脆くも崩れた。そこには、同じ大学ながら別の学生達がいた。喧騒の中で、大学なんかもうやめようと思ひながら講義をしたこともあった。欲求の階層性の話をしながら、「空に遊ぶ紅葉を眺めながら森の中で静かに暮らそう」とか、性格の特性論の話をしながら、

「波の音を聞きながら海辺で静かに暮らそう」などとデカダンスからの逃避を心の中で堅く誓った。

そんな状態を見かねたのか、心優しき同僚が担当の交代を申し出てくれた。自ら進んで茨の道を選択しようとする汝に神の祝福あれとその献身を讃えた。しかし、彼にとつては平坦な道だったようだ。心理学の講義は、いともたやすく静粛さを取り戻した。こうなれば、開き直るしかない。もともと、静謐の中でただ本を読んで暮らしたかっただけなのだ。このような内閉傾向からみて、講義が旨くいくわけがないと半ば諦めつつも、些少の義務感から、同僚に良き方法はないかと尋ねたり、ときには「話し方がうまくなる本」といった類の本にも目を通してみたりしたが、いずれも個人の経験則の域を出るものではなかった。

それから、十年近くの月日が流れた。その間、私立大
学、国立大学、または短期大学、ときには大学校と様々
な処で授業をしてきた。しかし、今なお、講義は稚拙の
域を出ず、何とか学生をひきつけようとわかりやすさ
おもしろさを心懸けるが、脆弱なる見識では、それは有
り体にいえば専門性と体系性の欠如を招く以上の効果は
もちえず、出たり入ったりする学生を拱手傍観しつつ、
学生の放恣な寝姿に周章狼狽し、関心を呼び戻すための

冗談は失笑を買うにすぎず、這々の体で講義を投げ出す
こともしばしば、最後に残った寛容な天使達によって講
義がかるうじて成立する。



四 悲劇の予感 — 授業評価を考える —

さて、授業評価の個々の意見は、この状態を見事に点描する。印象批評としての優秀さは認めざるをえない。集約すれば、授業の全体像が瞭然と浮かび上がる。確かに、評価を逸脱した回答も散見されるが、評価の対象が履修を終えた授業であることと、履修している全ての科目に回答する労力を考え合わせれば、評価が時として放縦に流れ、勢い感情論が先行するのも已むを得まい。それにもかかわらず、多くの学生は、授業が良くなればとの思いで授業評価を行っている。指摘されたことは、私とてわかっている。しかし、これまでの経緯からみて、それほどの程度応えることができるのだろうか。

もちろん、黒板の文字が小さすぎる、声が小さいといった技術的な問題であれば、それは僅かな留意によって改善されるだろう。しかし、現実には、話し方や講義の形式など即座には対処できない性質のものへの指摘が意見の大半を占める。また、同一の講義に対しても、否定的な評価と肯定的な評価が交錯する。それらすべてに配慮することなど殆ど不可能に近い。

すると、学生は、其の内に指摘しても変化しない現状に気づき、授業評価に対してエフィカシー (efficacy) を

次第に喪失してゆくに違いない。また、教員の方は、厳しき評価に幾分不快感を感じつつも幾許かの改善を試みるが、それが期待どおりの反響を呼ぶことは稀であり、幾度か無力感を覚えるものの、やがては正当な (manner-) 評価も作法なり礼儀を逸した (manneries) 意見も予想の範囲に収まり、授業評価を退屈な習慣 (mannerism) と感じるようになってゆくだろう。

その一方で、授業評価の内容は、それに評価という名が冠せられている以上、規範的な価値を有するようになってゆくことだろう。つまり、乱暴に纏めてしまえば、授業がわかりやすくおもしろいのは当然のことであり、それを成しえないのは教員の責任であるという前提が成立するのである。それは既に、否定的な評価のみならず肯定的な評価の中にも顕現化しつつある。わかりやすさとおもしろさのファシズムが蔓延していく。

五 悲劇の必然性 — それぞれのコンテクスト —

もちろん、新たな制度が、導入時より正常に機能することは稀であり、往々にしていくつかの軋轢や予見できなかった問題が生じることは承知している。そして、それが効を奏するに至る迄には、制度への理解を求め、

一定の秩序を形成してゆく過程が不可欠であることも、また、ときには制度の修正あるいは是正が必要になることも心得ている。

加えて、授業評価が導入された背景には、大学の教育が十分機能していないという事実があることも知悉している。しかし、それは個々の授業に問題があった所為なのだろうか。

大学の授業が批判されるとき、最も頻繁にその対象となるのが教員の無気力さと講義の退屈さである。その際、その典型例としてよく引用されるのが、学生の反応も構いなしに、黄ばんだノートをただ読み上げるだけという講義の例である。そのような教員が実在するかどうかは別として、それを無気力と決めつけるには、歴史的文脈あるいは状況的文脈への考慮が欠落している。擁護すれば、その教員として初めからそのような形式で講義を行っていたわけではなからう。当初は、学生の出席率を高めるためにささやかな努力をもし、学生の関心をひきつけるために教材に工夫をも試みたに違いない。しかし、結局は、大きな改善は得られなかったのだ。その結果として、現在の姿がある。必然的に獲得された無力感(learned helplessness)なのだ。勝手な想像ではあるが、おそらくは間違っていない。その論拠は、私がその途

を辿りつつあるからにはほかならない。

すると、学生に問題があったのだろうか。学生に対しても、学生の知的関心が低い、学生のモチベーションが低下しているといった批判がなされている。しかし、私はこのような言い方、例えば、官僚は怠惰だ、政治家は強欲だなどといった言い方はできる限り忌避すべきだと思っている。なぜならば、そのような表現を用いることによって別の側面が見えなくなってしまう危険性があるからだ。事実、常に一定の割合で知的好奇心を強く抱いた学生は存在し、私語が横溢する大教室においてさえ必ず何割かの学生は熱心に聞いているのである。ただし、それが相対的にみて少数の部類に属することは間違いない。

しかしながら、多数者の行動には、何らかの必然性がある。考えてみれば、学生がこれまでおかれてきた文脈を慮ると、初めての自由を謳歌し、東の間の休息を求め、その無理からぬことであり、また、性急なる有用性と過剰なる効率性が重視される社会の中で、大学で学ぶ専門性と職業がおおよその場合乖離していることを思えば、授業に価値をみいだせないのも致し方がないことである。その中で、行動規範の変化と共に、授業が従来の形式では立ち行かなくなってきた。その際、わかりやす



さとおもしろさは授業を成立させるための一つの要素かもしれない。しかし、それは授業の本質的な要件ではない。

今、大学の社会的位置づけが揺らぎ、大学の教育機能が危殆に瀕している。それは、決して個々の授業内容や教育技術に帰趨すべき問題ではない。そして、それを世論の法廷に裁きを委ねたとて大きな改善は得られまい。確かに、悪しき連鎖を断ち切るためには、何かを変えなければならぬのだという論理も成立する。しかし、そこには、教員個々の対応では抗いきれない現実が屹立している。

六 悲劇の終幕に向けて — 大学改革 —

さて、現在、大学は大学改革という大きな波の真っ直中にある。全国の大学において、教養部の改組、一般教育科目の改変あるいは撤廃、入試制度の改革、自己評価制度の導入に代表される様々な改革が進行している。これまで、言及してきた授業評価も自己評価制度の一部として位置づけることができる。

しかし、本当に、変革すべきものは何だったのだろうか。果たしてカリキュラムに問題があったのだろうか。それとも、入試制度に問題があったのだろうか。また、

学生の目には、一体、何が変わったと映っているのだろうか。

もともと、この一連の大学改革は、教員から提起されたものでもなく、彼の時のように学生から提起されたものでもない。大学設置基準の大綱化を契機として生じたものである。その答申がなされた背後には、産業構造の変化、先端技術への科学技術政策の転換、高等教育財政の逼迫、大学が市場原理によって淘汰されるという問題の出来、学生の多様化、そして大学教育が危機的状況に陥っているという社会的文脈がある。すなわち、それぞれの大学が、ひいては、それぞれの学部が社会の変化にいかに対応するかが問われているのである。

しかし、現在の大学改革の動向を決しているのは、誇張を恐れずにいえば、俯瞰する限り、大学審議会の答申とアカデミズムの論理より市場の論理を優先する消費者主義(student consumerism)である。したがって、全国津々浦々の大学で符節を合わせたかのように同様の改革が行われている。そして、その矛先は、経営の論理が楯となるため、少人数教育の実施または教員の増員、非常勤講師の待遇改善、あるいは施設および設備の改善等の問題には向かない傾向にある。もちろん、これを良き機会と捉え、真摯に改革を試みようとする動きもある。

しかしながら、改革のための改革に多くの労力が消耗されていることもまた事実である。そして、現在の改革のあり方は、緩やかにそれぞれの大学を、さらにはそれぞれの教員を均質化し、結果的には個々の活動を散逸させてゆく危険性さえ孕んでいる。

いうまでもなく、改革の目的は、消耗(consume)することでもなく均質化(conform)することでもなく、大学本来の機能を取り戻す(resume)ために改善(reform)を行うことにある。それには、大学の社会における位置づけ、すなわち大学の役割と機能を問い直す必要がある。それがなければ、新たな波は徒波と化し、やがては泡沫として波間に潰れることとなる。

七 終わらない悲劇 ―付記に代えて―

以上、授業評価を素材として、多少の諧謔と連続性を保つために悲劇をモチーフとして戯れつつ、私に与えられたテーマ、大学の教育を巡る問題に対して、その問題が生起するに至った文脈の解釈に主眼を置いて論を展開してきた。

最後に、幾分私的な意見を述べると、震災後、多くの訃報とまだ終わらぬ悲劇の中で、倦怠感と諦念感を払拭できずにいる私には、偽らざる気持ちを告白してしまえ

ば、大学教育の改善の可能性など無きに等しいとしか映らない。

いくつかの場面を目撃した。倒壊したモルタルのアパートの瓦礫の中にシャネルのスカーフが風に揺れるのを見た。病院のロビーのリノリウムの床には、過去にこの国の繁栄を支えた人達が横たわり、慌ただしい最後の宣告をただ待っていた。避難所に一本3千円のフランクフルトを売りにきた人達も見た。多くの人達が子ども達の為に不快さを堪え忍んで行列に並んだ。復興という全体主義の中で、個人の権利が粗雑に扱われるのを見た。この国の生活は、残酷なゲームだった。ジョーカーが配られると、二度とゲームには戻れない。

そこには、偽りの豊さ、危うき繁栄、モラル、そして国家とはというこの国が抱える問題が凝縮されていた。矛盾は、危機状況においてその姿を鮮明に露呈する。

大学教育の問題に関しても同じことがいえる。大学教育も、長い間矛盾を抱えてきた。きわめて単純化して述べれば、学生は就職のために大学に入学し、企業は大学教育を無用のものとみなし、この両者間で大学教育の意味が浮遊していたのである。しかし、この矛盾は、大学の定員よりも入学を希望する学生が多く、卒業する学生よりも求人が多いという二つの需要と供給の関係によ



って等閑に付されていた。しかし、近年、そのバランスが、前者は人口動態の変化によって、後者は経済動向あるいは産業構造の変化によって崩れつつあるのは周知のところである。そして、今、改めて、大学教育の意味が

問われているのである。

言ってみれば、大学教育は、特に文系のそれは、現代社会とりわけ産業社会においては不必要な存在であったのだ。この浮上した矛盾を解決するための唯一の方法は、大学教育の内容を、プラグマティカルあるいはプラグマティックな内容に傾斜させることである。しかし、それを、大学の内的整合性に破綻をもたさず、大学の存在理由と均衡を保ちつつ行うのは至難の技である。結局のところ、冷たくかつ無責任に言い放つてしまえば、市場の需要によって増大した大学は、市場の論理によって淘汰あるいは縮小されるのが運命なのだ。

ただし、私自身は、従来の大学教育が不必要だとは思っていない。むしろ、震災の例を引くまでもなく、進歩主義あるいは効率主義からの方向転換を迫られているこの国には、その重要性は増すとさえ考えている。しかし、大学は時代の波に合わせて、その姿を無条件に変えようとしている。ここに、私は疑問を呈さざるをえない。もちろん、授業の状態に象徴されるような現状を良き状態と見ているわけではない。

しかしながら、これまで、類い稀な例を除いて、教育というものが広範囲に成功を収めた例があっただろうか。また、これだけ多くの書物が溢れているのだ。学びだけ

れば、自分で学べばよいのだ。講義は、その為に体系、動向などを簡単に伝えればよいのだ。一部の知的にスリリングでエキサイティングな講義を除けば、講義など、所詮その程度のものだ。それは、演習としてさして変わらない。曙光を見いだすとすれば、対話しかない。あるいは、それ以上に、教員の学問に対する真摯な姿勢が最も有効な教育といえるかもしれない。私にとってもそうだった。

今、船が、時代の波に流されようとしている。その波は、プラグマティズムという陸地の方向に向かっている。その波に逆らい、水平線に向かって毅然と舵を取るのには並大抵のことではない。しかし、それがアカデミズムであり、また真のプラグマティズムであり、ひよっとすると究極のコンシューマリズムかもしれない。船は、岸と一定の距離を保つ必要がある。特に嵐のときには、さもなくば、波が去った後には、汀に座礁し揺曳する朽ち果てた船が残ることとなるだろう。

(くわばら たかし・本学総合情報学部教員)

講

演

録

『キャンパス分断の問題性』

粉川 哲夫

関西大学の高槻キャンパスにきたのは初めてなんですけれども、僕に与えられた課題は「キャンパス分断の問題性」です。たぶんあまりたいしたことは提言できないと思いますが、関西大学が抱えている問題は他の大学でも共通に起きていることです。のちほどお話ししていきたいと思いますが、キャンパスの問題は、日本の「都市」が抱えている問題、特に地方の「都市」が抱えている非常に深刻な問題に繋がるのではないかと思います。

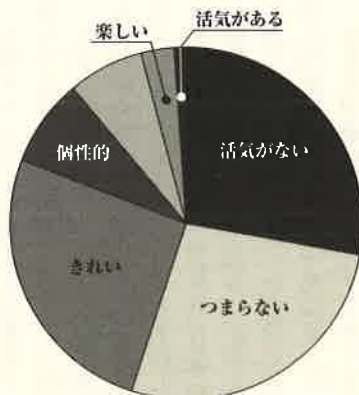
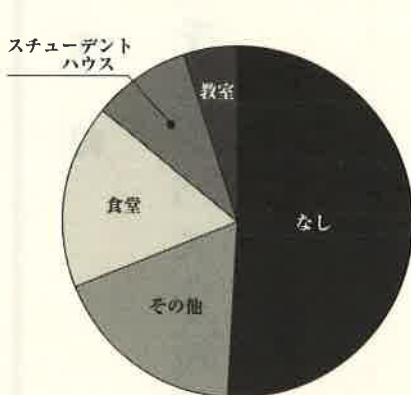
まず、関西大学生協組織部で（千里山キャンパスと高キャンパスの学生を対象に）集めたアンケートの結果を見せてもらったんで、それについての感想からお話しし

たいと思います。高槻キャンパスの関連で、「あなたが高槻キャンパスで楽しいと思える場所はどこですか」というのがあります。これについて「なし」というのが五％、その他が一八％、その次が「食堂」一七％、「教室」と答えたのが五％しかありません。それから「高槻キャンパスの雰囲気はどうですか」という質問にはトップが「活気がない」が二八％、「つまらない」が二七％、「きれい」というのは二六％です。「活気がある」という欄に印を付けた人は一％しかいないわけです。

日本の大学で教室が楽しくないというのは今に始まったわけではなくて、僕らが大学生の頃も教室が面白いと

あなたが高槻キャンパスで
楽しいと思える場所はどこですか。

高槻キャンパスの雰囲気はどうか。



言っている人はほとんどいませんでした。アンケートで興味を引くのは、はっきり「活気がない」というふうに答えてしまった人が一%を越えてしまっていることです。アンケートはいろいろな見方があると思うんですが、これは、事実をついているのではないのでしょうか。それから、「活気がない」、「つまらない」、それから「きれい」というのが、ほとんど同じパーセンテージで表れているというのも非常に興味深いことです。これは、肯定的な意味で「きれい」といつているのか、あるいは「きれい」すぎて馴染みがないという意味なのか、このアンケートでは分かりません。ただ、メディア論や都市論の側から言うと、一般的に言って、「きれい」すぎる空間というのは人間が落ち着いて住める場所ではないんです。あまりに「きれい」すぎると、どこか居心地が悪くなってくる。ストレスやノイローゼみたいなものも出てくる。ニューヨーク大学のテレンス・モランやニール・ポストマンが提起したメディアエコロジーという領域があります。エコロジー的にも、ある種の汚れ、あるいは胡散臭さがないと生きていけない、面白くない。そういうことが一般的に言えるんじゃないかと思います。

世界の都市を見渡しても、ニューヨークにしても、イスタンブールにしても、上海にしても、きれいな場所が

あると同時に胡散臭さい場所が必ずある。むしろ胡散臭さの度合いで都市の活気を測ることもできるんじゃないかと思います。これは我々の体の構造とつながっていて、身体というのは決して幾何学的にできていないわけです。それに対して普通「きれい」というのは——この教室もそうなんですけど——幾何学的に構成され、整理整頓されている空間です。身体の方は、もっと無定型の空間、雑音やノイズやカオスがある空間を求めるところがあるにもかかわらずです。

ベルリンの壁が崩壊した後、ベルリンは非常にきれいになっていきます。しかし、前のベルリンを知っている人にとっては「清潔すぎる」ということでとても居心地が悪いんです。僕が一九九〇年、ベルリンの壁が崩壊した翌年にいったときに八ミリビデオを回して取った映像がありますので数分間見ていただきたいと思います。

〈ビデオ上映〉

これは西側のベルリン、西側から東を見ているんですが、この壁にはおびただしい数の落書があります。政治的なプロテストの落書もありますし、もっとアートの的な落書もあり、非常に多様でした。これが今、壁が崩れたことによって全部粉々に砕かれてしまいました。壁が崩



壊した直後、記念として持っていきたいという人、これを砕いて売る人が殺到したわけです。そういうこともありましたが、今ほんの一部を記念碑として残しているだけで、大半はなくなってしまうました。こうした落書には、ベルリンの壁が持っていた意味がまさに込められているわけです。ここにどういう人が来たのか、どういう

人が住んでいたのか等々が、こういうものを見るところからうかがいあがってくるわけです。と同時に、東西冷戦体制のなかで出来上がった無味乾燥な壁がこういう落書によって、ある種の潤いを持ったことにも注目したいと思います。これら落書の描いた人はみな匿名です。サインをしているものもあるかもしれませんが、すぐさま、その上に誰かが絵をまた描いてしまいます。そういう意味で落書は、非常に協同的な作業であると同時に、匿名の作品なのです。それからもう一つは、非常に素晴らしい落書があるとしても、それを例えば、自分の家を持って帰りたいと思っても、それこそ壁を碎かなければ持って帰れないわけです。今、現代美術というのはお金を出せば私物化できるわけですが、この絵は誰にも私物化できないのです。そういう意味でも落書は本当の意味の「パブリック・アート」の位置を占めるというふうに言ってもよいと思います。ベルリンの壁は、地域の人たち、旅行者、あるいはわざわざ海外から出かけてきて描いた人もいますが、そういう人たちによって描かれ、それによって無味乾燥な空間が活気づいたということなんです。もっと意図的に、例えば市がアーティストにお金を出してそういう絵を描かせるという事もすでになされていきますが、そうした管理的な落書には限界があつて、やは

り落書の魅力というものは下側から出てこないダメという事です。

次にもう一つ見ていただきたいんですが、これは南カリフォルニアの地域の落書です。カリフォルニアというのはご承知の通り、自動車を中心に発達した都市です。ですから、基本的に高速道路とかコンクリートの建物とか非常に無味乾燥な雰囲気の間として出発しているわけです。巨大な建物や高速道路があちこちにできたのは、一九五〇年代の話ですが、落書は最初はそういう白けた空間にメッセージを書くとか、ただ汚すとかをしていただけなんだけれども、次第にもつとアートの試みが増えられるようになりました。

今日はこの話はあまり詳しくできませんが、一九八〇年代になると、落書が現代アートの重要なジャンルの一つになったのです。落書は、ヒップホップの音楽、ブレイクダンス、スクラッチ、ドイツのノイズミュージックなどと相互につながりを持ちながら現代アートを活気づけてきたわけです。つまり、のっぺりした空間がある種の猥雑さというノイズを取り入れていくという、これはもう有機体の必然的な傾向なんです。今までノイズとしてしか考えられていなかったレコードのスクラッチ音がアート表現になったのです。それまで醜悪なものとし

てしか考えられなかった落書がアートと見なされるようになるのもこの時代の特徴です。

今映っているのは一九八〇年代後半の映像ですが、南カリフォルニアの非常に無味乾燥な場所が落書で急速に活気のある場所に変わったことをちよつと見ていただければと思います。それと、落書はスプレー缶というものが登場してから広まるのです。確かに筆やチョークなんかで描く落書もあったわけですが、一九七〇年代以後、スプレーで描く落書が登場し、主流になる。

今、見ていただいた例はいくらでも挙げられるわけですが、いわば「きれい」すぎる空間をもっと居心地のよい空間にしていく方向としては、落書をたくさん書くということも一つの方向であろうと思います。だいたいの無味乾燥な空間というのは、例えば「屋台」とか「場末」の雰囲気完璧に欠如した殺菌された空間になっているわけですね。そうじゃない方向に持つていくと言うことは、それほど難しいことではないはずですが。現実には新しい都市政策として「きれい」すぎる空間というのを造らないで、むしろある種の汚れのようなものを造っていくことが始まっています。デパートなんかでも、一見「屋台風」の空間を造っていくというテクニクがすでにあるわけです。ですから、依然としてそのツルツルの、幾



何学的な空間しか造れないというのは、管理の上から言っても非常に下手だというふうに言わざるをえないのです。ですから、これは特に管理をしている人達に強調したいわけですね。でも、もはや、ツルツルの幾何学的な空間をモデルにした建築物を造っていくことはもう時代遅れなんだよということですね。しかしながら一方で言えることは、そういったある種のゆらぎを持った管理というものが、内向した管理というものが、今の管理体制の中にはつきりとして入ってきているということですね。ですから、うっかりある種の汚れをもったような空間が良いと

思っていると、それは実は人工的に造られたカオスだということがあるわけです。僕は東京経済大学におられますけれども、今一般に全ての大学の管理体制が強くなってきました。特に警備は非常に嚴重になってきています。これは一つは、以前よりも強権的な意識が管理者に強まったということよりも、もつと物理的な理由があります。つまり、管理を警備会社に委託してしまうわけで、そうすると、これはもう管理会社は契約でやつてるわけですから、間違いがあれば契約違反になるので、ミスをできないわけです。そうなればマニュアル通りに管理していく、つまりある時間が来れば門をきちんと閉ざす、建物を閉めるというふうになってくるわけですね。その結果として非常に機械的な管理体制が強まっていくということであると思います。今、大学では実際に何か怪しげな人が来るわけでもないのに、外部の者を締め出すという傾向がどんどん強くなってきました。その際、こうしたキャンパス分断というのは、内部からも起きているということに注意する必要があります。そういう事について学生自体が慣れきってしまうと、今度は逆に外部の人がふらふら入ってくるような状況に嫌悪感を持つたりするという要素が出てくるわけです。今進みつつある問題は、大学と都市とが外部的に分断されているだけではな

く、大学の内部の建物と建物とが分断され、さらに教室の中で学生と学生が分断され、学生が孤立化することです。つまり分断といっても、単にその外部的な力で分断されているだけではなく、マイクロなレベルでの分断というのも起こっているんです。

都市管理である種の「ゆがみ」や「汚れ」というものを人工的に造っていくような方法ができてきているというような話をしました。そういう意味で今の管理というのは、非常にしたたで、手の込んだものになってきているわけです。それにくらべれば、大学の管理というもの



はまだ旧態依然としているところがあつてある種の禁止条項でやっていると申うんです。ここからは、学生にとつてはむろんのこと、大学当局にとつても、あまりプラスの面は出てこないんじゃないかと思ひます。

大学はもうほとんど企業化しているわけですが、その企業としては非常に遅れた状態にあると言へます。企業はリストラをやつてゐるわけです。しかしながら、大学はリストラをやつてゐるかというところ、教授の選任期制のような事を導入しようとしてゐるぐらゐなのです。二十代の学生数が、今後減つてくるという見込みがあります。そういう状況に対応するためのリストラをやろうとしてゐるんだけれども、今の企業が特に、例えばアメリカの企業なんかをやつてゐるようなりストラをやつてゐるかというところ、全然やつてないわけです。だから、この分では、企業として考えた場合も大学というのとはかなり行きづまつていくんじゃないかと思ひます。僕が大学に関わつたのは一九七二年からですから、もうかれこれ二十何年前になつてしまふんですけれども、その中で感じたことは、大学つてゐるのは都市と密接な関係をもつてゐないといふメなんだということです。それからもう一つは、大学の物理的な適正サイズというのがあつて、あまりに巨大な施設をもつた大学というのは、非常に居心地が悪いとい

うことです。これは都市についても同じことが言へます。非常にだだっ広い都市よりも、小さくまとまつた都市の方がおもしろい文化や、おもしろい人が出てくるということが言へるんじゃないかと思ひます。

大学というのは通常「university」の訳だと言われるわけですが、これは総合大学という意味であり、「college」の単科大学と区別するわけです。その場合にいつたい「university」つて何なのかというところ、これは大学が誕生した時から考へてみるとずいぶん意味が変わつてしまつた。大学は、中世のヨーロッパで生まれんですが、もともと、それぞれその考へや利害の異なる学者教師が自発的な同意で結ばれた、ある種の組合員あるいはギルドで、そういうものが「university」のもとの意味です。つまり大学の基本は、共通意識や協同性だつたわけです。ところが今、「university」はいくつも学部があるという大学、つまり単科ではなく総合的な学校という量的な意味になつてしまいました。もともとは色々な人、色々な職業の出身の人、色々な考へをもつた人がいる質的な単位が「university」だつたのです。これが量的な意味に変わつてしまい、当初はある一定数の小さな組織だつたものが、今度はこれが組織の集合になり、そして巨大な制度になつていってしまうのです。そうい



う歴史をたどってきているわけです。それから、初期の大学ってというのはキャンパスをもつてなかったというところを知っておく必要があるのではないかと思えます。今キャンパスのない大学はないと思えますけれども、イタリアのボローニャなどの初期の大学は、ある種の「移動塾」みたいな形態をとっていて、教会のある施設を借りるような形で始まったわけです。ところが今や大学というものは量的な一つの空間になってきて、「大学はディ

ズニールランド」になるべきだというふうな言い方をする人もいるんです。これはドイツニールランドにかわいそうではないか。つまりドイツニールランドはエンターテイメントスペースですけれども、大学は全然エンターテイメントのスペースになっていないのです。つまり、サービスマスの空間というふうに考えても、大学は非常に遅れている部分があるわけです。

しかし、大学はもともと企業とは別のルーツをもっているわけですから、企業になろうとしても、どこかでそのなれないところがある。そういう意味で大学自体がもっている問題は、ものすごく深刻だと思えますし、特に日本の場合、非常に深刻ではないかと思えます。今後、大学は、企業的な方向に行くものが増えると思いますが、最終的には、大学のもともとの形を求めているのではないかぎり、大学の意味はなくなるのではないかと思えます。

僕は昨年、カナダの大学でワークショップをやったのですが、あとで主催者の教授や学生たちと話をしていることを知ったときは、教授会に、学生代表が出席していることを知ったときでした。学生は、教授会でどういうふうな事が決定されたか、どういうふうな事が議論されたかという事を逐次知っているのです。そういう事は、六〇年代の全共闘運動の時に学生から要求がだされたことはあ

ったわけですが、それはもちろん実現していないわけです。また、我々はそういうことが他国の大学で行なわれているということすら知らないのではないかと思えます。日本の学生は後から、学生に関係のある一部の内容を、結果だけ知らされるわけです。

日本の場合は、企業の方も根本的な問題をかかえていて、学校の企業化の方もそう簡単にはいかない。学校をふくめた組織全体がかかえている大きな問題があつて、その辺の話をやっていくとこれはほとんど明るい話にならないのですが、大学を協同性の場としてとらえなおすために、僕自身が二十数年ささやかながらやってきたことをいくつか紹介してみたいと思えます。

これは一見子供ポイ例で、ほとんどそれがキャンパスの活性化につながつたかどうかは疑問です。しかし、少なくともやつてる一日とか数時間は、キャンパスが活性化したということが言えるので、それをちよつと映像で紹介したいと思えます。

僕は和光大学で現象学という講座をやっていたわけですが、僕がやる現象学というのはある種の文化論、いまで言う「カルチャラル・スタディーズ」でした。いろいろな問題を扱ってきたわけなんですけれども、さまざまな学生が集まってくれて、学生数は非常に多かつた。し

かし、登録数にくらべて、出てくる学生の数はそう多くないわけで、レポートなどの採点をする時になると、矛盾を感じるようになりました。もつとも、実際にとつている八百人が来ても、まず座れる座席のある教室がないわけですから、非常にバーチャルな事態になつてくるわけです。これはおかしいのではないかと思ひました。少なくとも選択した以上、学生と教師が一回くらい顔を会わせてもいいのではないかと僕は思ひまして、何かうまい方法はないかと考えてたわけです。そんなとき、かつてスターリンというバンドで悪名をとどろかせた遠藤ミチロウ（彼は、前からぼくのメディア論に興味をもつてくれて、ときどき会つて話をしたりしていたのです）が、「八〇〇人は非常に魅力的だなあ」と言い出したのです。つまり、八〇〇人を本当に集めてくれれば、ロックコンサートやつてもいいよと言ひ出したわけです。それで、僕のゼミの連中が主体になつて、いろいろな方法を考え始めたわけですね。試験をやるということにすることは決まつていました。問題はやり方です。最初は、ゼミの学生たちも、本当にできるのかと考へていたようで、途中で自信を失う場面もありましたが、だんだん盛り上がりついで、本格的にロックコンサートをやるうやということになつたわけです。しかし、実際にコンサートをや

ると言った場合に場所がないわけです。普通の教室でやるのかと最初は言っていたのですが、やるならば八〇〇人集めてやるうとなりました。そうすると、後はもう体育館しかないわけです。ところが、ご承知のように体育館というのは体育会系の聖域ですので、ここを犯すということは、いろいろと問題が起きてくることが予想されたわけですが、もう体育館でやるしかないというので、ある日その体育館をいわば不法占拠したわけです。もちろんスターリンのコンサートのことが万が一学校側に伝わってしまうと電源を切られるということがあるので、電源車も用意しました。こういう「陰謀」は我々関係者しか知らないということでもやらなければ面白くないわけです。ところが、それが漏れてしまったのです。ミチロウが契約しているレコード会社がマスコミに情報を流したらしいのです。当然、学校が騒ぎだし、一旦は中止しました。そして、ほとほりをさました時点で抜き打ちでやったのです。実現までには、色々大変でした。その時のビデオをちょっと見ましよう。

〈ビデオ上映〉



(「ニュースキャスターの声」「非常に珍しい大学の後期試験の話題をお届けしたいと思います」)

マスコミのニュースとして見ると非常に単純な話になってしまっているのですが、実際はそんなまやさしいことではなくて、ゼミの学生とスターリンのバンドの人達が機材を運んでセットアップするわけですね。これにも数時間かかるわけです。ですから、むしろそのプロセスのほうが重要なわけなのです。体育館の床はツルツルですから、演奏中に卵なんか飛んでくると、ミチロウは滑りそうになる。そこで、床を拭く。学生にとっても、僕にとっても、ミチロウにとっても新しいチャレンジだったということが功を奏したと言えます。ゼミの学生側からすると、こういうコンサートのセッティングなんかやることががないわけで、そういう意味でも非常に良い体験したわけです。セットアップするうちにたちまち開演の時間がせまってきて、学生たちがグラウンドに集まってくるわけです。グラウンドに何故集まったかというところ八〇〇人全員が集まれる場所はそのしかなかつたからです。大卒して、いいかげんですね。八〇〇人も取っているのに、指定の教室のキャパは三〇〇人なんです。演奏中、ミチロウは、「紙に学籍番号を書いて教務課へ持っていかない、単位はやらない」とアジったので、学生は教

務課に殺到し、大混乱を起こしたりもしました。その後、教務課長と僕との間でかなり深刻な議論がおこなわれたわけですが、最終的に、僕はこれを機に大学をやめたわけです。しかしこのときのことはいざらぐのあいだ和光大生のあいだで語り継がれて、キャンパスを自分たちの力で異化してみようという試みを続けた学生たちもいました。おもしろかったことでもありますし、こういうことやったのは無駄ではなかったと思います。

今日では、空間を異化するという試みをやってもなかなか、そうはならないという状況が出てきています。こういう状況は非常に構造的な面があります。やる側、仕掛ける側が駄目なんだとか、あるいは企画自体が駄目なんだとかっていうこともあるかもしれませんが、決してそれだけじゃないのです。講義とかゼミなんかで見ている、学生が、非常に孤立している感じがするわけです。アンケートにもありましたが、なかなか教師に学生が質問に来たりしないわけです。だから、大学を協同性の場にしようとしても、その手がかりが見出しにくいのです。僕は昨年からインターネットを使ってゼミで一種の「ハイパーゼミナール」というものを始めました。ゼミ生に強制的にインターネットを覚えてもらって、一週間ぐらいでメールを出せるようにしてもらった。そして、



ゼミのメンバー(十二人)とにかくゼミの時間外に僕にメールをよこす、それから、お互いにいろいろなメールを送り交わすという事をやっていこうという試みを始めたわけです。これはある意味では非常に面白いが、ある意味では大変なんです。ものすごい数のメールが取り交わされています。また、ゼミの最中には全然言わないこと、ゼミの悪口やゼミの方向性などの問題もEメールでどんどん流れるわけです。電子メールの世界では、それが活発に議論されていると、もちろん慣れがありますが、それから全然意見を言わない人もいるわけですが、その内部で顔を合わせているよりは、もっと忌憚のない意見が出てくるのです。ところがおもしろいのは、ネット上の話を翌週のゼミで議論しようということやると発言がなくなるんです。これは、否定的にも解釈できますが、僕は、逆に、電子メディアの世界にはまだ協同性の場が残っている、あるいは、協同性を呼び戻す可能性があるという風に解釈した方がいいと思うのです。

以上の例は我々の情報環境、メディア環境などコミュニケーションの方向性が今激変しているということと無関係ではありません。コンピュータが浸透した時代には当然、それに応じてコミュニケーションの方式も変わってくるのです。僕はこれまで大学キャンパスを含むス

ペースの活性化ということを身体との関係で考えてきたのですが、それは、無味乾燥とした無機的な空間の中に、身体のだろどろした要素を投入してみよう、そうすることによって無味乾燥だった空間が活気づくのではないかということでした。

そういうやり方は、これまでは成功したと思うんですけども、そういう方法だけでは、いかなくなってきたのが今日僕らが直面している状況だと思います。その時に何かインターネットのような電子テクノロジーのメディアとかが何か一つのカギを与えてくれるのではないかという感じをもっているわけなんです。

かつては、コンピュータにのめり込む人というのはいわゆる「オタク」が多かったと思うんです。しかしながら、今、インターネットをやっている人、コンピュータにのめり込む人は、八〇年代のオタクとは比べたら、比べ物にならないくらい、もっと孤立しているんじゃないかという気がするんです。そういう人達が、いまの大学キャンパスの中で生きているわけです。そしてその一方で、ますます個人を孤立させる管理体制があるわけですね。

そうすると内側からと外側からの両極から、その空間をますます味気無いものにしていくというベクトルが働くわけです。その場合にももちろん管理体制の方は、管理化



を批判し、壊していくしかないわけですが、内側からそれを補強してしまっている学生の意識というもの、これは単に管理空間の中に、具体的な異物を投げ込むことによつてだけでは変わらないんじゃないかと思ひます。

その時、電子メディアを使う、単にインターネット万歳じゃなくて、インターネットのネットワーク性を何か新しいやり方で使う必要があると思ひます。コンピュータというものを、情報処理の技術としてだけ考えていくと行き詰まってしまうでしょう。むしろ、最終的に、自分の身体的な場を見出すような技術として電子テクノロジーを使つていく。八〇年代のミニFMの面白さ、歩いて行ける五〇メートルたらずの至近距離で放送すると、聴いている者は、その放送現場に行かざるをえなくなるんですね。普通、放送つてというのは遠く離れていて情報をとれる点にメリットがあると考えられてきたわけです。しかし、ミニFMは、何か気になる空間が身近にあるつていうことを知らせるものとして機能してきたわけです。そして、そういう現場へ行つてみると、そこには想像しなかつた人がいるとか、いろいろな発見があります。そこで人と出会うということが面白かつたわけです。それと同じようにインターネットは通常グローバルなメディアだと、今ここが即地球規模の情報ネットワークである

ということがしばしば強調されるわけですが、必ずしもそういう距離を無くすメディアとしてではなくて、むしろ至近距離でインターネットを使つてもかまわないわけです。インターネットでメールをやりとりして、それで終わるのではなく、その人とその最終的に出会うのが面白いです。

ですから電子メールを距離を引き離す道具としてではなく、人と人とを結びつける道具として、使つていくならば、これは非常に面白い要素をもっているんじゃないかと思ひます。そして今の大学キャンパスの空虚さというものは、何かそういう電子メディアの要素を活用していかないと、脱出できないんじゃないかと気がするわけです。

(こがわ てつお・メディア批評家)

この講演録は一九九六年十一月二十二日に行なわれた、関大生協組織部主催の講演会を編集したものです。

書評編集委員会

《寄稿》

「ひどさ」については、シバさんあなたも敗けていませんね。

——『週刊朝日』はなぜ司馬遼太郎の講演記録を連載するのか——

蘆田東一

『週刊朝日』一九九六年一〇月一八日号に「司馬遼太郎が語る日本」という講演記録の第二二回目が掲載されている。

亡くなった人の言説を掲載し続けるということはどういうことになるのだろうか。いわば遺書が連載されているわけである。連載を受け取る側にとっては、送り手側にたいし、掲載されている文の再考も変更も求めることができないものである。いわば、言いつばなしの話を何回も続けているということである。

一 「『大日本史』……私は呼んだことはないんです。いま読むに値するような本ではありません。」

次は、この一〇月一八日号の司馬遼太郎（本名 福田定一）の講演録の一部である（五八頁）。

水戸黄門で有名な徳川光圀（一六二七—一七〇二）が、『大日本史』の編纂を目指しましたね。その死後にもたいへんなお金をかけて、水戸徳川家がつぶれそうになるくらいの努力を傾けて、日本の歴史を編纂した。

私は読んだことはないんです。いま読むに値するよ
うな本ではありません。それは朱子学を正義のイデオ
ロギーにした歴史書です。どの天皇が正か聞か、楠木
正成は偉い、足利尊利氏は逆賊だ、と言うようなもの
でした。

司馬(福田)が健在で、速記録に自分で目を通して
いても、やはり、「読んだことはないんです。読むに値す
るような本ではありません。」をそのままにしていただ
ろうか。すこしは表現を変えたのではないだろうか。

しかし、『大日本史』を「読んだ」とか「読まない」
の問題ではなく、『大日本史』が、どのようなものであ
るかを少しでも知っていれば、「読んだことはないんで
す」とは言えない。『大日本史』は、小説などのように
読んだとか読まないで語るものではないといえよう。

私が気になるのは、読みもしないで、どうして読むに
値しない、と言うのだ、というような問題ではない。『大
日本史』が、どのような思いで編まれたかということに
ついて、何の感慨もわかないのだろうかということである。
人々の精神的な遺産に対する無知と傲慢がみられるとい
っても仕方がないだろう。司馬(福田)という男の精神
はそれほど乾燥していたのであろうか。

たとえば、植手通有が、国体論がさかんであった少年
時代に、父親に誕生日のプレゼントとして欲しいものを
問われ、『古事記』(こじき)と答えたところが「乞食」
(こじき)と受け取られ、また有名デパートの書籍部で
も、『古事記』といつてもすぐにはわからず、店員に変
な顔をされた時のエピソードを紹介している(日本古典
思想体系月報31「国体論をめぐって」)。司馬(福田)の
講演は、戦前の国体論全盛時の風潮と裏返しで通じると
ころがあるともみるのがちすぎだろうか。

無思慮な俗見を披露するのはデマゴーグの仕事である。
『大日本史』の本紀が後小松帝で終わるのは山鹿素行や
新井白石にも共通した王朝交替史観を受け継ぐという尾
藤正英の見解もある。神武以前のことにについては「神代
は怪異の事ばかりに候て、神武の口へものせがたい」と
する光圀の合理的思想の側面もある。光圀の合理的思考
は、正統性への観点からでたものである。しかし、これ
が逆に、道あるいは制度の製作者として天照大神を見る
という「国体論」展開を妨げてもいるのである。

歴史小説を書くことを職業とする者が、しかも江戸時
代の精神史の講演をする者が、『大日本史』を読んでは
ない、ということ、決して自慢げに語って良いことでは
ないだろう。読むことができなかつたにしろ、せめて体

「ひどさ」については、シバさんあなたも敗けていませんね

裁だけでも見学し、「修史」に携わった多くの人に思いを馳せることがあってもよい。歴史についてかかれたものや歴史小説はそのような多くの読者をもっているのである。その思いに及ばない人が書く「歴史小説」とはどんなものなのだろう、と思ってしまう。

「作家失格」を告白するのは勝手だが、このように「読んだこともない、読むに値しない、朱子学を正義のイデオロギーにした歴史書です」と公言してしまうと耳を覆いたくなる。その時代の精神的遺産を否定につながることを危惧する。

このような傲慢さは知的不快感をもたらす。それは戦前『大日本史』が最高の歴史書として、当時を代表する知識人に評価を受けていた時、東京大学史学科系統の歴史家つまり抹殺博士重野安繹や三浦周行・三上参次らによつてなされた道徳主義的評価のために事実を歪めているという『大日本史』批判によつていのは確かである。その批判の尻馬に乗って踊っている姿である。例を替えれば『古事記』『日本書記』を神話だと抹殺しうるだろうか。

林家を中心とした『本朝通鑑』の編輯との関係や中国の史書編輯の伝統も踏まえて、行われたこの大事業にはいわゆる古学派の人達も参加しているのである。



二 荻生徂徠の方法は人文科学的認識か

同号五四頁に熊本の儒学者秋山玉山が、熊本の藩校では「古学、荻生徂徠の古学をやりましょう」といったというを紹介している。そのことは、

秋山先生にすれば、朱子学は理屈だらけの学問でした。当時、虚学とささいわれ、形而上性の高い学問でした。それに対するのが、荻生徂徠の古学でした。徂徠は、朱子学は理屈っぽくてだめだと主張したのです。宋以前の、孔孟の教えを実証的に読もうじゃないかと。要するに、人文科学的な方法でやりましょう、という主張です。

になつてゐる。また同号の六〇頁にも

しかし一方で、考証学が興ってきました。これは江戸中期の荻生徂徠の近代的認識の仕方、モノやコトを人文科学的にとらえようという考えと同じでした。

といつてゐる。司馬(福田)は、『大日本史』はもとより、荻生徂徠の代表的なものも読んではいないのだろう。

荻生徂徠の『弁道』二二節は、

先王の道は、天を敬し鬼神を敬するに本づかざる者なし。これに它なし。

にはじまる。さらに

後世の儒者は、知を学び、理を窮むるを努めて、先王・孔子の道壊れぬ。理を窮むるの弊は、天と鬼神と、みな畏るるに足らずとし、しかうして己はすなわち天地の間に独立するなり。

とのべる。「鬼神を敬すること」のどこが人文科学的か、また「知を尚び」「理を窮むること」は「天と鬼神と、みな畏るるに足らず」とするといつて非難することがどうして人文科学的かを述べるべきだろう。確かに徂徠は清朝考証学との比較で興味を持たれている。しかし、清朝考証学が漢代儒学の復興としてあることに意義があるとしたら、「人文科学」との関係はどうなる。もつとも清朝の学問の方法が考証学において実証的な方法論を獲得したことを、「人文科学」とは言わないまでも、中世的宇宙論的秩序思想に対抗する思想という意味での「人



文主義」になぞって言う場合があるかもしれない。そうならば、まず何より「鬼神」からの解放をいってこそ、その議論の第一段階にすることができるといえるものである。

このように司馬(福田)は、伝統的江戸時代体制の朱子学対近代的思考の古学派というまったくの「常識のうそ」でしゃべっている。実は、司馬(福田)がしゃべるような「常識」を言う人はいないのだが、司馬(福田)は、これが常識だと安心してしゃべっているのである。おそらく自分でしゃべりながら、よくわからないものだから「私は、これをこうだ、こうであるといった話し方はあまり得意ではありません。たとえば三原山の噴火口を見る場合も、噴火口のまわりを歩いて、歩いて、あとは察してくださいという見方をします。」と逃げ道を最初にこしらえている。しかし、これはもつと勉強した人が謙虚にいう場合であって、常識のつまみぐいをして、あとは適当に察してくださいはない。

司馬(福田)が、徂徠を近代的合理的思惟の先駆者と思ってしまうのは、丸山眞男による徂徠評価以降のことである。もちろん、司馬(福田)は先述の重野博士たちとは世代が違ひ、丸山よりも年下であるから、先行する精神状況については無自覚だったであろう。だから、丸山がやっとの思いで展開したことを常識だと思ってしまうのである。ところが実は丸山が徂徠を近代的政治的思惟の先駆あるいは体現

者だと言いつ切るにあつては、危ない橋を渡っているのである。「橋」のように見えても実は渡に耐え得ない橋のごときものを、とにもかくにも丸山は渡つてしまつたのである。司馬(福田)がもし、世間の人に自分の知見を披露して、ギャラを受け取つているのなら、まずそのことに疑問を差し挟むべきである。

すでに一九六九年、当時二十歳をほんの少し出たばかりだった津村喬が、彼の著書(『われらの内なる差別』三一新書)の中で徂徠と丸山の親近性を皮肉に指摘している。

司馬(福田)は『竜馬がいく』などの明治維新物で名を上げたが、結局、明治維新についてはわからなかつたのだらう。水戸学もとくに後期水戸学に至つては、あきらかに同時代的共通性というより、徂徠学あつての後記水戸学の成立ということから考えられる徂徠学とのことを、橋川文三が指摘している。それは水戸学『常陸帯』の制度論と『政談』巻の二の制度論における観点に見いだされ、水戸学の神々もしくは天皇はほとんど徂徠学という先生・聖人と同じ意味を与えられ、「神皇」によつて制作された不朽の制度の総体が、水戸学においてはじめて「国体」とよばれることになつたとする。

三 朱子学が侵略するか

『週刊朝日』同号六十頁

狩野(直喜)先生は昭和二十二年に亡くなりますが、病あつしと聞いて、(細川)護貞さんは病床にかけつきます。枕頭で、

「先生、なぜこんなばかな戦争をやつたんでしょう。なぜ軍部というものは、あんなへんてこりんな頭になつて、国家を谷底に落としてしまつたのでしょうか」と聞いたところ、狩野先生はこう言いました。

「朱子学のせいだ」

要するに、『大日本史』のせいだということでした。明治政府は、朱子学による皇国史観史観をつくつて、われわれはその弊害を受けました。

この話については、狩野の話というより、紹介している司馬(福田)の見解としてうけとめる。良く分らない話が多いのである。

まず、朱子学のような宇宙論的秩序理論を展開するものが、どうして侵略理論になるのかという素朴な疑問に答えられるだろうか。朱子学の中国や朝鮮で、朱子学と

「ひどさ」については、シバさんあなたも敗けていませんね

戦争をやる理論なり思想と連想する人はまずいないだろう。

「朱子学」というものが国家をひきずったり、戦争を起こしたりするだろうか、あえていうなら、大陸侵略せざるをえない衝動、それは当時の庶民の困窮生活状況の活路を開く唯一の道は、大陸へ活路を見いだすこと、これしかない、という思いこみをもたらす貧相な政治状況の表現として国体論があらわれるのである。ましてや「朱子学」がもたらすということがあるはずがない。あると言えばその青年たちの行動を理論家するために国体論的潤色がなされ得るということはある。

ここでも司馬(福田)は「朱子学」そのものについてわからないまま言及し、思想というものを自分で実感しないまま、想像で述べるので、思想が何かをするという、とんでもない結論を出してくるのである。

あえて、何が問題かといえば、大陸侵略にしか政策を見いだせなかった政治が問題で、大陸侵略にのみ活路を思いこんだ軍部、経済界、政界に有効に対抗し得る政治(戦略・主体・思想)を展開できなかったことである。

四 不足した正義についての議論

同誌同号五八頁

イデオロギーはなかなか訳しにくい言葉ですが、正義の体系という意味です。何が正義なのでしょう。お酒がいくらあっても足りないぐらい、酒のみの学問であります。酔っぱらわないと正義は出てこない。お互いに酔っぱらって、抱き合ったり、お前は敵だとか言い出す。

ここでいう正義というのは、法における正義とは違います。形而上的な議論における正義というのは、人類に大変な害を与えてきました。

自分で、良くわからない「正義」というものをつくりあげて、それと格闘し、あげく罪をなすりつける。そしてそれを批判してすつきりする。「ハライ」につかう「ヒトガタ」として「正義」が使われているようである。この引用箇所は実際、何をいつているのかわからない。この引用箇所自体が酔っ払いの、管巻きでしかない。酔っ払いの管巻き言葉が、議論に対する批判としての正当性を持つと言うのは、悲惨な状況ではないか。司馬(福田)にとつて議論とはせいぜい酒席の話題に過ぎなかったの

かもしれない。正義についての本格的な議論がなし得なかつた、という事が、私たちに悲惨な歴史として現れてくるし、私たちの歴史に圧倒的な存在感を持つている人というのは、「正義」について本格的にせまった人なのである。形而上だろうが何だろうが、良くわからないのは「正義」ではないのである。正義というものをわからなくする事がどれほど悲惨な状況を作り出したかという事を認識すべきである。日本の大陸侵略は本来経済的発想である。いかに潤色がなされてもである。問題はその潤色についての虚偽をはぐだけの議論ができるかという事である。まさかその虚偽こそが「正義」だとはいわないであろう。



司馬(福田)は、講演の最後の方に「東の海に浮かんでいる日本は、韓国・朝鮮から見れば今日なお野蛮な国だと思われています。つまり儒礼がきちっと行われていない国、それは文明がないことだといわれる。若い人も、どこか潜在的に思っているようですね。」と結んでいく。この脈絡がわからない。朱子学がきちっと行われていない「国」はだめだと言う事なのか。司馬(福田)はどんな意味で「儒礼」ということをいっているのだろうか。積尊などの儀式をいっているのだろうか。もし儒教の本質を加地仲行の言うように、民族に入り込んだ祖先崇拜にみる(「儒教とはなにか」中公新書)のなら、日本文化には儒教が相当深く根づいてしまっているということになる。

二月二日の毎日新聞のコラム「論説ノート」は韓国やアジアNEESの発展について、「儒教経済圏」という言葉がつかわれ儒教的伝統が発展の原因であったという理論があったことを述べ、韓国の韓昇洙副首相(元ソウル大教授)が「昔は韓国が発展しないのは儒教の伝統のためだとの理論が通説だった。学者はいいかげんだ」と、ジョークを飛ばしたことを紹介している。コラムの担当の重村智計は、韓国社会の発展の原動力を「脱儒教」のよう

五 藤原惺窩の一族は衰亡したのか

同誌同号五六頁

藤原惺窩（一五六一—一六一九）という人がいます。わが国最初のプロの学者ですね。それまで儒学は、公家やお坊さんのものでした。惺窩は戦国末期の公家の家系に生まれましたが、早くにその家は滅亡し、いわば流浪の身でした。その間、いろいろな所で儒学を学んだが、飽き足りなかった。その彼が姜沆という李氏朝鮮の朱子学者に出会い、日本における朱子学の流れを作ります。

藤原惺窩は、林羅山の「惺窩先生行状」によると、父親は冷泉家の人で為純といい、播磨の細川に知行所を持つていたと言う。並みはずれて賢かった惺窩は七八歳で出家している。しかし藤原為経『惺窩先生系譜略』によれば、惺窩一八歳の時に、父は兄ともに土豪に襲われ戦死している。そのために惺窩は叔父の寿泉和尚のいた京都の相国寺に住むことになる。

惺窩は「流浪の身」でもなければ、惺窩の家は「衰退滅亡したかつての名門」というようなものではなく、父は兄ともに襲撃され殺されるといって、一抹の正義も見い

だせない戦国末期に青年期を経た人なのである。

今、司馬（福田）のあげ足をとろうと言うのではない。「早くその家は滅亡し」いま「流浪の身」の惺窩では、公家の学問を生活の糧する零落した姿しかない。惺窩は流浪の身などでは断じてない。惺窩は日本歴史上かつてない、理のない時代—不条理という近代的な用語では語弊がある—を体験しているのである。

司馬（福田）の発言が、その時代への共感も、歴史的イマジネーションとでもいうべきものを欠落させているのは無視できないのである。惺窩が仏門から儒学への関心を示したのは、一家が襲撃して殺され、しかも、それがまったくの異常とはされないような時代に、現実秩序確立への激しい関心があったと考えられるのである。朱子学に関心をというより、「理」を中心とした体系に関心を寄せたのには理由があつたのである。

六 司馬遼太郎の世界

中西進が、「司馬遼太郎の宇宙（観）論」という講演をしていた。司馬（こと福田）の「歴史小説」はポピュラーでない歴史家の話をこっそり通俗化するやりかたである。よってたつのは単純技術史観である。これは一見合理的科学的であり、日本の高度経済成長にもマッチす



る。司馬（こと福田）が世間に受けたのは、その分かりやすいということである。しかし、実際には技術だけではない、司馬（こと福田）はその補完物として空海をもつてきている。

司馬（福田）が亡くなったとき、「どうしてこんなひどい国になってしまったのかとシバサンは言っていた」という発言を聞いた。地上げ屋の横行をはじめ金融屋・銀行などの活動をさしていったのだろう、「このクニのかたち」という題名もきにいらぬ。どうしてひどくなったのかは、自分自身、落語の大家さん級の教養で「知識人」になってしまふ精神状況のほうの荒廃ぶりも経済界政界に劣らず荒廃しているようである。

私たちとしては、「一歩も歩いていない町人」つまり、たくさんのエピソードは金にまかせて仕入れても、論理だった本など一頁も読まない人に「これはこうだ、こうである」と言うのを聞かされるのは、かなわないのである。

（あしだ　とういち・神戸山手女子高校、甲南高校講師）

この台地はそれほど広くはない。原形がどうであつたかは不明であるが、リゾート建設中の新設道路として選ばれたのがこの低い丘であつた。丘の上からリゾート地区に向つて緩やかな傾斜^①が続き、丘の麓を伝う広い舗装道路と直角に交わる。この坂道は道幅にして二十米位、その中央に石の杭を等間隔に打ち込み、それに鉄鎖を張つて分離線とし、右側通行の規則に従つて丘の上から見て右側が下り坂左側が上り坂で、舗装していない。

さて、この坂道を上下するのに、自転車が用意されている。指定された二米幅の坂を一回上下するのに十元？この坂道がどんな風に不思議であるのか、誰しも試してみたくないのである。私も試みた。自転車を借り出して



まず丘の上から下り坂の右側を下る。最初は二、三回ペダルを踏むのにひどく重さを感じたことは確かに覚えていいる。だが自転車が走り始めてから後のことはよく覚えていないのである。自転車のバランスをとるために、どのような力で、どのくらいの間ペダルをこぎ続けたのか、今は思い出す術もない。乗り慣れない、やつと足がペダルにとどく程の自転車に用心し過ぎて、もし失速して倒れでもすれば、という懸念の方が先行していたからかも知れない。しかもその坂道の距離は四十米そこそこであるから、あつという間の初体験である。せいぜい二十数秒、三十秒もかからなかつたように感じた。その時点では、不思議な坂道に対する実感は、人さまに説明できる程鮮明ではない。

上り坂の場合、下から頂上まで一気にこぎ上げられるかどうか、不安が横切る。四、五回こぐのに少しは力^{ツキ}んでいたのかも知れないが、急に脚力に異常を感じた。自転車が急に軽く動き始めたからである。全身の力を抜いてただ自転車のバランスとブレーキに集注するだけでよいのだ。音を立てない電動自転車みたいな感じになる。不思議な現象はここに在つたのだ、やつと体得した珍しさを楽しむのも束の間、頂上に達する頃には加速したようにも感じる程だつた。早目にブレーキをかけて無事試乗

終了したのである。

この珍しい現象の正体となると、藩陽ではまだ抓めていない。多分この丘の上部地中に強大な磁石鋼の埋蔵物があるのではないか、ということに落ち着いたらしいが、採掘して吸鉄力が減少しては元も子も失うので、在るがままの「怪坡」として、リゾート地域の目玉の一つにする意向のようである。

ところで、この怪現象を発見したのが、道路工事に従事していた自動車車の運転手だった。彼は九三年のある日この丘の下で誰もいないのを幸いに、エンジンをかけたままブレーキもかけずに車を止め置いて、外へ用足しに出た。最中に異様を感じて振り向くと、車が坂を上り始めたではないか。すわ一大事とばかり追いかけて、取り押えたのであるが人の姿は見当たらない。だが車は緩やかな傾斜を自力で上って行くのであった。——彼が最初の試乗者であった。

注

- ① 「怪坡」の勾配はせいぜい三、四度位いで緩やかな傾斜、土質は粘着力のある黄土。道幅は觀光用に広くし、写真で分かるように中央の仕切線に近い内側を自転車専用通路各二米程を取り、その外側は各八米程の自動車試乗専用通路で舗装をしていない。

白タクのクモスケ

次は珍しくも白タクのクモスケに巡り合ったこと。大連空港の待合室を出た突端、混雑する人波から現れた二十代の男「ホテルへ送ります」と日本語でいうと、慣れた手付きで私の荷物を取り上げ「どうぞ、どうぞ！」と私を促しながら人込みを分けて行く。一人旅の悲しさ、従わざるを得ない。予約しておいたホテルまで腹を決めた。発車すると後部座席に私と同席した彼は「これから旅順へ案内します」といい出す。逆らうのを止めて、旅順が最近觀光に解放されたことは承知している。六十年前に馬車で觀光したことなどを話し、帰途、是非案内してもらおうから、電話番号と姓名を教えよとやんわり迫った。運転手と彼の間で電話番号をどちらにするかで話合っていたが、結局私の要求通り紙片に書いて渡した。もちろん、それはウソか偽名かは知るよしもないが、次の事実から彼らはクモスケであることを証明したので、帰途その紙片を役立てておいたのである。

大連空港から大連駅前のホテル間、ホテル予約タクシーの場合でも五十元（当時一元は十三円）のところが彼らは二百元も要求した。そして支払ったが領収証を書

かなかった。

後日（昨年八月）北京へ行った時、右事情を話したところ、北京では「人民日報社」へ事実を報告することが、第一。同社から然るべき機関に通告する。同一人物が二回不正を行った場合、運転免許証は失効となる。

料金の内外格差

三年振りの北京でも珍しいことに出合った。それまでのように外国人専用とされていた「外匯券」フイホエチヤン Ⅱ外貨兌換券が廃止されて「人民券」に統一されたことである。そのために同じ箇所と同じ通貨を使うのに中国人と外国人の支払う料金が格差のあることだ。そのことは前から知ってはいたが、実際に当たってみると、私のような初体験者には社会の隙間がよく見える。

一つは天壇へ孫を連れて行った時のこと。入場券を買う列に並んだが、ここは故宮のように売場の窓口が別々でなかった。外国人も中国人も同じ窓口である。私は二人分を求めたのであるが、外国人は三十元（因みに中国人は〇・五元）、兌換したばかりの新券百元札を出した。その女性は抓んでいる札束から一枚、一枚と念を押すよ



うにして釣銭を重ねて四枚くれた。上は十元札であるから四枚でよいのである。だがお金のことだ、念を押すにはその場を離れてからでは遅い。長い後の列には気の毒だが、勇を鼓して数えてみた。十元二枚の下は五元二枚である。私ただ一言「不够哇」ブイコウワ Ⅱ足りないよ。彼女は負けていない。「這兒有麼」チヨールヨウマ Ⅱここに有るじゃないの」。言うが早いか一枚の十元札を窓口へほうりつけてきた。私は瞬時それを受取もせず、女性の目を見詰めた。彼女が目をそらすのを待って、それを受取って静かに退いたのである。序でにいえば、故宮では外国人と中国人の窓口が個別になっていて分かりやすく、間違いはなかった。



天安門入場料は三十五元と十元。故宮参観料五十五元と二十元に分かれていた。

二つ目は反対に、後になって私の方が赤面することになった。学会開催中の一日を遊覧に当て、北京市怀柔県から長城へ行った時のことである。大型バス五輛二百数十人の団体であった。

登山口から隊列を離れて、私は一人ケーブルの乗車券売場へと急いだ。ここも行列である。私の前にいた海外華僑の留学生らしい女性が乗車券のことと言い合いをはじめた。最後には身分証明書まで出していたが、ケリが

つかず諦めて出て行った。どちらとも興奮していたので、機嫌を損ねてはならない。都会ことばを遠慮して、つい田舎ことばになった。「来一個、来回ライイゴ クワイヘヒ往復、一枚おくれ」。切符をさつともぎ取り突き出したので、「多少トウシヤウ？」「いくら？」「二十塊アルシクワイ二十元」。難なく切符を手に入れてケーブルへ。乗れば五、六分間で尾根の上に着く。ここは第二線なので八達嶺ほど頑丈な構えではないが、尾根伝いにくねって走る長城の龍が長々と眺望できるのが特徴であり、谷は深く山に樹木が多く空気が冷たい。二十分間も同じ場所にいると下山したくなる。そのころ学会の集団が到着した。孫もその中にいた。やがて下山となると、疲れていたので帰路はケーブルにしたいという。往復二十元だったから十元だろうと教えたが、実際には四十元支払ったとか。下山してから分かったのである。これも二重価格の仕業であろうか。

漢字の遍歴 (7)

十干に続いて今回から二回に分けて十二支の漢字について、そのルーツを尋ねてみることにする。われわれの日常生活の慣習からいえば、十二支は十干とちがって、いつも身近に存在することばである。当然のことながら

中国でも同じことで、十二支のことを「十二・生肖」シニアル ショウシヤク又は「十二・属相」といい、人の生まれ年を聞く場合は「你属什麼(相)?」スイチモ(なに年生まれですか)、その答えには「我属子鼠、または老鼠」ワオス(子のねずみ年、またはねずみ年です)などとなる。

ここでは十二支を表わす十二個の漢字のルーツを尋ねることが目的であるが、俗にいう「当て字」であつて文字本来の意味とは直接関係がない。この点を理解しながらも、これら十二個の漢字は甲骨文の昔から已に十二支を表わす文字として定着していた事を考えると、意味は別としてもどこかでつながりをもつていたのではないか。このわずかな細い糸を手繰りつつ漢字がもつ神秘的な空間を尋ねてみようと思う。

子〔tsia・tsi・zi・シ、ね〕

甲骨文(図参照)各期の文字から理解できることは、明らかに子ども象形であるが、頭髮を長く伸ばしたのと丸坊主との二種類がある。前者は地支の「子」後者は「巳」と同形であるが、いずれも幼児を象つたものである。

甲骨文一、二期の「子」の足部は直線であるが三期以降は下部が稍湾曲を示し、さらに春秋以降の銅器銘文で

はその湾曲が顕著であり、おくるみに包まれた足部を表現するもの。これは今日では共通の見解となつている。『説文』ではこれを歴法十二支の「子」として次のように解説する。

十一月八陽氣動キテ万物滋(増)ス。人以テ稱ト為ス。

十一月は陽氣が活気を帯びて万物がますます増大する。人びとはこれ(「子」)を以てその呼び名とした。この解説から見ると限り字の成り立ちを表わす子どもと十二支の「子」との関係が全く無いのであるが、『段注』は次のように述べる。

此ハ「朋」(もとは神鳥の鳳を現わす字)ヲ以テ「朋党」(仲間意)鳳飛ブヤ群鳥万ノ数ヲ以テ従フ」とし、また「古ハ東西ノ「西」字無シ、鳥巢ノ上ニ在ルノ「西」字ニ託シテコレト為ス」

つまり六書の一つである仮借法により、既に常用されていた文字の中から同音または近似音の「子」を選び、これを十二支第一番を表わす文字としたのである。

丑〔tiau・chou、チュウ、うし〕

甲骨文各期及び全文の字形は、いずれも古文字の「手」に鋭い爪がついている。

郭沫若は「丑ハ爪ノ形ヲ象ル」といい、葉玉森も「手ノ形ヲ象ル、其指ハ或ハ伸ス、手ノ古文ニ似ル」と述べている。

『説文』は「紐也（ひも、むすぶ、むすびめのこと）」とし、さらに次の解説を加える。

十二月、万物動キテ事ヲ用フ。手ノ形ヲ象ル。

十二月は万物が活動して大事を執り行う。手の形を象る。

これに対し『段注』は「十二月ハ陽氣上昇シ、雉ノ雄ガ鳴キ、鶏ガ卵ヲカエス。地ハ以テ正ト為シ、殷ハ以テ春ト為ス」と注釈、さらに「人ハ是ニ於テ手ヲ挙ゲ有為ナコトヲスル。又ハ手、其ノ三指ヲ連綴（連り続ける）スルハ意欲ヲ象ル」と述べている。

寅 (jien · yin、イン、とら)

郭沫若が甲骨文に見える「寅」の字は「弓矢ヲ象ル」としているのが、甲骨文の「弓」は別の形（近キヲ以テ遠キヲ窮ム。弓ヲ象ル）『説文』であるので、的確に言えば矢を象形したものと理解すればよい。『説文』は「寅」を次のように理解する。

寅、馘ナリ。『段注』はこれは誤りである、と指摘し「寅ハ万物ノ始メテ生ルルヤ蟪然タル（みみ



ずの如し）ヲ云フナリ」とも解く。

正月陽氣動キテ、黄泉ヲ去リ上出セント欲スルモ陰氣尚強キナリ。二達セズ下ニ馘寅スルヲ象ル。正月は陽氣活動し地中の水が上に向って出てこようとするが、陰氣がなお強い。（故に）陽氣が屋根の上まで行きとどかないさまを象る。（「馘寅ハ誤り」と注す）

卯 (mog · mau、バウ、う)

吳其昌は、「双刀ヲ並び植ツ形ヲ象ル」、胡小石は「事物両断ノ形ヲ象ル」、林義光は「卯ハ兜蓋（かぶと）の

古字」などと解説する。王国維は「卯ハ劉ノ仮借字ナルカ」と云う。劉は「殺」を意味する。『説文』は次のように解説する。

卯、冒ナリ。(『段注』：卯トハ茂ヲ云フナリ)

二月万物ハ地ヲ冒イテ出ズ。門ヲ開クノ形ヲ象ル。

故ニ二月ヲ天門トナス。凡ソ卯ニ属スルハ皆卯ニ從フ。

陽氣は二月に至りて初めて地から出る。故に「春門」とも云い、ここで万物が一斉に出るのである。

辰〔em・chen、シン、たつ〕

『説文』では次のように解説する。

辰、震ナリ。三月陽氣動キ雷電振フ。民ノ農時ナリ。物、皆生ズ。

その昔「震シン」と「振シン」は適用す。「振」(ふる)は「奮」ふるむの意。また「辰」は「伸」に通じ「物皆伸舒(ゆるやかに)のびるさま」ニシテ出ズルナリ。季春三月、生氣方ニ盛ントナリ、陽氣発泄(もれ出る)ス。二月雷声ヲ発シ、初メテ電至ル。三月、大イニ振動ス。詩経幽風『七月』の農民生活を引用して「故ニ民ノ農時ナリ」(段注)と。甲骨文の研究者は『説文』とは別に「辰」は「蜃」の

初字と認め商代に使用された農具である、とする。即ち大きな貝の殻の背に二つの孔アナをあけ、それに紐をつけて親指にしぼり、穀類の穂をねじり取る道具、後世にこれを蚌鎌(どぶがいの草刈鎌)という。本来これは圓弧形であるが甲骨文が四角形になっているのは、刀筆で刻したためであろう。

巳〔tsi・si、シ、み〕

ト辞では「巳」と「子」とが同形の字を用いており、また別に祭祀の「祀」にも当てている。この現象を見ると「子」が原形であろうと思われる。だが甲骨文の初期には「カギ形」をしたものがある。これを殷代及び周初の鐘又は樂器の一種ではないか、との考え方もある。『説文』はその小篆でも分かるように、最初から「子」と「巳」とを別個の字形としている。即ち：

四月陽氣巳に出デ、陰氣巳ニ藏ル。万物見レ、文章ヲ成ス。故ニ巳ヲ蛇トナス。象形。

『段注』によると「巳ハ像ル可カラザルナリ。故ニ蛇ヲ以テ之ヲ象ル。蛇ハ長ク宛曲シ尾ヲ垂ル。其ノ字蛇ニ像ル。則チ陽巳ニ出デ陰巳ニ藏ルナリ」と解説する。

(しばた　みのる・元文学部教員)

連

載

《研究余滴》

フランス詩の歴史（その四）

第一章 中世のフランス詩

（その四）新しい抒情詩の誕生 シャルル・ドルレアンとヴィヨン

山村嘉己

1

叙事詩の全盛であった中世にも、いくつかの抒情詩の芽生えはあった。とくに宮廷恋愛詩には当然のことながら、みづみづしい愛を夢みる恋人たちの心をうたつたものは少なくなかった。しかし、近代のわれわれにも通じる個人的な情愛が歌い出されるには、その心を歌うに適した詩形と、他とは際立った個人的な体験とがなければならぬ。自らの不幸な体験を通じて、新しい抒情詩への途を開いた詩人として、われわれは先ず、シャルル・ドルレアン(Charles d'Orléan 一二九四～一四六五)の

名を忘れることはできない。

かれはシャルル四世の甥というすぐれた家系に育ち、若くしてアルマニャックの領主となったが、フランス全体を襲った百年戦争に駆り出され、一四一五年アザンクール(Azincourt)の戦いで傷つき捕虜となり、その後二十五年にわたって虜囚の身となった。厳しく扱われたわけではなかったにしても、実に四半世紀にわたる不自由な生活を憂儀なくされたのである。そのかれが、長い俘囚の身を憂え、ドーバーに面したところで、遠く祖国フランスを望んでものしたのがつぎのパラードであった。



遠くフランスの国を望み見ながら
ある日 私はドーバーの海に面して
その国でいつも感じていた甘い歓びを
心に思い浮かべることができたのだった。
かくて 望郷の思いにわかにつのり
わが心に深く愛するフランスを ただ眺めて
かくも喜び溢れるとは思ひもしなかった。

かくも行くのため息を心に秘めているとは
まこと愚かなことと私は知った。
すべてに幸せをもたらず美しい平和への道が

かくて私の目に見えはじめた。
それゆえ 私の思いは熱く燃えさかった。
しかし、わが心に深く愛するフランスを
ただ飽かずに眺めるしか道はなかった。

かくて「希望」の船にわが思いのすべてをのせ

一刻いっときもとどまることなく 海を越え
フランスへ届けと祈りを捧げ

フランスにわが挨拶を送るのみ。

ああ神よ 速かにわれらに美しい平和を降し給え。

さてこそ わが心に愛するフランスを

眺めることも私には叶うのだが。

返歌

平和こそいかに讃えても讃えつくせぬ財宝

私は戦争を憎みけつして認めはしない。

正しかろうと誤りだろうと わが心に愛するフラン

スを

かくも長く見ることを妨げてきたのだから。

(ちなみにバラードとは、元来踊りの伴奏をしていた
歌謡のことだが、基本的に八音節または十音節で、そ

の音節と同じ行数をもった詩節三つと、それらの詩節の後半の形態を再現する半詩節（返歌）とから成立している。このバラードは十音節七行詩とやや変則である。）

この詩がそれまでの一般的な抒情詩と異なる所以は、戦争という一つの悲劇によって長い孤独を強いられたドルレアンド・ラ・フランスの自我の痛みが明確にあるからである。これがさらにヴィヨンにいたって一層痛切に自我の奥底をえぐる姿をとるであろう。

2

しかし、ヴィヨンに移る前にもう少しドルレアンの技巧のすばらしさと詩想の新鮮さとを味わっておきたい。

I 春

天はいま 風と冷気と雨の
外ズト套コトを脱ぎすてた
そして輝く明るく美しい太陽の
刺繍で身を飾った。



ボッチ・チェリー「中傷」

自分流のことばで

獣も鳥もみんな歌っている。

《天はいま 風と冷気と雨の
外套を脱ぎすてた》と。

河も泉も 小流れも

綺麗に衣替えた。

銀と金細工の水滴も。

だれもが新しく衣替えた。

天は外套を脱ぎすてた。

II 冬と夏

冬よ 君は何てひどい奴だ。

夏は気持ちよく やさしいよ

朝も夜も一緒する

四月と五月がその証人だ。

夏には野原が 木も花も

緑の衣にさしかえる。

それからもつと多くの他の色も

「自然」の教えに従って。

しかし君、冬よ、あまりにも

雪が、風が、雨が、あられがいつぱいだ。

だから みんなは君を追放せずにはおれぬ。

君にへつらわず ほくははつきり言つてやる

冬よ 君は 何てひどい奴だ。

どちらもロンデル風の歌謡である（ロンデルとは八音節又は十音節の詩句 十三行でなるが、それぞれ脚韻の組み合わせもきまつていて、技巧的に難しい。なおロンドルを古ロンドーといい、大体、四行節二つに五行節がつくが、新しいロンドーは五行、三行、五行の組合せになる）。翻訳では表現できない音の妙味がどれにも溢れていて、単純な内容を引立てている。

もう少し、愛情などを扱った詩を一、二あげておこう。

すごくやさしく美しい貴婦人の

かけた畏にかかったそのとき

ほくは蝶々がするように

ろうそくの炎に身を焼いたのだった。

ほくは朱い砂のようにまっ赤になり

火花のように閃いた。

すごくやさしく美しい貴婦人の
かけた毘にかかったそのとき。

もしもぼくがハヤブサだったら

同じくらい強い翼をもっていたら

ぼくはかの女をしっかりと把んだことだろう、

いくら針でぼくを突きさしても、

ぼくが毘にかかったそのときに。

(ロンドー)

「恋」の神がその館からぼくが立ち去って

二度と帰るなと望んでいるのだから

ぼくは立ち去らねばならぬことは分かっている

「歎び」の書からかき消されて。

ぼくはもはやそこにとどまることはできぬ。

なぜなら今はそこで相手にされぬのだから

それは「恋」の神が その館からぼくが立ち去って

二度と帰るなと望んでいるのだから。

ぼくは喜びへの道は失ってしまった。

もうだれもぼくに開こうとはすまい、

「甘い歓楽」への扉を

ぼくを打ちのめす「絶望」のせいで、

「恋」の神がぼくの追放を望んでいるからには。

(シャンソン)

ここにあげたいいくつかの短詩と、望郷のバラードとを十分に比較してほしい。後者にある癒しがたい個我としての苦しみをがどんなにそのバラードを引き締めていることか。そして真の抒情詩とは、つねに他に譲ることのできない自我を深く秘めているのだ。

ドルレアンはその後、一四四〇年に祖国のフランスへもどり、再び貴族としての生活に入るが、尋くプロワの城館にこもり、自由な創作生活を送っている。そしてルイ十二世を生むが、最後は一四六五年アンボワーズで人生を終えた。ただ、このプロワの城でつぎに述べるヴィヨンと歌合わせを行うという機縁が生まれた。われわれはここでドルレアンを去ってヴィヨンに向かうことができらる。

3

二十五年にわたる俘囚としての生活はあつたとしても名門の生まれで世の困窮を知ることのなかったドルレアンに対して、ヴィヨン (François Villon 一四三二—一四六四?) は自らも語るごとく、生まれながらに極貧の

生活を送っている。

貧乏は子供のときからさ

貧しく小身の家に生まれてね

父親は一度も大金など手にしなかった

オラスという名の祖父も同様だった

わが家系はみんな貧乏神に追っかけられ通し

先祖代々の墓石には

―かれらの魂に神の祝福あれ―

王冠も錫杖も見あたりはしない

(遺言書三五)



(なおヴィヨン詩の訳は私訳を試みるには力及ばず、もっぱら先人の作品を拝借する。その際わが国では鈴木信太郎のもの―「ヴィヨン全詩集」(岩波文庫)―がもつとも整っているが、その訳は現代には些かそぐわぬ面があるので、思潮社刊「フランソワ・ヴィヨン」(一九八二)所収の天沢退二郎氏のものも多く使わせていただく。ただいくつかとくに愛着の深い作品については、現代フランス語に直されたアントロジエのものによって私訳を試みてみたい。)

その名前にしても、フランソワ・モンコルビエ(F. Moncorbier)またはフランソワ・デ・ロツジュ(F. des Loges)ともいわれ、ヴィヨンとは恩師ギヨーム・ヴィヨン(Guillaume Villon)上人の名をいただいたと自らが述べている(『遺言書』九)ほどである。

その生涯にいたっては、パリ生まれの不良学生で、人殺しもやれば泥棒もするといった手のつけられない悪業の数々、かれの最初の作品で傑作といわれる『形見の歌』*Lais* (一四五六)も、前科者のかれが悪友らと共に謀して、ナヴァールの神学校から大金を盗み出し、今度は死刑も免れまいとパリを脱走する際の作品なのである。

すでに引用したように八音節八行詩を一詩節とする教

化文学の詩型を使つて全部で三四〇行という小品ではあるが、後でもふれる技巧を十分に發揮し、手の込んだ工夫の目立つ作品集である。切羽づまつた環境のなかでのこれだけの腕の冴えもさることながら、そこに盛られる純とまでいえる魂の表白は一読してわれわれの心をつよく打たずにはおかない。

「時は今、一千四百五十六年、わたしフランソワ・ヴィヨン 学生です。」で始まる『形見』(又の名『小遺言状』Petit Testament)は、つづいて「降誕祭クリスマス 生命の影も見えぬ季節、／狼どもは飢えて風のみを喰い、／人間どもは氷霧を避けて家の中に／とじこもり、貧しい火端に屈るとき、／わたしに一つの考えがうかんだ、／わたしの心を縛り責んでいる／愛慾の牢獄をうち壊したいという考えが。」とつなぎながら「あんな眼付きでひとを虜とりこにしておいて、／わたしには冷たく残酷な女だった、／こつちは何もわるくないのに／死になさいとか もう生きてなくていいわよとか／ひとに命令してはばからぬのだ。」(五)かの女から逃れる最善の手はただ《旅立ち》のみと。ここに《恋の殉難者》という有名な述懐がはき出される。そして次々と形見分けを述べて行くなかで、その女には

一つ、さきほどわたしがいった女、
もはや何の喜びも楽しみも
わたしに残らぬほどまでに
つれなくわたしを拒んだあの女には、
まつ蒼な、哀れな、死んで血の色もないわが心臓を
箱詰めにして贈るとしよう。

わざとあんなにわたしを虐めた女だが、
神様、あんな女にもどうぞお慈悲を！ (一一〇)

と祈りを捧げる始末である。宮廷恋愛詩のありふれたレトリックが巾をきかせていた当時にあつて、これほど切ない女性への思いを吐露した作品があるだろうか。自ら無頼を名のる人間にして、この深い個我としての苦惱。それははるか後世の、しかも遠い異国の文学者、太宰治をして「ヴィヨンの妻」なる作品を書かしめるような深い清流としてあらゆる詩人の底を流れるものではないだろうか。

4

パリから姿を消したヴィイオンは、アンジェ、ブルージュとさまよいながら、プロワの城にドルレアンを訪ねている。そしてこの城での歌合わせにある「プロワ城歌合

わせのためのバラード」を発表している。

泉のほとりにいながら わたしは渴きで死ぬのだ。

火のように熱くなつて 齒と齒をがちが言わせて、

自分の国にいながら 遠い土地に住んでいようだ、

真赤な火の傍にいて 熱さでふるえるばかり、

虫けら同然まつ裸で 裁判官の衣を着て

わたしは涙ながらに笑い 希望もなしに待っている、

悲しい絶望のどん底にあつて 再び希望をとりもど

す

好い気持ちではいるのだが 楽しみは何一つない、

元気ではあつても 力もなければ権力もたず

ちやほやされていても だれからも排斥されるのだ。

これほど真率に自分の感情を歌い出す詩人はそうは見

当るまい。このプロワの城でのもてなしも、ついにヴィ

ヨンの心をひきとめることはできず、一四六一にはまた

またマンシユールロワールに投獄される騒ぎを起こ

す。たまたまマンを通りかかったルイ十一世（ドルレア

ンの子）に救われ、六二年にはパリへの帰還も認められ

ることになつて、ここに最大の傑作『遺言詩集』

（Testament 「大遺言書」ともいう、一六四二ごろ）が創



占星 学者と学生

作された。

この『遺言詩集』は『形見の歌』と同様、八音節八詩行を一詩節とする詩型を用いているが、それが百八十六に及び、さらに十五のバラードとロンドー、シャンソン各一篇をそのなかにちりばめて巧みな変化を与えている。総行数二〇〇〇を越えながら、その一行々々に加えられた工夫は目を見はるばかりであった。

「…教化文学的、散文的詩型と宮廷風抒情詩の詩型との組合せにより、詩集全体の流れに変化をつける。しかも、これらの伝統的詩型を用いるにあたって、ヴィ

ヨンは独自の語彙、隱喩、統辭法を駆使しているため、鮮烈な迫力を読者に感じさせずにはおかない。」

と、白水社『フランス文学史』では賞賛しているが、原詩を示さずにはこの妙味を伝えることは到底できないといわざるをえない。それでも、一、二の訳例を紹介しておこう。

俺はまさしく罪人だ、それははつきり解つてゐる。
けれども神は 俺の死を 望み給わず、
回心をして 正直に善に生きよと望まれる。



罪に嘔まれる極道の奴とは全く違ふのだ。
よしんば 俺が罪の中で 死んだとしても、
神は活くとあるから、神の大慈悲は、

わが心の良心が 充分に悔悛してさへあるならば、
聖寵により 容赦を俺に与へて下さるのだ。

(鈴木信太郎訳 十四)

(1)はエゼキエル書十八・二三のことを踏まえ、(2)は同じく三三・十一をパロディとしている

朝ほらけ、歡喜に満ちて 高潔な	1
日ごろのならひ、雫が 羽を羽撃き、	2
大轉も 喜びに気が浮き浮きと嘯つて、	3
妻こもり、羽交ひに締めて婚ふ時、	4
欲望にわが心も炎えて 嬉しくも 恋人たちの	5
可愛いと思ふところを 貴女に差上げたい。	6
.....	
そこで 貴女の畠の中に 私が種を蒔く種は、	21
その実が私にてゐるから、空種ではない。	22
神様は 畠を耕し肥やせと私に命令する。	23
そしてこれこそ 私たちが一緒に暮らす目的だ。	24

(鈴木訳 ロベール・デストゥートヴィーニのための

バラード)

(冒頭の部分は宮廷風恋愛詩の技巧を十分に使っているが、二二行からは男女の交わりを巧みに示唆している)

5

しかし、ヴィヨンの真骨頂はそのような技巧だけではなく、かれの扱うテーマのなかにこそある。先にあげた『フランス文学史』では

ヴィヨンは天才であり、パリの悪童ギャアであり、抒情夢
悔の人であったが、彼の詩は決して興に乗っての書き
なぐりといったものではなく、中世の作詩法を十分に
踏まえ、いずれも技巧をこらした作品であった。しか
しながら、詩人の自我を抑え、伝統的な修辭の微細な
変化に抒情を託する行き方ではなく、自我の十分な表
出を希求する近代抒情詩にはるかに近い。

としながら、

また、その選びとる主題についても禁忌はなきに等しい。すでにリュトプフにおいてもそうであったが、

女、賭博、酒、食物、空腹、貧困が当然のテーマであるばかりか、彼自身が危うく免かれえたる絞首刑すら格好の材料なのであった。

と喝破している。

しかし、もっと大切なことは、ヴィヨンはそれらすべてのテーマのなかに、人間であるかぎり免れることのできない衰亡の影、つまり死の姿をいつも見ていたということであろう。あの有名な「昔の美姬たちのためのバラード」(この詩のルフランが「さはれ 去年ゴットの雪今いづこ」というもので、太宰治の「ヴィヨンの妻」にも引用されている)でも、そこにはいかなる美もいつかは彫落するしかないといった思いが満ち満ちているのである。したがって、青春への哀惜、老残の嘆きは随処に顔を出す主調低音となる。

それにしても悔やまれるのは青春の日々だ

あの頃、わたしは人一倍陽気にくらしだ

老年の入口に来てしまふまで

青春は自分の去ることをわたしに隠していたのだ

あいつ、徒歩でかけたのではない

馬に乗ってつたのでもない、ああ! どうやってだ



とつぜん、飛んで行ってしまったよ
と？

(天沢氏訳二二)

青春は去って、わたしひとり残っている

感覚も知慧も貧しいまま

みじめに、心挫がれ、桑の実よりも黒ずんで

年金も収入も、何の財産もなく：

(同二三)

しかし、その決定版は死である。ヴィヨンほど死を正面に見すえたものはあるまい。たとえそれが虚勢に近い反抗の姿勢としても、自らの絞首台にくびられた姿をあれほど冷酷に描き出すことにどんなエネルギーが必要であつたことか。それにしても、かれの描く死のいかに現実的であることか。

死は 死に行く者を甦え上がらせ まっ青にする

鼻はまがり 血の管はふくれ

頸は脹れあがり 肉はたるみ

関節や腱は延びてゆるむ

おおこんなにも優に美しい女体よ

つやかで 柔らかで こんなにもすばらしい

そのおまえも いずれあんな責苦を耐えるのか

そうなのだ 生きながら天へ行くのでないからは

(天沢氏訳四一)

そして、自らの「墓碑銘」ともなった、あの絞首人のバラードがある。非才をかえりみず拙訳を出してこの章の結びとしたい。

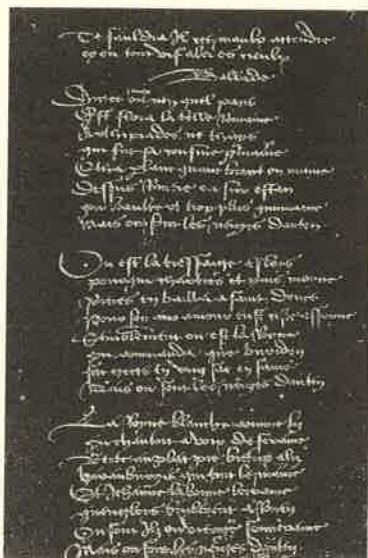
俺たちの後に生きる人間の仲間たちよ

俺たちに冷たく心を閉ざさないでほしい

なぜなら もし俺たちを哀れに思ってくれるなら



Epitaphe d'Hubert Biffon



神はお前たちにもっと早く憐れみを垂れ給うだろうから

お前たちには見えるだろう　ほらここに五、六人くくりつけられている

ふんだんに栄養を与えられたこの肉体も

すでに久しく　喰い裂かれ　腐りはてた

俺たち　骨も　灰になり塵にかえつた

だれもこの俺たちの苦痛を笑いものにしてほしくない

ただ神に祈ってほしいのだ　俺たちみんなを許し給えと

雨露が俺たちを洗いすすぎ

太陽は照りつけ乾かし　まっ黒に焼いた

カササギやカラスどもが　俺たちの眼をえぐり

髪も眉毛も　むしりとつた。

俺たちは片時も心静まる刻ときはない。

あっちこつちと風に吹かれるまま

たえ間なく　揺られ吹かれて

指貫ゆびぬきよりも孔だらけにつつかれている。

だから　お前たち　俺たちの仲間になつてはならぬ
ただ神に祈ってほしいのだ　俺たちみんなを許し給

えと

あえて蛇足としてこの後のかれの足跡をたどっておくと、一四六二年にまた投獄されたヴィヨンは、その放免も束の間、喧嘩沙汰に巻き込まれて、一旦は死刑を宣告されるが、結局は十年間のパリ追放が決定された。その日は一四六三年一月五日、そして、この後、かれの消息は杳として絶えた。

(やまむら　よしみ・本学文学部教員)

連
載

おいてけぼり

— 宮本輝 試論 X —

芝田啓治

十三、「おいてけぼり」そして出発

(1) 一九七三年という年

「国家の礎は教育に在り」という言葉がある。

国家は人が作り、その人を育てるのが教育である。昨今、教育の重要性が叫ばれ、又その問題が取り沙汰されている。

教育とは、何かを問う事は極めて難しいが、それに挑み、分析し、その先に光明を見つきたいと思う。現在、教育現場での様々な問題点が、あたかも臨界点に達してしまっているといった論評を聞くが、決して正統な分析

ではあるまい。校内暴力、いじめ、落ちこぼれ、不登校、偏差値教育、管理教育、受験教育と確かに問題点はある。しかし、誰一人として外野席から観戦出来る問題ではない。自分自身が、我が子が、孫が関わる問題であり、必ずや解決方法を捜し求めなければならない。

教育の原点を何処に求めるか。先ずその辺りからこの問題に取り組んでみたいと思う。近代・現代の教育を担う場として、学校があるのは言うまでもない。学校の事を、英語では「school」と言う。その語源は、ギリシア語の「スコレー」からで、「閑暇」とか「余暇」。その反意語「アスコリア」は、「仕事」「職業」という事になる。

この「余暇」を活かし、社会へ出るまでの十分な準備をする所である。大いなる「余暇」を活かす所なのかも知れない。この考え方は、古今そして東西を問わず当てはまるのではないだろうか。

日本に於いても、藩校・寺子屋の時代から近代の学校制度へ移行し、その制度や組織が徐々に整えられる中で、教育の機会均等という平等性が生まれ、人々は等しく教育を受け、そして何年間かの「余暇」の中で、成長を遂げ、実社会へと巣立って行くのである。

日本政府は、一八七二年（明治五年）に学制を公布し、全国に八大学区、その各大学区に三二中学区、更に各中学区に二一〇小学区を設け、五三七六〇もの小学校を設立させた。

「学問ハ身ヲ立テルノ財本共云フヘキ者ニシテ人タルモノ誰カ学ハスシテ可ナランヤ」と「学制被仰出書」の中にあるように、明治政府は、賢明な選択をしたのである。革命第一世代が優秀であった事が伺い知れよう。今始まる資本主義を原点とする近代国家成立のためには、どうしても通らねばならない道だからである。自らの保身を考えるなら藩閥という極めて封建的な閥族のみで事足れりと判断しかたも知れないが、第一世代はそれでは乗り切れぬと考えていたに違いない。この判断は、理に



叶い、就学率たるやみるみるうちに上昇し、既に明治年間で九八%となっている。この上昇率は他に類例を見ない程のものである。資本主義を、近代国家を支える有能な人材を広く発掘するという政府のねらいは見事的中するのである。学問する事が立身出世の道を開き、平等に与えられた機会が教育立国の門開く契機となったのである。しかし、道は時代と共に振れ、学制はフランスの教育制度を、一八七九年の教育令はアメリカの、そして更には九〇年の教育勅語に見られるように国家主義的傾向を強め、その道をひた走りに走り、大きな代価を支払う事になったのは知られている所である。

戦後教育についても、紆余曲折はしばしば見られ、基本を民主教育と言う名の下に推進されて来ている。しかし、これも又一本の道を歩んでいる訳ではない。この変節が何処にあるか、何故変節したのかを探る事が重要なポイントと考えられよう。戦前の国家主義的教育から軍国教育へと移行し、「善い教育」とされていたものが敗戦により、一夜にして「悪い教育」と評されるに至った。又、戦後教育は民主教育を「善い教育」としてスタートするも、今又その教育に対しても疑問や課題が山積してきたのである。それは何故か、又何時からか。

私は、それを一九七〇年代に在ると考えている。更に

冒険を恐れず言えば一九七三年がメルクマールではないかと考えている。

一九四五年〜五〇年は、戦後混乱期で、政治的にはGHQによる支配、戦争処理、経済的には民需品不足による悪性インフレ、経済安定九原則に見られるように問題山積みの状態であった。一九五〇年代、その悪性インフレを朝鮮戦争での特需景気により脱却し、又、その戦争での極東に於ける日本の需要性を鑑み、五一年に単独講和によりサンフランシスコ講和条約を締結する運びとなり、日本は息を吹き返し、動き始めたのである。



五五年神武景氣、五九年岩戸景氣、六〇年所得倍増計画、六六年いざなぎ景氣が始まり日本は高度成長期を迎えるのであった。この間、世は3C時代ともてはやされ、六四年にはアジアで最初のオリンピックが開催され、六八年にはGNPが自由主義国陣営でアメリカに次いで第二位となるのであった。六〇年代以降の日本経済は、平均GNP上昇率が二桁という驚異的なものであり、我が世の春を謳歌するのである。

しかし、七〇年代に入ると二〇世紀を一方の極で支えてきたアメリカが揺れはじめるのである。第一次大戦により西欧の世界的優位の失墜、第二次大戦により更なる西欧の後退により、世界の保安官、世界の銀行として君臨したのがアメリカであった。特に、第二次大戦後は、東西問題が激化するも常に西側諸国のリーダーとしての位置をしめてきたのである。その強いアメリカもベトナム戦争の介入により躓きはじめ、七一年にはドルショックが起こり、強いドルに翳りがさした。政治的にも、七二年ウォーターゲート事件と言う民主国家のリーダーを標榜する国としてはお粗末な事件がアメリカを襲う。日本でも、高度成長期を維持しており、又七二年というのは、五月沖繩の施政権の返還がなされ、九月には日中共同声明が発表され、第二次大戦の戦後処理としては

避けて通る事の出来ない二大案件が表面上片付いた年でもあり、「戦後が漸く終わった」との感懐を抱いた政治家もいたのである。

しかし、一九七三年が世界を、そして日本を大きく変えてしまうのである。

一月拡大ECの発足、これは近代をリードして来た西欧が二〇世紀の両大戦で疲弊し、それぞれの国では世界戦略上対抗出来ず、寄り合い所帯にかすかに生命線の延長を図ろうと考え、あの大英帝国すらも孤高を保てなくなったという証明でもあった。

一月ベトナム和平協定、強いアメリカの権力失墜を示す何ものでもなく、外交上かつ財政上大きな爪痕を残す



のである。三月米軍の南ベトナムからの撤兵、五月ウオーターゲート事件の究明本格化。八月変動相場制がスタート、これもドルの弱体化を示すものである。一〇月第四次中東戦争、第二次大戦後強国の犠牲となって来た国々が、ナシヨナリズムの旗を掲げ、敢然と大国に挑むのであった。石油を武器として。

以上の様に、一九七三年は、アメリカの権力の失墜、ヨーロッパの更なる凋落、逆に第三世界の台頭と。そして、その世界の波は例外なく日本をも襲ったのである。世界経済の奇跡ともよばれ、GNPの上昇率二桁を維持してきた日本経済がオイルショック以降躓くのである。七四年にはGNPが戦後初のマイナスとなり、低成長時代の幕開けとなった。そして、狂乱物価に見舞われ、地盤沈下は静かにかつ着実に進んでしまつていたとおもわれる。世の中は、高度成長の残映に浸り、田中角栄の政治は、数は力の論理がまかり通り、その数を維持するための拝金主義、錬金術が大手を振っていたが、それも長くは続かず、綻びはロッキード事件に於ける受託収賄罪により、七六年七月田中元首相逮捕として現れ、衆目に晒される結果となった。

そして、何より良くなかったことがこの後日本で起こってしまったのである。それは、田中角栄が被告の立場



であり、自由民主党の党籍を無くしてしまつてからも隠然たる権力を行使し、自民党を牛耳り、首相を操るといった図式が残念ながら茶の間においてもはつきりとみえたということである。これから以降も、政治家の不始末が次から次へと続くのである。八三年三月田中角栄、ロッキード事件第一審有罪判決。八八年リクルート事件。九二年佐川急便事件。どの事件をみても、「記憶にない」「それは秘書が」「あげくの果てには」「妻が勝手にやった」となるのである。

勸善懲悪がいいとは言わないが、これでは「勸善懲善」である。それも、国のリーダーである政・官・財のお歴々がブラウン管を通しての不始末。善いと悪いがいつの

間にか逆転したり、悪いと思つていたことが堂々と世の中で通つていく。善いと思つていたことが世の中の隅っこに追いやられるといった状態を教育の場で、小さなつぶらな瞳は見守つていたのである。

「カラスなぜ泣くの、カラスは山に可愛い七つの子があるからよ、可愛可愛とカラスは泣くの」と親カラスの子を思う心情が暖かく歌われているはずなのに、「カラスなぜ泣くの、カラスの勝手でしょ」となつてしまふのである。このようなギャグが子供たちに受ける世の中になつて行くのであり、「赤信号、皆で渡ればこわくない」と子供までが言い、遂には実行してしまふのである。「善い」とされていたことが「悪い」となり、「悪い」はずが「善い」として白昼堂々とまかり通るのである。善悪の区別がつかないと言うよりその境が取り払われ、自信がなくなつてしまふのである。「善い」と思い「善い」と断言しようと思つても、皆が逆の立場にいると青信号の前で進めず一人立ちすくんでしまつてゐるのである。

当然のことながら、教育の中でも様々な歪みが現れてくる。そのひとつは、いじめの件数がこの頃より増加の一途を辿り、中学校では七〇年代一万件であつたのが九〇年代には年間五万件、同様に小学校では、三万件が一万件とそれぞれ五倍、三倍へと増えている。この数字は

文部省の調べなので、勿論報告を受けた件数であり、実際にこの何十倍、何百倍もの数字になるかもしれない。何故、これほどまでに数字が増えるのか。いじめも七〇年代頃から変質し、いじめる方が「悪い」、いじめられる方が「善い」という境が取り払われ、いじめられる方も「悪い」し、いじめる方にも理があると言つた風潮が支配し、大多数の子供たちは赤信号と知つていても皆が渡るのであればその後ろを着いていくのである。譬へ先生に相談してみても、判定がはつきりしないのである。大人たちも、「善い」「悪い」を声高らかに言えないのである。自信のない大人たちが、子供たちに何と言えようか。それより以前は、仲間うちで話す場合中高生たちも「先生」と呼んでいたが、いつの間にか呼び捨てになつてゐる。尊敬に値しないとでもかんがえているのであろうか。現在、教育現場で「先生」と呼んでいるのは、唯一教師同志である。それだけ、教育現場は深刻と言えよう。

NHKが調査をもとに「現代日本人の意識構造」という本をだしている。

一九七三年と一五年後の八八年に同様の調査をし、その数字をまとめており、今その数字を参考にこの一五年の変遷を考えてみたい。

選挙に対する関心度
支持政党なし
仕事に關して（仕事優先）

73年 40% ↓ 88年 23%
32% ↓ 38%
45% ↓ 31%

と興味深い。政治不信、政治家不信がいわれて久しいが、その根源はやはりその辺りにあるのではないだろうか。

総理府広報室調査の「国民生活に関する世論調査」の数字をみて

物の豊かさ
心の豊かさ

73年 40% ↓ 92年 27%
37% ↓ 57%

となる。物質中心に、物の豊かさを生活の根底に据えて歩んできた日本が、七〇年代に続く二度のオイルショックにより手痛いしつぺ返しを受けるといった経験を通して、心の豊かさにシフトするのである。そのためライフスタイルが変わりはじめ、又、小さな宗教ブームが起きるのである。戦後三〇年信じてきた物質神話が音をたてて崩れさつたのである。

七三年から地殻変動を来し、政治が、経済が、社会が、そして教育が変質しはじめたのである。ならば、その出口は何処にあるのか。

先ず、子供に恥ずかしくない大人となる必要があるうし、特に父権回復を図らねばならないだろう。しかし、世の中はバブル崩壊以降、お父さん達にとってもリスト

ラの嵐が吹き荒れ、そう容易ではあるまい。ならば発想の転換をはかり、一つの価値に流される事なく、心の豊かさを求めるライフスタイルの構築が必要なのではあるまいか。一流レストランで食事をとるより、自然のなかで家族揃ってバーベキューのほうがずっと豊かであろうし、一流ホテルで宿泊するよりテントで自然に抱かれる方が子供たちにとってもきつと印象深いものといえよう。「教育」とは、本来「をしあへ」の意であり、「食饗」と書く。親が子に食物の取り方を教えるから生まれたものである。教育を学校や塾に任せっぱなしにするのではなく、親自ら生きていく術を子に伝え、教えていかなければならないのである。

（しばた けいじ・本学経済学部卒業生）

連
載

パン・チヨツパリ（半日本人）

—— 在日韓国・朝鮮人子女の教育問題ノート 23 ——

梁 永 厚

今年は、戦前の個人の尊厳を全く無視する教育制度と断絶し、いまの憲法・教育基本法に基づいた教育の民主改革により、六・三・三・四の学制を発足させて五十年目にあたる年である。その教育の民主改革は、教育権の所在を国におき、政府が国民の教育を統制していくのではなく、国民が教育権を保有することを基本とされていく。しかも国民に教育権をおき学校教育を推進していくことを政府は奨励をしていたのである。

たとえば新学制を発足させるに際し、学校教育の目標を示した文部省の「学習指導要領」（試案）の序論に、「これまでの教育では、その内容を中央で定めること、それ

をどんなところでも、どんな児童にも一様にあてはめて行うこととした。だからどうしてもいわゆる画一的になった。」と戦前の教育を省みたうえで、新しい学校教育の目標を達成するためには、「その地域の社会の特性や、学校の施設の実情や、さらに児童の特性に応じて、それぞれの現場でそれらの事情にびつたりした内容を考え、その方法を工夫してこそよく行くのであって、ただあてがわれた型のとおりにはやるのでは、かえって目的を達するに遠くなるのである。またそういう工夫があつてこそ、生きた教師の働きが求められるのであつて、型のとおり

にやるのなら教師は機械にすぎない。……直接に児童に接してその育成の任に当る教師は、よくそれぞれの地域の社会の特性を見てとり、児童を知って、たえず教育の内容についても、方法についても工夫をこらして、これを適切なものにして、教育の目的を達するように努めなくてはなるまい。……」と、教員の自主的な教育活動、いわば地域の特性、子どもものの特性をよく知り、教育内容や方法についても工夫をこらし、学習指導をするよう勧められている。

ところが、政府は一九五〇年代にはいると、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約を結び、日米の協調体制を成立させて、政治、経済、文化、教育など、さまざまな分野に「復古調」「逆コース」の路線を敷きはじめるようになった。教育分野においては、政府の国民教育を指導する権限の行使というかたちで、なかば公然と戦後教育改革の民主的理念の修正や、教育内容への統制をはじめた。その統制は、文部省の国旗掲揚、「君が代」斉唱をすすめる通達（一九五〇年一〇月一七日）をはじめとして、一九五一年にはさきの「学習指導要領」の改訂、文部大臣・天野貞祐の天皇への親愛と愛国心の教育を説いた「国民道徳実践要領」（一九六六年発表の「期待される人間像」の原型）の発表など、教育におけ



る国家主義の復活というかたちで現れた。そして以後には数々の復古的教育政策を施き教育統制が強められていった。

一九六〇年代にはいると、内閣総理大臣の諮問機関である経済審議会（一九五二年設置）の「経済発展における人的能力の開発の課題と対策」という答申（一九六三年一月）を受けて、経済の効率的発展という観点からハイタレント・マンパワーの養成に教育的価値をおく、能力主義の教育が組まれるようになった。その能力主義の教育は、子どもや青年たちが自己実現をさせていくための個人に即した能力育成の軽視、固定的な価値基準によって成長過程の子どもや青年を選別、その結果として選別された序列に甘んずる意識を抱かせ、個人の尊厳を阻むことになる非教育的な教育といえる。



このように戦後日本の教育は、一九五〇年代初から一九六〇年代の半ばにかけて、教育権の所在が「教育行政権」として政府側に傾き、その行使によって憲法・教育基本法に基づく教育の民主的理念の骨抜きと、国家主義教育および能力主義教育の地ならしが行われた。そして同時期の日本の公教育のなかには、十二万〜十四万人に達する在日朝鮮人の子女が、インビジュアル・マイノリティ（不可視な少数派）として、自己の人間性を分裂させながら、また同胞の一世たちからバン・チョッパリ（半日本人）であると蔑まれて、ひっそりと学んでいたのである。本稿ではそれらの実相即ち一九六〇年代の半ば頃までの間に、公教育を受けた朝鮮人子女の実態と「声」（作文）のいくつかをとりあげようと思う。

※ バン・チョッパリとは、朝鮮語で接頭語に用いる漢字「半」の朝鮮音と、朝鮮語の名詞で牛や豚など蹄が二つに割れたけだものを指すチョッパリが合成されたことばで、母国語と母国の文化や歴史を知らず日本化していることにたいする蔑称として、在日同胞の一世と本国の同胞たちのなかで使われた。とくにチョッパリという名詞は、植民地期に日本人がつま先の指を鼻緒にかけて下駄を履くところから、日本人に対する恨みをこめた卑称として使った歴史

を負っている。なおパン・チョッパリということばは、昨今在日韓国・朝鮮人の世代構成が変り、一世の数が少なくなつたことから、在日韓国・朝鮮人社会ではほとんど死語化している。

さて日本の公教育を受けた在日韓国・朝鮮人子女は、終戦からサンフランシスコ講和条約の発効までは「日本国籍を保持するもの」として、日本国民の子女と同様に義務教育を負わされ、講和条約の発効後は外国人子女として、恩恵的扱いに変わり、さらに一九六〇(昭和四〇)年に結ばれた日韓基本条約に付随した法的地位協定のなかでは、「妥当な考慮をする」という具合に三転した。しかし三転としたといつても、日本の公教育を受けた朝鮮人子女は、「朝鮮人と日本人を区別しない、日本人であるかのように扱う。朝鮮人であることを隠してやる。それが差別しないことである」といつた「良心的」同化教育を受けたにすぎないといえる。

その「良心的」同化教育の内実は、国語は日本語であり、歴史は日本を中心とした歴史であり、学校の行事では、「日の丸」が掲揚された下で「君が代」を歌つたのである。もちろん朝鮮語、母国の歴史といつた特別授業などは行われる道理もなかつた。その結果は、いやおうなしに朝鮮人子女の日本人化(パン・チョッパリ化)を

促がすものであつた。日本人化を強いられる朝鮮人子女の方は、日本社会で受ける差別、迫害から逃れる方法として、「通名」(日本名)を使い朝鮮人であることを隠そうとする意識を強めることになつたのはいうまでもない。

日本の公教育を受けている朝鮮人子女の意識を調べた大阪市教育研究所研究員・康昌己氏(被占領期に、天王寺師範を卒業し、公立学校教員に任用された朝鮮人教員で、一九八〇年代の後半まで大阪市立の中学校教諭を勤め定年退職している)の「大阪市立小・中学校における外国人子弟に関する研究」(同研究所一九六六年刊)によると、「あなたは、自分は日本人でなく朝鮮人だということを考えていますか」という設問にたいし、小学生の三一八名、中学生四〇名のうち九一・九%が、「朝鮮人だということを考えたことがある」と答え、残りの八・一%は「日本人と思つている」という答である。朝鮮人だと考えるという子どもの中には、同調査に収録された作文の中で、「私は朝鮮人に生まれたのが、つくづくいやになる。日本に生まれるのなら日本人に生まれたかった」と書いており、朝鮮人であることの屈折した感情の表現がみえる。

さらに同調査によると、授業中「韓国」とか「朝鮮」ということがでてきたらどんな感じがするか、という問

にたいし、「はずかしくていやな感じ」一九・八%「誇りがもててとてもうれしい」一〇・六%、「なんとも感じない」六九・六%という数値がでている。約二〇%は恥しいとはつきり意識しており、「なんとも感じない」という答えについては、無関心をよそおっているに過ぎない、と調査者は分析している。ひきつづき同調査に収録された作文から、在日朝鮮人子女の意識の屈折を見ることにしよう。

「ぼくは五つぐらいのとき、お客さんが来て日本語とちがうことを話していたことに聞きおぼえがある。三年のとき日本人の友達から『君は朝鮮人?』と聞かれた。そのとき、ぼくは顔があつくなつて、小さい声で『うん』と答えたのを今でもおぼえている。ぼくは朝鮮人に生れて悲しいと思った。……」(小学校六年男子)

「私は三年のとき、友だちに『大升さんは朝鮮人?それとも日本人?』ときかれました。私は『日本人』といつてしまった。どうして日本人といつてしまったかは、わかりませんが、今考えると、それは、朝鮮人が日本にいることがはずかしいからかもしれない。」(小学校六年女子)

「わたしは朝鮮人でありながら、日本に生まれました。小さいときは、なんともおもわなかった。でも、今はよ



その国で生まれたことが、どんなに不幸かわからない。……」(小学校六年女子)

「ぼくたちは、今日本に住んでいるので、日本の生活になれなくてはならないと思う。だから日本のことを日本の学校でならい、日本で生きていくふうをしなくちゃならないと思うから、日本の学校に来てよかったと思います。朝鮮人なので、学校でも、大会社でも、ぼくたち朝鮮人は差別される。したいことがあっても、さべつ

がじゃまになるのでしにくい。日本人は自分の国をもち、自分の国を愛し、さべつもなく、大会社へもはいれるし、本当にたのしく生きていると思う。ぼくたちは、その点で、自分の国でもないし、思うようにいかない。……」

(小学校六年男子)

このように日本の公教育のなかにいる在日朝鮮人子女の多くが、小学生の頃より朝鮮人であるという事実と、日本で生れ、日本で育ち、日本で生活しているという現実のなかで、朝鮮人意識と日本人意識との屈折から、自己欺瞞をし人間性の分裂をさせながら生きている。そしてまた、日本社会にある民族差別を意識して「日本で生きていく工夫をしなくちゃ」という積極性と、「思うようにいかない」という諦念性の撞着を、いたいけな胸のなかで反芻させている。そうした意識の呪縛からの解放を日本の公教育のなかでは望むべくもなく、むしろ呪縛を増幅させる教育になっていったといえる。

ところが一九五九年にはじまる在日朝鮮人の北朝鮮への帰国運動のなかで、朝鮮人学校への転入の誘いが盛んに行われ、それにのった一部の父母は子女を転校させた。転校した子どもは、確かに二重性の意識の呪縛からは解放されたが、こんどは子どもに政治意識の枷をはめられるようになった。転校による子どもたちの意識の変わりよう

を、当時の作文(在日本朝鮮人大阪府教育会、「日本学校からの転校生の作文集」一九六一年)を通して見ていくことにしよう。

朝鮮の学校にかわつてからの私

布施初級学校五年女子

私は、四年生の時、日本の学校からこの布施朝鮮初級学校にてんこうしてきました。でも、日本の学校に通学している時は、自分が朝鮮人だということをかくして、日本の子供のように学んできました。だけど、やはり私の家にお友達がお友達が遊びに来たり、又はお母さんご自分の学校へ、じゅぎょうさんかんにきてもらうことをとてもいやがりました。どうしてか?それは、お母さんが朝鮮の服をきて、又、朝鮮人がするかみの形をしていたからです。私が通学していた学校のお友達は、よい人がたくさんいました。でも、中には私を朝鮮人だといつていじめのお友達もいました。でも、今は自分達のほんとうの学校へ来て、私たちの国の言葉、字、歴史をいっしょうけんめい学んでおります。だから今になってみると、やはり朝鮮の学校に来てよかった。朝鮮のお友達と仲よくなつてよかったとつくづく思いました。私は、なぜ一

年生からこの学校にはいつてこなかったんだろうか、一年生から朝鮮の学校にはいつていたら、苦心もしないで、朝鮮の言葉をしゃべれて、朝鮮の字も書けているのにとこうかいしております。でも今はもう私は、ほんとうに朝鮮のりっぱな少年団※の一人になったのだと、とても喜



んでおります。

今、私や朝鮮人みんながねがっていること、それは二つにわかれております。私たちの、こきようは全部南朝鮮です。その南朝鮮が米軍のために、人民たちは食べる物も自由に食べられず、また学校に行きたくてもお金がなくて行かれない少年少女が沢山おります。その反対に北朝鮮では、社会主義の平和な国になり、今では七ヶ年計画にとりかかり、たいへんなすばらしい国になっております。だから北朝鮮の首相、金日成元帥がれんぼうせいというのを発表しました。れんぼうせいということは、私達の国が一日も早く統一出来るようにきめたものです。それを南朝鮮の政府は受け入れないのです。だから私は、れんぼうせいが発表されてから朝鮮せんたいのことがわかりました。もうすぐ私たち一家が帰国することになりました。私は今までこの帰国の日をどれだけ待ったでしょう。友達が一人帰り二人帰り、だんだんと帰って行くくと、私も早く帰って皆さんと一しようけんめい勉強したい気持ちでした。私の父も母も夜おそくまで私達のために働らいているのです。だから一日も早く帰って父母をらくにさせてあげたかったです。まちにまった帰国の日がきまった時の私のうれしさはなんともいえなかつたくらいでした。だから祖国に帰れば今よりも十ばい

二十ばいもがんばり朝鮮の子供としてはずかしくなくいように、します。

※ 朝鮮人学校には児童の自治組織・児童会はない。朝鮮総連傘下の政治的・青年組織・青年同盟に指導される少年団が各初級学校に設けられ四年生以上が入入することになっている。

祖国と私

田島初級学校六年女子

私はすぎた日の自分を考えると、いやでたまらなくなります。あのころ、(私が日本学校へかよっていたころ)私は、父や母が朝鮮人らしくないのを、よろこぶ気持は、だれよりも強かったと思います。だから分会のおばさんが、私の家へやってきて、「どや朝鮮学校いなか」と私にきいたとき、私はおこった顔をして、そのおばさんをうらみました。「いやや、絶対にいやや」私はなきそうだったと思います。

分会のおばさんが、「それでは、夜学へ行ってみろ、それでも、いややったら行かんでもええ」と言いました。私はそのあくる晩、ノートとエンピツをもって、いや

な所へ行くような気持で、夜学へ行きました。

二月の中ごろでした。とても寒い晩でした。ガラスが、たくさん割れていたんだろうと思います。教室にも風がピューピューとふきぬけていました。教室には、私と同じ年ぐらいの友達が三十名ほどいました。

黒板に書いてある朝鮮の字をながめていると私はふと朝鮮の字には「○」が多いなあと、思つて、急にここがいやな所ではないわと思ひました。そして、もつとびっくりしたのは、手を上げるとき、日本学校では「ハイ」と言つたのに、みんなは朝鮮語で(イエ)と言つていたことでした。そして朝鮮人民が、どんなに、苦しいおそろしい目にあつたかと言うことを知つたのもこの夜学でした。どんなにかわつたのか、はつきり分かりませんでした。私は、その夜学のしまいごろには、朝鮮学校に行こうと思ひはじめました。私はこの時ほど分会のおばさんに「ありがとう」と言いたいと思つたことはありませんでした。あれから――

私は朝鮮学校に入つて一年十一月になり、朝鮮の字を読んだり、書いたりできるようになりました。愛国歌をおぼえました。歴史や文化(注、アメリカ帝国主義)のことをたくさん知りました。そして朝鮮の人民は、米帝に反対して立ち上がり、自分の祖国を最後までまも

りぬいたということを知ってからは、私は自分が朝鮮人であることが、ほんとうにうれしくてたまりませんでした。今、人民共和国（注、北朝鮮）では、国づくり、年よりも若い人も、学生達もいっしょに、いっしょうけんめい、働いていることを思うと、自分もいつか、朝鮮に帰って国づくりをてつだおうと言う気持が、強くわいてきます。

そして、先生からこんな話しをききました。「今、朝鮮人がいちばん初めに、しなければならぬ仕事は、祖国の平和統一を一日も早く実現させることです。朝鮮の



平和統一は朝鮮人民だけが、願っているのではなく、世界の平和を愛する人民全部が、願っていることなのです。そのためには、もつと勇氣を持って、もつともつと祖国をよく知ることが大事です。」そして「レンポウセイ」（注、北朝鮮提案の南北連邦制による朝鮮統一案）がどんなことかと、言う話もききました。本当に先生の言ったとおり、魚は自由に北へも南へも行くのに、朝鮮人どうしがふたつの国にわかれていることはたまらないことと思えます。私はその話をききながら心の中で決心しました。祖国の平和統一を実現させるため、朝鮮のしょうらいを、せおって立つ人間として、もつと、たくさん朝鮮の歴史を文化を知ろう、そして世界の平和のためにつくす人間になりたいと考えております。

民族の誇り

西今里中学校*二年女子

私は日本の学校に通っていた時「朝鮮」という言葉が出て来ると、何故かどきどきと心臓が止まる様な思いをして来ました。又、自分が朝鮮人だという事を他の生徒達が知っているのではないだろうか、おどく／＼していま

した。それで、この学校へ転校して来る時も、朝鮮の中学校へ転校するのだと、はつきりいえないまま、で別れて来ました。やはり自分が朝鮮人だという事を知られるのが恥かしかったのです。

この学校へ来た時、あのバラック校舎を見て、これから先、あんな所で勉強して行くのかと思うと、日本の学校が思い出され、仲の良かった友達らは今頃、何をしているだろうと思うと逃げて帰りたくなりました。

けれど今ではその様な事は跡かたもなく消えて、この学校に来て本当に良かったなあ、とつくづく思います。だからといって今の私が完全な朝鮮人になりきっているというのではありません。まだ少し恥しさが心の奥の隅の方に潜んでいるのです。そのあらわれは現に買物へ行って返事をする時「イエ(ハイ)」といってしまう時があり、そういう時、どきつとして顔から火の出る様な思いをします。

これではいけないと思っても、何年間も、朝鮮人は下らないと考えて来た劣等感が一朝一夕には、ぬぐわれるものではないのです。か仕方がありません。一日も早く自分が「朝鮮人」だといわれても、恥かしがらないで、むしろ誇らしげに胸を張れる様な人間になりたいと思いません。

実をいいますと、私は今迄、自分が朝鮮人でありながら朝鮮の人達が好きではありませんでした。というのは、朝鮮の人が犯罪を犯した事をたび／＼新聞で読んだり聞いたりしていたからです。それが例え一部少数の人達であるにしても、日本に於いてそうでなくとも今迄朝鮮人は良く思われていないのに、その上まだ悪い事をすれば、それ以上に良く思われたいのは当り前のことです。日本にいる私達が個人個人の行動に気をつければ、もつと／＼日本人の人達にも好かれるでしょう。しかし、良く考えて見ますと、日本にいる朝鮮人が差別され白い眼で見られ、希望のない真暗な生活をしているために、そういう人間が出て来たのではないかとも思えて来ます。

今、行われている帰国問題にしても、日本人達に好かれて帰ると、好かれたいまま、に帰るのでは、勿論好かれて帰る方が良いと思います。私達は、どんな国の人にも好かれる民族になりたいものです。又、その様な民族になるためには、人間以下の生活をしなければならぬ、幸福な生活を保証してくれる暖い祖国のふところに帰らなければならぬと思います。

私はこの西今里朝鮮中学校へ来る迄は、自分が朝鮮人だという事を考え様とはしないで、たゞ朝鮮人と知られ

るのがいやだと考えたに過ぎなかったのです。

私は今、朝鮮人になるための階段をやっと一段のぼつたに過ぎないのです。これから先、私は美しい祖国の山河と、七年計画の雄大な展望を胸に秘めて、朝鮮人になるための階段を一段一段、力強くのぼって行きます。

※ 西今里中学校は朝鮮人子女のみを収容する公立中学校として一九五〇年七月から一九六一年九月まで存在した。

すばらしい祖国へ

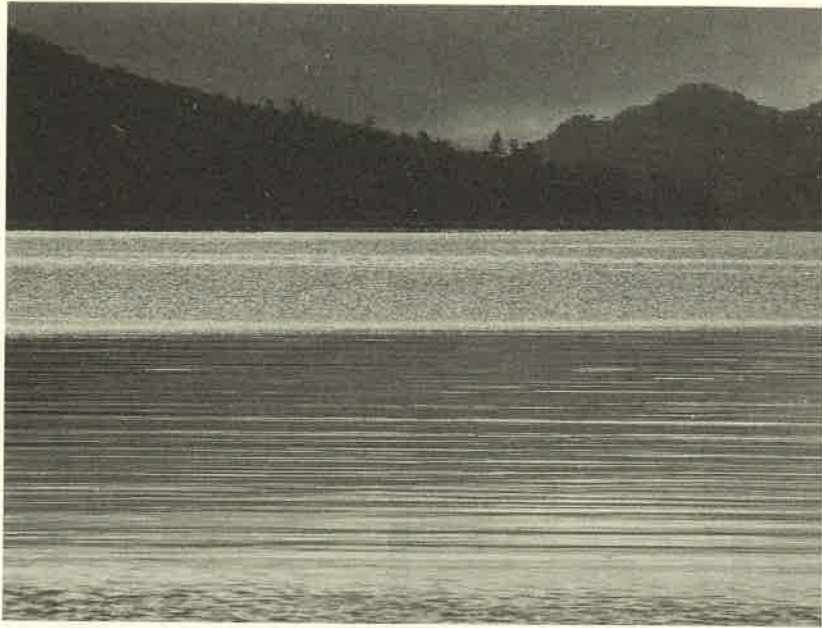
大阪高級学校二年男子

私は、高津高校の定時制課程で、二年間を学び舎として勉強して来た。しかし、在日朝鮮人の帰国問題が盛んになるにつれてじっとしていられなくなった。といって、私は帰国したいとは思わなかった。漠然と帰国とは、どういうものなのかなあと思いうくらいだった。新聞にラジオにテレビのニュースとしてじゃんじゃん放送された。私もその時までには朝鮮人の血を引きながら、日本人と同じように振まおうとした。が、その度に大きな矛盾が起きる。今、考えると当然の事であった。だけど、そんな



事も帰国問題に関心を持つ以前には簡単に紛らわしてしまつた。帰国問題が起きるにつれて、民族についての自分の考えの矛盾に深刻に考えさせられるようになった。自分はその時、朝鮮人であるという事は認めていた。このように朝鮮人のバックを持ちながら、日本人の中で物事をしようとする、小さい事でも必ずといっていい程失敗してしまうのである。(こういう事をいうと、こうした事を行つたら、彼等は僕を朝鮮人といわないかな) という考えのもとで何が私に出来るだらうか。私、だんだん自分がいやになつてしまふのである。こういった泥の中にはまつた私の前に投げ出されたのが帰国問題であつた。私は、そのはかり知れない帰国という物にぐんぐん引っぱり込まれ、考えさせられるようになった。そして第一次、第二次……と帰国船が新潟を出港した。『北朝鮮の記録』等の記事が、各新聞社で報道されるようになった。私は、その記事に飛びつきた。寺屋五郎さんの「三八度線の北」等の紀行文も読んだ。私は、そういった記事などを読んで、共和国北半部(注、北朝鮮)がどれほどすばらしいかを知ることになった。しかし、それも表面だけで、もっと奥を私は知りたかつた。私はそこで、大阪で唯一の民族学校である、大阪朝鮮高級学校へ入つて、もっと今より以上に祖国について勉強したいと

思つた。そして、近い将来に帰国しようとも考えた。私の念願はかなつた。一九六〇年四月、私は新しく転入生として、朝高の帽子をかぶる事になった。私は今まで、日本学校で感じていた窮屈感は一つもなかつた。どこを見ても立派な朝鮮の若者ばかりだつた。その時まで、持つていた卑屈感も雪どけするかのようには解けていった。何事をするにも、こせこせして来たが朝高へ入つてからは、大胆に振るまえるようになった。私はその時、自分の力を再認識するようになった。だが、苦しい事もあつた。今まで二年間日本の学校で習つた事を捨てなくてはならなかつた。特に文科系統はそうだつた。しかし我慢した。それが、私を発展させると思つて……一例を上げれば文学の時間には、私は、朝鮮文学の朝の字も知らないで、全くちんぷんかんぷんであつた。私は、それも最初から自分の行くべき道をあやまつた私の責任だと思つて忍耐強く我慢して勉強した。そして、今はどうにか追い付けるようにはなつた。又、私は高津高校で学んでいた時は、自然主義文学が最高に素晴らしいと思つたが、朝高に來ると何とそれは二足三文にもならない。私は非常に腹が立つて先生に質問した事があつた。(客観的にしかも理性を重んじて描写する自然主義文学が、どうしていけないんですか?) その時、先生はいいねいに説明



して下さった。しかし、私はその時、耳を貸さなかった。現在に至っては、自然主義文学の本質がどういう物であるかが、解って来るにつれ、自分のその時の愚かな質問を、恥かしく思った。このような事は新世界である朝高内では、私にはたくさんあった。だがそれは皆、私をつまらない石ころにもならない一塊の人間である私を改造して行ってくれた。そして、私にも朝鮮人であるという根のしっかりした自覚性を植え付けてくれた。しかも、今は私にも現在朝鮮の子として、何をなすべきか？それは、僕等若者が先頭に立つてせねばならない使命である祖国の平和的統一を一日も早く促進する為に、南北連邦制を実現させる事である。その為には、日本において勉強に、朝青（注、朝鮮高校には生徒自治会はなく、在日朝鮮青年同盟の支部とされている）活動に励む事である。そして一日も早く祖国に帰国する事である。とまだ不充分ながらもいえるようになった。しかし、ただ口でいうだけではない、祖国の将来の為にもそして自分の将来の為にも、今度、朝高第一次帰国集団の一団員として祖国に帰る事が決定した。そして雄大な七カ年計画に、参加するのである。何とすばらしいだろう……。

これら朝鮮初・中・高級学校の児童・生徒の作文には、

いずれも朝鮮人としての主体意識を回復し、「在日」をどう生きるかといったことよりも、当時の北朝鮮政府の統一政策であった「南北連邦制」、経済建設の「七カ年計画」、南朝鮮(韓国)社会の貧困相、帰国して祖国の統一と建設事業への参加、といった児童、生徒の年齢的特性の考慮をせずに行われた「教化」の結果が反映されている。しかも、この「日本の学校からの転校生の作文集」に収録された作文は、他のものも概して同じような内容であるところから、朝鮮人学校の教育の画一性をうかがい知ることができる。

一九五九年から六〇年代の初期に、転校生を含む朝鮮学校の在校生多数が、学校における「教化」により北朝鮮へ帰っていった。しかし、かれらが帰国をまえにして抱いた自己実現の抱負通りに、帰国後も歩めた者は稀で、多くが「社会主義建設」と銘された厳しい労働に従事される羽目になった。つまり朝鮮学校における主体意識の回復は、政治主義的「教化」と結ばれて、人間個人の自己実現の道を阻むものとなったのである。それを知った在日朝鮮人の多くは、自分たちの子女を日本の公教育のなかにおくことを選ぶようになった。以後、在日韓国・朝鮮人の世代交代もあって公教育のなかの韓国・朝鮮人子女の比率(学齢者全体における)は、ひきつづき増え

ている。

これら日本の公教育を受けている在日韓国・朝鮮人子女にたいする「良心的」同化教育がもつ非教育性を省み、子どもたちの民族性を回復させようとするとりくみが、教師たちの中で起こるのは、一九六五年以降に活発化する同和教育運動と結ばれてのことである。それは、まず公教育のなかに不可能な少数派として存在している在日韓国・朝鮮人の子どもと、多数派である日本人の子どもとの間で、お互いに自分というものを見つめ合い、自分というものを明らかにさせていくとしくみとして始められた。つまり在日韓国・朝鮮人の子どもを「本名宣言」へと導き、公教育のなかでのダブル・マイノリティ(可視的な少数派)へと変えていくようになるのである。

(ヤン ヨンプ・本学非常勤講師)

一七・八世紀日本の政治思想―伊藤仁斎(三)

蘆田東一

三 人倫的世界の法

人倫的世界

『童子問』は、まず最上至極宇宙第一の書としての『論語』とその義疏たる『孟子』についての叙述のあと、次のような叙述が続く。

人の外に道無く、道の外に人無し。人を以て人の道を行ふ、何んの知り難く行ひ難きことか之れ有らん。夫れ人の靈を以てすと雖も、然れども羽ある者の翔り、鱗ある

者の潜るが若くなること能ざる者は、其の性異なればなり。堯の行ひ、堯の言を誦するに於ては、則甚難きこと無き者は、その道同ればなり。故に孟子の曰、『其れ道は一のみ』と。若し夫れ人倫を外にして道を求めんと欲する者は、猶風を捕り影を捉ふるがごとし。^①

ここでは「人の外に道無く、道の外に人無し」ではじまり、「若し夫れ人倫を外にして道を求めんと欲する者は、猶風を捕り影を捉ふるがごとし」となる。『論語』『孟子』の重視同様に、仁齋字の仁齋学たる所以を表している

るところである。

ここでの「人の外に道無く、道の外に人なく」とは、具体的な人的関係を離れては、「道」などあり得ようが無く、人倫と離れた天理を否定しており、普遍的抽象的な「道」と異なら異彩を放っている箇所である。さらに『童子問』は、『論語』雍也篇「中庸の徳為るや、それ至れるか。民鮮なきこと久」について次のように述べる。

子必想はん耳目の見聞する所を外にして、更に至貴至高光明閃爍驚くべく楽しむべきの理あらんと。非なり。天地の間、唯一の実理のみ。更に奇特無し。^②

感覚を超越した所で、至貴至高の光りかがやき驚くような理は無く、天地の間には、唯一の「実理」が有るだけとする。清水茂校注の『岩波古典文学大系97』では、頭注に、仁齋は「実」を尊ぶとして、さらに実徳、実処、実心、実見、実智ということばがみえると記している。

さらに『童子問』上第九章では、「何をか人の外に道無しと謂ふ」という問いに、「人とは何ぞ。君臣なり。父子なり。夫婦なり。昆弟なり。朋友なり」とあり、この具体的な人と人の間のみ規範としての「道」を考えている。まさに人倫的世界を構築した仁齋の独創である。

しかし、この仁齋学の特質を代表するかのようには思える「人外無道、道外無人」は、文自体は仁齋の独創ではなく、朱子の『論語集註』卷八の「弘、廓而大之也。人外無道、道外無人。然人心有覺而道體無為。故人能大其道。道不能大其人也。」にみられる。また、「天地の間唯一の実理のみ」という『童子問』の言葉は、宇宙的原理としての「理」を認めないかにも仁齋らしい表現の「実理」と思われるが、これも朱子の『中庸章句』の註の「天下の物、皆実理の為す所」にもある。

子安宣邦『伊藤仁齋』は、以上のような仁齋の独創を表すかのごとき言辞がごとごとく「朱子」などに見出さることをあげ、同時に朱子学の世界を崩し、仁齋の社会を構成するものに変えてしまっていることをあきらかにしている。その副題の「人倫的世界の思想」とおり、仁齋学の地平と世界について、画期的な研究書である。

仁齋の『語孟字義』の「道」の冒頭「道は猶路のごとし」やさらに「道とは人倫日用当に行ふべきの路」も、朱子の『中庸章句』の註の「道とは日用事物当に行ふべきの道」や陳北溪の『性理字義』の「道は猶路のごとし」「道の大綱は只是れ日用の間人倫事物の当に行ふべき所の理にして、衆人の共に由る所の底」をふまえているのである。

しかしながら、私たちが『童子問』を直に読んで、仁齋が「実」というとき、人々の相互的な連帯のなかで、具体的な相をした人倫の関係において人の踏まえる道を考えるのに対して、朱子における実理は、真実無妄の道理を前提にした、「人為の当然」としての人間における真実のありかたとしており、同じ言葉が対峙する二つの世界を表すものとなってくる。

子安氏は、『童子問』における「人外無道、道外無人」をふくむ第八章の成立過程を仁齋の思考の熟成過程とともに展開される。仁齋学を代表するかとも思える言葉の「人外無道、道外無人」が、『童子問』の当初の草稿にはなく、後になって朱子や程子の言葉から加筆されたものであるということ、つまり朱子の言葉からの補筆だったことを紹介され、さらにその言葉を、むしろ仁齋思想の意味で使うのが正当と思わせるものとして、仁齋の人倫的世界の表現としてこそ意味を持った言葉になっていることをあきらかにしている。

つまり、朱子によれば「人外無道、道外無人」は、道の外に人が有るのではない、ということの意味していた。仁齋によると実体たる人と人の関係を離れて道があるはずが無いということになる。もともと朱子の言葉を用いながら朱子学的宇宙と対極の人倫的世界を構成する仁齋

の知的営為には、知的快適さを生み出すものがある。また、この世界を解していく子安氏の研究は見事である。⁷⁾

ただ、子安氏は「丸山（眞男）政治思想史研究の徂徠像へのアンチパシーから、ことさら徂徠を避けて仁齋に思い入れ⁸⁾をしたと述べ「仁齋にあつては、人情に従うことが道を行うことの基本的な前提としてあるのである。その意味で仁齋のいう人情は、為政者の経世論的な文脈をこえ出ている。むしろそれ自体が、人人の常態的な世界⁹⁾の成立を支える基盤として主張され得るようなものとしてある。」とする。そして「仁齋学の本質が道徳論であることは、他章でもいつている。仁齋の著述に経世論に属するものはない。『童子問』でわずかに経世論観点を思わせるのは、中巻の王道論である。」「人情からして人人の能くするところでなければ、通天下の道ではないという仁齋の発言は、天下に包括される人人の立場に徹底的によることによって、経世論的な文脈による人情の把握をこえる¹⁰⁾とするのである。」

これほど仁齋の人倫的世界構築をされながら、仁齋の「本質が道徳論」であるとして「経世論的な文脈」と対置される子安氏の手法は疑問である。子安氏が「（子安氏は）仁齋を思想的にとらえようとはしていない¹¹⁾」のは、「私（子安氏）が徂徠的思想の成立過程における前



史として仁斎を位置づける思想史的把握を斥けながら、朱子学を否定的な媒介とするその成立のあり方のうちに、仁斎の思想自体を明らかにしようとした結果である。」と述べている。「徂徠的思惟の成立過程の前史」として位置づけているのは、丸山氏で、そのような位置づけを斥けることから、「思想史的にはとらえない」とする子安氏の見解は飛躍があるのではないか。その意図が思想を歴史に解消させないということであれば、歴史に解消させるような「思想史」が失敗なのである。それよりも、ことさらに思想史的把握を斥ける意識は、思想そのものの現実性を無くしはしないだろうか。思想史として歴史的存在であるが故にその思想が現実的存在になり得ないのではないか。しばしば語られる常態的な存在が如何に觀念的なものになるかということについては、私たちは多々目にする。

子安氏は、仁斎の思想が「経世論的な文脈をこえ出ている」と評価を与えるのなら、どうして「仁斎学の本質を道徳論」とするのだろうか。これは、あまりにも丸山政治思想史研究を意識し過ぎた結果、依然として、丸山政治思想史研究に捉らわれていることによるのかとも考えられる。

子安氏は「天下に包括される人人の立場に徹底的によ

ることによって、經世論的な文脈による人情の把握をこえる」と展開した、人倫的世界は、人と人の具体的な世界であり、それが結果として天下でもあると考えられている。

仁斎が王道をいう場合、人人から超越したものととして語らないのは、人人から離れては王道は無いと考えるからである。天下と包括される人々と対置させ、常態的存在として人人の道徳として仁斎の思想を解くとき、丸山政治思想史研究の地平を突破しきれなかった憾み無しとはしないのである。

仁斎の人倫的世界は、人々の結合の結果としての社会であって、神話的抽象的聖人による不合理的秩序である、「徂徠的思想」の前であるわけではない。

しかし、子安氏の人倫的世界は、「人々の常態的な世界を成立を支える」「人情」を考えることによって、歴史的抽象をした常民的人情世界を想定しかねないのである。

(一) 王道豈在法度上乎

仁斎の『章子問』の巻の中、第十九章は次のような文ではじまる。



問、「後世恐は王道を行い難からん。」曰、「子井田せず、封建せざるときは、則王道を行ふべからずと為るか。將た悉く後世の法を除て、以て三代の舊に復せんと為るか。」曰、「然り。非か。」曰、「非なり。王道豈法度の上
に在らんや。所謂王道とは、人に忍ざるの心を以て、人に忍ざる政を行ふのみ。何の難きことか之れ有らん。若し聖人をして今の世に生れしめば、亦必ず今の俗に困り、今の法を用ひ、而して君子は約のごとく變じ、小人は面を革めて、天下自治らん。……」

ここでは、後世すなわち、現代では、王道、いわば理想的な政治は実施不可能ではありませんか、という問にはじまっている。それに対する答も問を敷衍するかたちをとり、井田法のような土地制度も行われず、周代のよいう封建もなされないときは、王道は行われることができないと考えるのか、又、全て後世の法を排除して、夏・殷・周三代の制度にもどそうとする問題であるかと確認している。そして、そうであるとするならばそれは意味のないことである、というのである。

これは、王道は制度の上にあるのではないからだ、というのである。そこで王道とは、人に忍びざるの心をもつて、人に忍びざるの政を行うだけで別に困難なことはない、とする。もし聖人が現在の世の中に生まれても、亦、今の俗に困って、今の法によるであろう。それで君子は一変し、小人は顔をかえたようになり、天下は自然に治まるであろうというのである。

王道について、『孟子古義』巻之二では、

人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行う。此の一章の主旨は王道の至要なり。蓋し、天下を治むるの本、外求するを假せず。人に忍びざるの心を拡充することと存るを言うのみ。何となれば、王道の学は、儒者の専

門なり。言うところの存心養性、萬般功夫は皆是に由て出す。異端の人倫を外し、日用を遠し、而して別に道を為す者の若くにあらざるなり。此の章をもつて、徒に性情の理を論ずると為すものは非なり。

とある。「人に忍びざるの心」とは、孟子の例では、子供が井戸に落ちそうなのみれば、思わず怵損得利害を考えずに動かざるを得ないような誰にでもある惻隱の心のことである。そして「人に忍びざるの心」をもつて「人に忍びざるの政」をするというのは、単に同義の繰り返しではない。それは川口浩氏の説くように、為政者の心情の問題にのみ解消されないということである。川口氏は、ここで現実に「沢」すなわち利沢恩恵が「民」に実現されることが王道の要件だとされているけれども、人間関係においてのみ、人に忍びざるの心の拡充はあり、そして「人に忍びざるの心」の相互に拡充があること、これが、根本である。人間関係において、日用において拡充するところに道があるのである。秩序原理としての宇宙論的イデオロギーが入る余地はない。

この「人に忍びざるの心」が仁の端である。拡充して達徳すれば「仁」である。それに関連して『章子問』上三十四章をみると、

問、「平生論孟を熟讀すと雖も末其の要領を得ず。願くは詳かに教へられよ。」曰「可なり。聖門学問の第一字は是れ仁、義以て配と為、禮以て輔と為、忠信以て之れが地と為。仁と義とは、猶陰と陽のごとし。……」

とある。

仁に対しては義が配偶され、禮によって輔され、忠信が仁（と義）の基礎である。というのは、己を盡すのが忠で、実を以てするのが信である。

『論語古義』に「苟くも忠信を主とせざれば、則ち外は似て内実は偽なり、言は是にして、心は反非なり、与に並びて仁としがたきものあり。色は仁を取りて行は違う者あり。後儒、徒らに敬を持するを知りて忠信を主とするを以て要と為す、亦なんぞや。」と人倫における徳である仁を与にするための内実の保証を忠信に求める。そのことは『語孟字義』において、

程子の曰く。「己を尽す之を忠と謂ふ。実以てする之を信と謂ふ」と。皆人に接する上に就いて言ふ。夫れ人の事を做すこと、己が事を做すの如く、人の事を謀ること、己が事を謀るが如く、一毫の尽さざる無き、方に是れ忠。凡そ人と説く、有れば便ち有りと曰ひ、無ければ便ち無

と曰ひ、多きは以て多きと為、寡きは以て寡きと為、一分も増減せず、方に是れ信。又忠信の二字、朴実文飾を事とせざるの意有り。所謂「忠信の人は、以て礼を学ぶ可し」と。是れ也。又信の字、人と期約して其の実を踐むの意有り。論語集註に曰く。「信は約信也。」古人「信金石の如く」、「信賞必罰」等の語有り。皆此の意。

とある。

相互に相手との同位性のもとに、決して虚偽なく、深い信頼と硬い約束こそが、仁を形成するという意味で「忠信」が、基礎すなわち、「地」であったり「主」である。その仁は「義」を配属し、さらに「禮に非るときは、則ち以て仁を存すること無きを言ふ」（童子問上三十四章）^⑧となつて、具體的なた姿として禮になる。従つて、禮は、時代・場所によつて姿を変えることになる。禮が法でもあるのは、そのような、人間関係のあり方が、規範として姿をとつたものだからである。「忠信」によつて充実された仁という人間関係の結合の表現として法があるからこそ、王道（霸道ではないという意味の、合理的な政治のあり方）は法度の上にあるのではないといふのである。「王道も法度の下にある」とあつた方が、現代の教科書に沿つた表現で、法の支配を連想しやすい。



しかし、それは、宇宙論的な秩序原理としての「理」と説いている朱子学に適合的している。緊張した人間関係が約信によって形成された結果としての法度を考へるべきなのである。

だからこそ、理想的抽象的な法制度だけが存在したりはしないのである。理想の国が超歴史的に在ったりはしない。復古主義的思想とは対立的である。『童子問』第十九章の問い返しは、現状に対して、形骸化した思想や制度を対置する無意味さを言ったものなのである。

(二) 天無心。以民心為心。

具体的な人間関係を離れて本質的なものはないという仁齋の主張は次の文にも表れている。

問、程子の曰、「修養の年を引ふする所以、常人の聖人に至る所以、皆工夫這裏に到るときは、則此の應有り」と。夫れ修養の年を引ふし、資質の変化する、皆勉めて至るべし。天の永命を祈むる所以に至ては、則獨り天に係つて、人力の能く致す所に非ず。何の術あつてか能く之を致すべき。」曰、「天の永命を祈むる。豈他有らんや。亦曰、仁のみ。夫天に心無し。民の心を以て心と為、民悦ぶときは、則天心悦ぶ。民心厭くときは、則天心厭く。書に曰く、『天の視ることは我が民によつて視る。天の聴くことは、我尾によつて聴く。』民好む所を好み、民の悪む所を悪み、民心悦豫するときは、則以天の永命を祈むべし。(童子問中第三十章)

天の永命を祈むるに方法はないのであって、仁の問題があるだけである。というのは、「天には心がなく、民の心を以て心と為る」からである。民心が天心で、天心とは実は民心である。だからもし、その時代が続くのであれば、それは仁があるからということになるのであつ

て、人間関係を超越した天も天心も存在しないのである。

『童子問』第十七章において、南宋の孝宗は朱熹を召いたことがり、ある人が、その途中でまちかまえて、正心誠意は天子が聞くのをさらっておられるのでいってはいけないと注意した。朱熹は、私の平生学問はただ正心誠意にあり、どうしてほんとうのことをつつみかくして吾君を欺くことができましようか、と言った。これについて、仁斎は「愚謂らく其説固に善し。然れども学者に在ては則可なり。人君に告る所以に非。学者の如きは、固に此を以て自ら修めずんばあるべからず。人君に在ては、則當に民と好悪を同するを以て本と為すべし。其れ徒に正心誠意を知て、民と好悪を同すること能ずんば治道において何の益かあらん。苟も身を側して行を勵し、起居動息、民と好悪を同するを以て志しと為るときは、則民志奮起し、士氣雄壯、南宋の脆弱と雖ども、以て北韃の勁兵を撻たしむべし」と答えている。

尾藤正英氏は「民と好悪を同う」するのは君主の心構えというふうには解釈されている。他者たる民衆の心を基準として主体（人君）の行動を定めようとする考え方だとされている。このような「仁」についての認識を欠落させたままの誤解から、仁斎の政治論の帰結が大勢順応という評価をうける。

丸山眞男氏は、「治道において何の益かあらん」というところに、個人道徳と異なるところの君主の公的な行為が示されているとしている。公私の分裂と、政治の論理の成立がこれより、徂徠に至って豊饒な展開をみせると述べる。しかし、この民心の中核はまさに「仁」にもとめられるものであって、具体的な人間関係を離れては存在しないのであり、それから遊離した天心批判を考えねばならないのである。むしろ、人間関係を超越した「公」の論理に対する批判につながるものとして理解すべきなのである。

ただ、あるがままの民心については次のような問題がある。

(三) 鬼神

吾孟字義 卷之下 鬼神

鬼神の説は、当に論語載するところ夫子の語をもって正とすべし。しこうしてその他礼語等の議論をもつてこれを雑ゆべからざるなり。按ずるに夫子鬼神を論ずる説、魯論に載する者、纔に数章にして止む。孟子に至つては、一も鬼神を論ずる者無し。蓋し、三代聖王の天下を治むるや、民の好むところを好み、民の信ずるところを信じ、

天下の心をもつて心と為て、未だ嘗て聡明を以て天下に先だたず。故に民鬼神を崇むるときは則ち之を崇め、民ト筮を信ずるときは則ち之を信ず、惟其の道を直ふして行を取るのみ。故に其の卒りや、又弊なきこと能はず。夫子に至るに及んでは、則ち専ら教法を以て主と為て、其の道を明し、其の義を暁して、民をして従ふ所に惑はざらしむ。孟子所謂「堯舜に賢れること遠し」と、正に此れを謂ふのみ。「樊遲知を問ふ。子の曰く。『民の義を務め、鬼神を敬して之を遠ざく、知を謂ふ可し。』又曰く。『子、怪・力・乱・神を語らず。』」子路鬼神に事へんことを問ふ。子の曰く。『未だ人に事ふること能はず、焉んぞ能く鬼に事へん』と。此れ皆聖人深く人の力を入道に務めずして、或は鬼神の知る可からざるに感はんことを恐れて之を言ふを見る。然れども祭ること存すが如くす、神を祭ること神在すが如くす。郷人の儼に朝服して阼階に立つ。則ち又其の当に敬すべき所に於ては、則ちまだ嘗て敬を尽さずんばあらざるを觀る。此れ吾が聖人の其の道を明し、其の義を暁して、人をして従う所に惑はざらしめて、三代の聖人と、同じからざること有る所以也。是れに由つて之を觀るときは、則ち凡そ記札等の書、「子の曰く」と称し、諸鬼神を論ずるの言は、皆漢儒の仮託・偽撰に出でて、夫子の言に非ざること彰々

として明かなり。³³

「鬼神」とは、すべての天地・山川・宗廟・五祀の神、それに「一切神靈有つて、能くの禍福を為す者」³⁴であるが、それについて、孔子は語らない。死語の世界も語らない。そのような鬼神やト筮に頼る人々の呪術の世界を越えた、あるいは境を明確にした人倫的世界を成立させたところに孔子が堯舜にはるかに優越する理由を仁齋はみている。孔子こそ「最上至極宇宙第一の聖人」というのは、民俗の呪術的傾向を、そのままが自らの世界で有る堯舜に対して、いわば、そのような自然的状态から、人倫的世界を構築したことによるとする。いわば世界的史的展開で考える場合には、三代の聖人の時代の「民の好む所」「民の信ずる所」は、人倫的世界のものとしては不十分である。人倫的世界に達していない段階と考えられる。「段階」としたが、子安氏は、「くりかえしを恐れずに仁齋がとらえる孔子についていえば、それは鬼神あるいは死生への問いを自己の圏外にくくり出し、『生存の道』を尽すことに自己限定すべきことを説く存在であり、知を此岸の世界にみずから限定すべきことを論ずる存在である。そうしてこの孔子像とともに定位された世界は、右にいうように、民衆における宗教的・呪術的諸

要素をその地平からしりぞけた倫理的世界」であるときされる。この世界は、単に倫理的の世界に止まらない。まさに法・政治の世界が登場しうるのである。ここで子安氏は、仁斎が「無鬼」の立場ではなく、有鬼か無鬼かの間をもたない立場ということを強調されるのであるが、「知」ということの間に対する本格的な普遍的な議論がみられる。このような世界の確立ということは、それをもつて「段階」といつてもいいと思う。合理的な精神の結合によることを中心として考えることのできる地平である。

「孔子が言う」として「鬼神を論」ずる言葉は、全て漢代の儒者の仮託・偽作にすぎないという仁斎に、徂徠が、孔子も礼・葬礼・祭祀について語っているではないか、とし、「死生の説」「鬼神の情状」を知る聖人の存在を語り、先王の鬼神祭祀の礼制作の意義を説き、先王、すなわち三代の聖王の道こそが、孔子の道であるとし、孔子の教えというものは、三代の聖王の道を述べたものにすぎないとして批判するのである。従つて徂徠は、仁斎が評価しない「六経」について、とくに先王による鬼神の命名、祭祀の礼政策の意義をとらえようとするのである。

徂徠は「私擬対策鬼一道」で、もともと「聖人の未だ

興起せざるにあた(方)りてや、其の民散じて統無く、母あることを知るも父あることを知らず。子孫の四方に適くも問はず。その土に居りてその物を享くるもその基むる所を識るなし。死してすることなく、亡じて祭ること無し。鳥獸に羣りて以て殂落し、草木と俱に以て消歎す。民は是を以て福に無し。蓋し極の凝らざるなり。」と、いわば自然状態を描き、そこで「故に聖人の鬼を制して、以てその民を統一し、宗廟を建てて以てこれを居き、蒸嘗を作りて以てこれを享り、その子姓百官を率へて以てこれに事ふ。」「夫れ然る後に神に配し明に殺ふ。人道は以て尊く、能く百福を降し、以て造化を輔く。礼樂政刑、是れ由りして出づ。聖人の教への極みなり。若し夫れ人事を以てするのみなる、聰明叡知有りとし雖も、夫れ亦た何を以てか能く天地とその徳を合し、日月とその明を合して以て万物の主と為らんや。故に聖人鬼神を貴ばず、且つ民俗の尚ぶ所に従ふと謂ふものは、鄙生の聞く所に非ざるなり。」とする。

子安氏は「鬼を制してその民を統一」するということ、『礼記』の「物の精に困りて、制してこれが極を為し、明かに鬼神と命けて、以て黔首の則を為す」という叙述をもとにして、祭祀の共同性をもつたものとしての人間世界の原初的成立を劇的に示そうとするものだとされ

る。鬼神をまつることによって社会をまとめ、鬼神を立てることによる祭祀共同団体がはじまる。聖人による社会の礼・楽・政・刑が整えられる。鬼神をまつることを中心とした礼楽政刑の整備である。鬼神をまつることが「人極」すなわち、人の結集軸になる。そこで、「天を畏れ鬼神を畏るるは、人の性これあり」とするならば、人間の自然に対する畏れをそのままにして、畏れとしての自然に対しての祭と礼、それを中核とする社会が聖人の社会なのである。そこに鬼神論においてみられる徂徠と仁齋の思想の対称がある。いわば恐怖をそのままにして成り立っている社会であるから、克服したはずの原初的な自然状態を基本的には克服していない。にもかかわらず、畏れの対象の整備・体系がある。言いかえれば、自然状態の畏れを整備することによって、もともと自然状態の畏れが永続化されるのである。

四 「仁齋の法・政治思想」研究の後退

先述のように戦後の近世思想史研究は丸山眞男『日本政治思想史研究』によって明確な像を与えられ、方向もつけられてきた。それに対して一九六三年に田原嗣郎氏が『徳川思想史構想の原理と事実の再検討をめぐる問題』として、『伊藤仁齋における朱子学批判』の意味〔『日

本史研究』七二号)「伊藤仁齋学の構成」(『歴史学研究』二八六号)を発表された。田原氏が、「仁齋学(古学)の成立を朱子学ないし自然法思想の解体過程に位置づける丸山眞男以来の思想史学界の通説に対する、徳川思想構成の原理と事実にかかわつての、基本的な疑問の提起」をした⁶⁵のは、仁齋学が自然法思想としての朱子学批判になり得ていない、仁齋が批判したのは、仁齋によって構成された朱子学にすぎず、自然法思想としての朱子学は解体してはいないという理由からである。

この言い方によれば、「丸山眞男以来の通説」をより補強・整備する議論のようにもとれるが、そうではなくて「徳川思想史を自然法思想史の解体史とみる通説に対する意味において、前近代思想の『日本型』⁶⁶類型作業における一例を設定」することを目的としている。仁齋学が主観的には朱子学の反対の立場をとっているが、客観的には朱子学に大きく類似しているとする。田原氏によれば、仁齋の朱子学批判の要点は、朱子学が天下公共・全体社会のための経世の学ではない、朱子学には政治論が欠如しているということである。

田原氏の立論は多くの論者が仁齋学の非政治性を説くのと逆である。田原氏においては仁齋学の朱子学に対する優位性は政治理論の存在なのである。ところが、その

政治論理の核心は「君主が自己反省を行えば、『其の身正しく、而して天下これに帰す。』（童子問、中）といひ、かつ、君主の行為に啓発された各個人が修養によつて徳を成すことが政治の理想であり、理想社会の出現である」と、朱子学の政治論と同様のことをいっている」とされるのである。これは朱子学と仁齋学の人間論の共通性にあるとする、しかし、宋代性理学の理の分賦としての「性」と、「関係」としての人倫にある多様性の「性」の共通性などないのである。田原氏は「学問の要は、唯だ己れを反求するに在るのみ：行ひて得ざること有る物、皆諸を己れに反求すれば、其身正しく、而して天下これに帰す。（童子問中）」というところに、仁齋学があるとし、「これから知られることは、仁齋が君主の政治的職務を一般人の当為から独立させて《政治》を意識化せしめたと考えられるもの、その基調は政治よりも道徳に傾いている」とされる。しかし、『童子問』の引用されている箇所は、君主について述べられているのでない。君子について語られている『孟子』の内容が中心である。従つて必ずしも政治支配者の問題ではなく、人倫的關係の問題として一般化されうる問題である。「君子」を「君主」にし、「反求」を政治一般にして、朱子学と『童子問』の政治論を同趣旨と結論づけるのは疑問である。田



原氏が仁齋の政治論そのものに迫ろうとしたにもかかわらず、そこで分析に利用されたのはやはり丸山流の「公」の概念であったところに、丸山思想史の枠を越えられないことがあつたのである。

伊藤仁齋の宋学批判の歴史的意義を、幕末の尊王攘夷論者の聖典たる会沢正志斎の『新論』にまでたどって発見したとするのが、J・R・マキューアン「伊藤仁齋の宋学否定の歴史的意義」(『思想』五〇九、一九六六、一一)である。神聖の忠孝を以て建てたる国体論を展開する『新論』の背後には一七世紀まで遡る思想史の過程があり、そして『新論』の中には宋儒の理学説もなく、『近思録』にみられる徳化主義もない。『新論』では諸社の祭祀の「義」が民を指導する主な手段であるとした。このようにマキューアン氏は仁齋学の宋学否定の歴史的意義を再発見した。マキューアン氏は、宋学を否定した上での仁齋の社会批判と『中庸』の性・道・教の概念による社会過程の検討が日本儒学の新時代を劃したととらえた。仁齋の宋学解体に徂徠が、邵康節の加一倍法を聖人の教に適用した者のように『小学』や『文公家礼』によって知られていた家法的礼儀の上に国家の礼楽制度という新しい要素を日本の儒学の理論に導入した。天下泰平を開くものは教の功で、聖王が立てた「極」は礼(弁

道)である。天下を安ずるの道はこれより発すると『新論』国体論への流をおこしたところに仁齋の宋学否定の意義を見出されたのである。ところで幕末儒教の代表的著作の『新論』に先行するものを溯れば、順序で仁齋の宋学否定にまで行きつくと考えるのは単純すぎる。マキューアン氏は宋学的体系、その「理」説を破り、その土台に徂徠が礼楽制度を植えつけ、それが国体論の軸となつたと立論しているが、『新論』にみられる不合理さは、仁齋とは異質のものである。宗教的性格と訣別する方向を示したのが仁齋の儒学であり、『新論』の依つている地としての「社」の祭祀は、仁齋思想との異質性を示すばかりである。このようなものを生み出した源を仁齋にもとめるのであれば、その他のあらゆる江戸・明治期の思想的源流に仁齋が求められねばならなくなってしまうことになる。マキューアン氏は仁齋・徂徠の思想上の対決も全く意に介していない。仁齋の思想は、徂徠登場のまえおれにすぎなくなってしまう。これも丸山眞男政治思想史とほとんど同じ流れの中にあり、思想的には若干の後退を示したにすぎなくなってしまう。

実践思想としての仁齋の思想についての研究は尾藤氏に至って、さらに後退している。仁齋の道徳思想は、その政治論とともに、これを実践思想としてみれば、一

種の処世術としての域を脱しないものといわざるをえない。」という。仁斎の利他主義は、社会の大勢に順応した生き方になりやすいとし、仁斎が、朱子の天子に諫言することについて、その効果について批判したことをもって先程みたように大勢順応になりやすい傾向のあらわれであるとし、孔子が堯舜に優越していることの問題を仁斎が展開すれば、「一定の理想に向かって社会を指導し、あるいは社会にはたらきかけようとするのではなく、むしろ理想は理想として現実には社会に順応して抵抗の少ない態度をとろうとする傾向」のあらわれと解釈した結果であるとしている。この解決は妥当とは言えない。

「仁」「愛」「忠恕」を重んじることは決して自己を没却した利他主義にはならない。天子に諫言することの無意味さの深淵は世界に思いをはせないとし、「政治」理論について語ることに脆さがともなう。「諫言する」のは、決して政治構造を批判するものではないし、専制君主であることが前提なのである。「君子は信ぜられて後む」という言辞には、そこで両者の間に人格的な関係が成立しているが故に、意見も言うことが可能となると仁斎は述べているといえる。

仁斎の政治論の本質に迫れず、様々な言及に処世術ないしは功利的な態度しか読みとれない現代の政治非理論

を問題にすべきであって、仁斎の非政治性を問題にすべきではないのである。

尾藤氏は、よく言われる仁斎の政治についての消極性について言い直しているのにすぎない。それが学問的にとびぬけた高水準の思想家であるだけに、偏頗な印象をうけられ、それは江戸期の社会的歴史的条件によるものとし、それが学問的内容にもどのように与えているかが今後の課題であるとされる。これは全く逆であって、日本近世の社会条件の中で、それを越える思想的営みがあるのでようにしてなされたかを考えるべきなのである。

五 法思想史の課題と伊藤仁斎

子安氏は、『事件』としての『徂徠学』で、言説Ⅱ事件・出来事として徂徠学をとらえようとする場合、思想史がとる「理解の立場」や、さらに、ある物語を構成し、その展開の筋道にその言説を位置づけることで、その言説の意味をとらえたとする立場はとらないとする。ここには丸山眞男『日本政治思想史研究』によってつくられた虚構を越えて行く方向が示されている。

ところで、丸山眞男『日本政治思想史研究』の影

響力は何によるのだろうか。

中世的自然的秩序、あるいは自然法的秩序の解体と社

会契約的近代作的秩序的成立という展望を宋学・朱子学的政治思想の解体と徂徠学によって成立する政治思想の確立にみるといふ問題意識の透徹性だろうか。あるいは、丸山氏の徂徠の誤説は実は絶対主義的に把握されてしまった丸山氏の学説史が近代としては偏跛な発達をとげた官僚国家と対応していることにあるのであろうか。

子安氏は同書の第一章『思想史』の虚構」において、子安氏に立ちほだかつていた徂徠像解体の試みを行った。この障壁をしての徂徠像は、同時に障壁としての近世思想史像でもあった。

丸山眞男という物語作者が中世自然法秩序から社会契約的作為秩序思想というストーリーを朱子学的思惟と徂徠の思惟に読みこんでいるのであるが、実はそこには丸山氏自身の絶対主義的世界観が投影されているにすぎないと述べている。この立論は、朱子学の包括的な言説体系を解体する伊藤仁齋—荻生徂徠の作業そのものに着目することから、丸山眞男『日本政治思想史研究』は、丸山の歴史哲学立場の自己確信にすぎなく、『日本政治思想史研究』の徂徠は恣意的なあるいは強引な解釈にもとづいて物語られたものにすぎないとしている。子安氏にとっては、朱子学の言説体系を解体する仁齋、徂徠の言

説そのものに注目するために、その呪縛から解かれることが必要だったのであり、又それだけで十分であるとしている。

その歴史哲学的立場の自己確信にすぎないものが、あるいは強引に読みこまれたにすぎない物語がなぜ影響力を持ちえたのか。

子安氏にとっては、丸山眞男政治思想史は、仁齋が言説的世界に与えた衝撃や徂徠の言説的世界を展開するのに邪魔にならなければいいだけである。そして自身「思想史的」に仁齋学・徂徠学をあとづけることはしないとされている。仁齋・徂徠の言説世界にわけ入り、文学的といってもいい世界の広がりや深さとを子安氏が経験されるのはいいし、私たちも思わずその世界にひきこまれる。しかし今度はその世界との距離がとれなくなるのである。そこに子安氏とは別に「史」的把握の試みをしなければならぬ一つの理由がある。

そして、人と人との関係にもとづく社会を構成する仁齋に対する批判者として登場する徂徠は、

風俗は億兆を合はせてこれを一つにする者なり。人の全力なり。何を以て能く天地に參はらんや。聖人と雖もまた然り。必ずや億兆を合はせてのちに人の力全し。故に

聖人の天下を治むるや、必ず風俗上に在りて存す。仁の極なり。(護園隨筆卷四)

という。「億兆を合はせて一にするもの」が風俗だ、個別がいくらいても、それは個人で風俗とは言えない。合はせて一になって、はじめて、風俗だというのは、徂徠の理論的な優位性を示しているようにもみえる。単なる個々の集まっているのではなくて、あつまるとそれが、それ以上の一つのものになる。そこに一つの団体が形成されることになる。だから、「故に聖人の天下を治むるや、必ず風俗上に在りて存す。仁の極なり」と具体的な人間を越えたところで行われるようになる。仁齋では、人は、まえにみたような関係としてあらわれるだけである。徂徠では、個人と団体の二重性が発生する。ここに、全く対立的な思想をみる。

丸山氏は、仁齋は儒教倫理の理論的分析に力を注いだから、政治論の方面では多くを期待することができないが、それでも、仁齋の著述においても個人道徳と政治との連続性は分解の微候を示していると述べている。それは、先にみた『童子問』中の第二章の南宋孝宗を朱熹が諫言しようとしてある人に注意された事件についての仁齋の叙述に個人道徳と異なるところの君主の公的な行

為が示されているとするのである。「仁者の要件として、私心無しという個人的動機よりも民衆が福祉を受けるといふ社会的成果をより重視してゐる」とし、「もとよりかうした方面の豊饒な展開も徂徠学を俟たねばならなかつた。」としている。このように丸山『日本政治思想史研究』では、先述のように仁齋は、道徳と政治の連続的思惟構成の分解の「過程」としてしか考えられていないのである。前徂徠学段階というわけである。しかし、『童子問』中第七章で言えば、丸山氏は、そこに人君の「公的な行為」を考えているが、仁齋は、人君と民との「関係」で考えているのである。そこで、『童子問』の人に關する規定と護園隨筆の相違は、徂徠学成立の準備としての仁齋学とか、解体過程として仁齋を考えるべきではなく、超越的概念を退ける人倫的思想の仁齋を、徂徠・宣長の思想と全く対立的な思想家として考えるべきなのである。

仁齋の「法」は漢代儒学の復興ともいえる、東洋的專制支配イデオロギーの再編としてあつた、徂徠学や、その日本版としての位置を築かんとした宣長学の世界とは異なる、人倫的世界の法であつた。

注① 岩波古典文学大系近世思想家文集上六〇頁。

② さらに次の文が続く。

生民有てより以来、君臣有り、父子有り、夫婦有り、昆弟有り、朋友有り、相親み相愛し、相従ひ相聚り、善き者は以て是と為、非なる者は以て非と為、萬古の前も此如く、萬古の後も亦此の如し。子能く孝弟忠信、身を修め業を勤め、夙夜懈ら匪んば、則自天道に合ひ、人倫に宜しく、人爲る所以を失ふに至らず。

③ 六〇頁。

④ 清水校注では東涯『童子問標釈』から釈明道「道之外無物、物之外無道。是天地之間、無適而非道也」をあげている。

⑤ 子安宣邦『伊藤仁齋』一六頁以下において、中村幸彦氏が、古義学は仁齋の学というよりは「伊氏之学」あるいは伊藤家の「家学」であるとされたことを述べる。さらに仁齋没後の、東涯による出版の仕事は、単に仁齋の稿本を整理したというようなものではないことが述べられている。その意味を含んで「仁齋学」としておく。

⑥ 同書「第四章」

⑦ 子安著『伊藤仁齋』「第七章」一八四頁以下の「五『道』はすなわち『真理』か」は吉川氏の仁齋の「道」の解釈についての疑問である。吉川氏が「忠信」にふれられないことも問題にされる。さらに、「仁齋東涯学案」全体について検討されている。

⑧ 子安宣邦『事件』としての徂徠字

⑨ 子安宣邦『伊藤仁齋』一九六頁

⑩ 子安宣邦『伊藤仁齋』一九九―二〇〇頁。

⑪ 子安宣邦『伊藤仁齋』二四一頁。

⑫ 日本古典文学大系『近世思想家文集』一一二頁。

⑬ 関儀一郎編『日本名家四書註釈全集』孟子部、読み下しは筆者。

⑭ 川口浩『伊藤仁齋の王道論』(『史学雑誌』)九三―一一一頁。

⑮ 川口前掲論文六〇頁。

⑯ 前掲『近世思想家文集』八一頁。

⑰ 関儀一郎編『日本名家四書註釈全集』論語部

⑱ 木村英一編集『三宅雅彦訳註』日本の思想・伊藤仁齋集』一四六頁。

⑲ 前掲『近世思想家文集』八一頁。

⑳ このようなことは現実によくみられる認識の問題として陥りがちなことであるかもしれない。徂徠の『政談』の面白さなどというものもこのことだろうと思う。一見合理的な提案のようでありながら、封建制を形式的に復古しようというのにすぎない。辻達也氏が言われるように現実の批判というより政治論を述べたものだ(『日本思想大系』三・荻生徂徠』六二―五頁)。としても現実の経済構造の変質に対して無知の

まま武士の帰農を提起するのは、およそ見当違いな提案（献上しているのだから）である。

- ②1 前掲『近世思想家文集』一一八頁。
- ②2 前掲『近世思想家文集』一〇九頁。
- ②3 尾藤正英「伊藤仁斎における学問と実践」『思想』五二五七六頁。
- ②4 尾藤前掲論文七六頁。
- ②5 丸山前掲著書五九六〇頁。
- ②6 前掲木村「伊藤仁斎集」一九三頁。
- ②7 前掲木村「伊藤仁斎集」一九二頁。
- ②8 『童子問』下第五十章、前掲『近世思想家文集』一九四頁。
- ②9 子安宣邦「事件」としての徂徠学」一一八頁。
- ③0 論語「子曰、由、誨女知之乎、知之為知之、不知為不知、是知也」（為政第二）も、子安氏の知の此岸的世界に限定すべきとすることか。
- ③1 『論語微』已、（徂徠全集）四、四六〇頁。
- ③2 『徂徠集』卷之一七、一七六頁。（近世儒家文集集成）三
- ③3 子安前掲著書一四〇頁。同「有鬼と無鬼と」（大阪大学文学部紀要）二六号）も参照。

三以降

- ③4 丸山眞男『日本政治思想史研究』は一九四〇年から一九四四年にかけて『国家学会雑誌』に掲載されたもので、第一

章「近世儒教の発展における徂徠学の特質並びにその国学との関連」と第二章「近世日本政治思想における『自然』と『作為』にあたるものを中心に一九五二年に出版されたものである。雑誌掲載時より様々な刺激を与えていたことは丸山氏の「あとがき」にもみられるが、本格的な影響は、子安氏の言われるように、戦後『日本政治思想史研究』として出版されたからである。その影響は、一九六三年に出版された『講座日本文化史』第五巻の第二章「自然法的秩序の解体」という松浦玲氏の論考タイトルからも窺うことができる。松浦氏は、奈良本辰也氏の研究の丸山氏のそれとの同時代性を述べながらも、「ひとつの変革が非合理主義思想によつて担われること、そのこと自体は決して不当ではない」（一六三頁。）と丸山『日本政治思想史研究』の非合理主義による合理化（二七頁。）という稚拙な表現までうつつているのである。

- ③5 田原『歴史学研究』論文一頁。
- ③6 田原『歴史学研究』論文一頁。
- ③7 田原『歴史学研究』論文五頁。
- ③8 田原『歴史学研究』論文六頁。
- ③9 マキューアン論文一一八頁。
- ④0 マキューアン論文一一三頁。
- ④1 マキューアン論文一一八頁。

- ④2 尾藤前掲論文。
- ④3 尾藤前掲論文七七頁。
- ④4 尾藤前掲論文七五頁。
- ④5 尾藤前掲論文七六頁。
- ④6 尾藤前掲論文七七頁。
- ④7 前掲『近世思想家文集』一六一頁。
- ④8 だから尾藤氏が、仁斎に対抗した徂徠について「道德よりも政治を基本とみる徂徠の特色ある思考。」と言っているとき、どのような政治なのか疑問が生ずる。というのは徂徠の言うのが政治とするなら、それは、鬼神を享る先王の礼も政治なのだからである。
- ④9 尾藤前掲論文七九頁。
- ⑤0 同書一一頁。
- ⑤1 『荻生徂徠全集』一七〇頁、三〇六頁。
- ⑤2 前掲『近世思想家文集』一〇九頁。
- ⑤3 丸山前掲著書五九、六〇頁。
- (あしだ とういち・神戸山手女子高校、甲南高校講師)

連
載

震災の私的記録〈下〉

三 谷 真

8 水道修理 その一

三月の中旬になって、水道がようやく直った。しかし、家のあちこちで水道管が破裂しているの、家の外のガレージに水道管を立ててもらって蛇口をつけ、洗濯機を濯場となった。二軒とりの高橋さんは電気代のことをしきりに気にして、「電気代、ちゃんと請求してよ」と何度も言う。

震災でつきあい深く

この高橋さんは、三宮の阪急高架下でテニス関係のお店を経営していたが、この震災で、店は無事だったものの、高架の補修のため一時休業を余儀なくされている。テニス関係者の間では、かなり名の通った人であることを知ったのは、つい最近のことである。

何度もお店の前を通ったことがあるし、テニスも少しはやるので、有名な店であることぐらいは知っているつもりだったのに、近所の高橋さんがその人だなんて思いもなかった。朝晩のあいさつ程度のつきあいが、震災以後は仲良くなったという話の例に漏れず、私の近所

でも同じであった。お店が再開したら私のラケットも見てもらう約束をした。

破裂した箇所の一つは、近所の郷田さんちのおじいちゃんに直してくれた。このおじいちゃんはなかなか器用で、壁の補修なんかもすいすいとやってみよう。おじいちゃんといってもまだまだ現役で働いているが、郷田さんのところに(私の子供と)同級生の小学生がいるので、ついおじいちゃんということになる。子どもの目線で物事を見るのは、日本的なのかもしれない。それとも、私だけなのか。

もう一カ所はどうも台所の外の水道管のようだ。せつかく水が通っても、家の中に引き込めなくては、台所も使えないし、お風呂にも入れない。毎朝九時に、水道局の配水車から水をもらうことから比べると、各段に楽にはなったが、それでも不便である。

配給の水をもらう時も、確実に手に入れることが分かっていたら、体力的にはきつくても、気分的にはずいぶん楽である。消耗するのは、一時間並んでも手に入らない時である。(長田区)滝谷町の両親のところへ避難していた震災直後には、それを何度となく経験した。

そのことと比べると、毎朝九時には確実に手に入るのだから、それだけでも喜ばなくてはいけないうちに、まし



てや水道が家の前まで来たのだから、万々歳のはずである。だのに、便利さをもとに生活している私たちには、ちよつとした不便も苦になつてしまふ。一度手に入れた便利さから抜けきれない、近代都市生活者の弱さである。

失われゆく忍耐

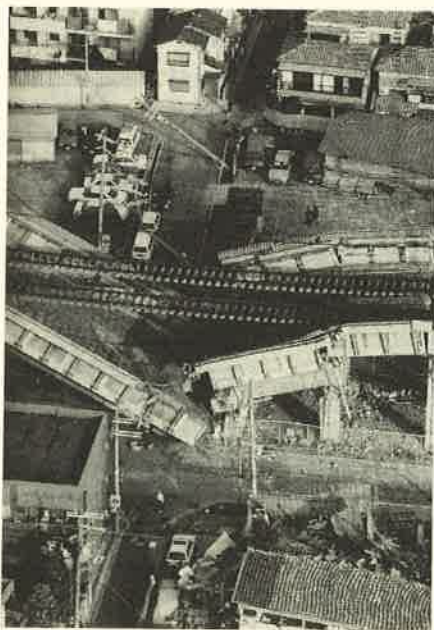
思い返してみると、学部の上三回生の時に、兄の就職の關係で尼崎に引つ越しするまで、ずっと銭湯に通つていたのである。銭湯通いが苦になつたことなどなかつた。家風呂になつた途端、銭湯通いは不便になる。私たちが手に入れた便利さの全てを否定するつもりもないし、全てが贅沢だとも思わないけれど、便利さを手に入れる度に、失つていくものも確かにある。例えば、忍耐。すなわち、我慢すること。

物の「豊かさ」が蔓延するにつれ、少しずつ、しかし確実に、私たちは我慢しなくなる。今回の震災は、そんな流れに大きな警告を發したように思えてならない。

9 水道修理 その二

カミさんが水道管の修理で業者に電話をするが、いつになるかわからないという返事。他の業者も同じだったしょうがないので、今の家を世話してくれた不動産屋さ

んに電話をして、出入りの業者に連絡してもらふ。三、四日して来てくれたのは、水道屋さんではなく電気屋さんだった。聞けば、水道屋さんはいそいそ忙しいといううちの事情を聞いて、破裂箇所も分かっているの、何とかなるだろうということで駆けつけてくれたのである。道具と材料は借りてきたとのこと。悪戦苦闘というほどでもなかつたけれど、小一時間ほどの苦心のあと、なんとか修復できた。喜び勇んで、元栓をひねると、今度は、風呂場の外壁から水が漏れだした。破裂しているのは、ひとつやふたつではなかつたのである。





自分の無力さに怒り

がつくりきた。それまでは、家の傾きや、地割れのひどさにも、「まあ、しゃーないな」でこれたのに、今回は、大きな失望感があった。そして、なぜかひどく腹が立っていた。

今思うと、自分の無力さに腹を立てていたようだ。大げさに言うと、家を基礎ごと動かしてしまうような、自然の力に対する無力感ということだろうか。

電気屋さんの方は、そんな私を感じたのだろう。役に立てなくてごめんね、と言ってくれる。恐縮至極である。ただでさえ忙しいのに、時間をわざわざ割いて来てくれ

ている。謝らなければいけないのはこっちの方である。

話を伺うと、長田区に中古マンションを見つけて、引っ越してまださほど間が経っていないとのこと。そのマンションは半壊状態で立て直しの必要があるらしい。それでも、仕事が仕事だから、家のことはさておいて走り回っているのである。

「困っている人がたくさんいるから」と事も無げに言う。その人は、結局、代金も受け取らずに帰っていった。修復できなかつたとはいえ、手間と時間と材料だって掛かっているのに。ただ、ただ、頭が下がる思いであった。風呂場の水道工事となると、かなり大ごとになる。それこそ、いつになるのか分からない。半分やけくそになって、金槌で外壁を壊し始めた。が、私の力ではできるはずもない。

知り合いの建築家に電話した。この人には、家に戻ってから、一度どんな具合か見てもらっているの、状況は判っていた。家の下の水道管は、たぶん、至る所でダメになっているから、外から回すのが最善の策だろうということだった。

最後は自分の手で

それなら自分でできる。材料と道具さえあれば。やり



方は、この日も含めて何度か観察している。二、三日して、近くの金物屋へ行ったが、思った通り売り切れていた。みんな同じ状況なのだ。

近場ではどこも同じだろうということで、北区の西鈴蘭台にあるDIY用品店へ行った。多目買い込んで、次の日の朝に修理した。二時間ほどで完了。ようやく、窓の外からではあるが、台所・風呂場・便所に蛇口が付いた。もう、四月の八日になっていた。

10 ある方法

ピースポートでの初仕事が二月十七日。それから、ほぼ毎日、本部の事務局で雑用をしていた。とくに、これといった仕事をしたという記憶はないが、一度、部長の梅田さんと近くの粗ゴミ置場へ出かけて、事務所用の書類棚を運び出したことはよく覚えている。

その粗ゴミ置場に、大型テレビが無造作に捨てられていた。地震のせいで使えなくなったのだろう。そう思わないと、もったいなさすぎる。でも、最近の日本人はぜいたくだから、ほんとのところは定かではない。新居に入らなかったのか、新品の婚礼家具セットがそっくりそのまま捨てられていたなんていう話もある。いつから、そんな風になったのだろう。

事務局では、昼間、仕事の合間を見つけて、ミーティングをする。人数は六〜七人。そこで、当面の課題や基本的な方針・ルールの確認を行う。話をきくだけでも状況が分かるからと、私も同席していた。大きな議題としては、やはり地元への引き継ぎ問題。「デイリーニーズ」については、どうやら長田区在住で、フリーのコピラーイター・企画プランナーの松本佐代子さんという人からも引き継ぎの聲が挙がっているらしい。(この松本さんも『長田を考える会』の呼びかけ人の一人となる。)

「へえ、そんな人もいるんや」

近づく三月撤退

私には、引き継ぎ問題は、まだ、ピンときていなかった。何を、どうすればいいのか、皆目見当がつかなかったからである。

二十日になって、梅田さんとともに神戸本部の責任者である山本隆さん(ピースポート責任パートナーのひとり。親父さんもピースポートのメンバーだったので、ジュニアと呼ばれている)が東京から戻ってきた。三月いっぱい神戸から撤退する、というのが東京本部で改めて確認されたとのこと。長田区に入っている他のボランティアグループも、だいたい同じ方針らしい。ボランティア

シアの撤退と引き継ぎが、いよいよ現実味を帯びてきた。

「まだ」「もう」四日

そうした話を毎日聞いていたからだろうか、あるいは密度の濃い毎日だったからなのかピースポートに来てまだ四日なのに、随分時間が立ったような感じであった。このころの時間の経過の感覚は、今から思うと、「ピースポートに来てまだ四日かあ」というのと、「もう四日かあ」という二つのものが交錯していた。

次の日(二十一日)の朝方、布団のなかで、引き継ぎのことやこれからのことなどに考えを巡らしていた時に、突然(とてい言いか思いつかない)ある方法を思いついた。ひらめいたと言ってもいい。とにかく、地元の人に訴えることだ。布団から飛びだして、ワープロに向かった。それが、『これからの長田を考える会』であった。

11 訴える

二月二十一日に思いついた方法は、とにかく地元の人に訴えるということであった。何を訴えるのか?以下に、その呼びかけ文を載せてみよう。

「長田区のみなさん!」

現在、被災地では数多くのボランティアによって、私たちの生活が支えられています。

長田区もその例外ではありません。そのほとんどは関東など阪神地域以外から駆けつけてくれているのです。彼、彼女らは不眠不休でがんばってくれています。

しかし、そのボランティアたちはまもなくそれぞれ地元へ帰っていきます。その後は、被災地の住民である私たち自身の手で、私たちの生活を支えていかねばなりません。彼・彼女らが築いたものを、どう引き継いでいくのか。今なら、まだ、考える時間があります。彼、彼女らが帰ってからは間に合いません。

これからの長田をどうするのか、一緒に考えてみませんか。

・ボランティアたちが築いてくれたものの何を、どのように引き継ぐのか。

・普段の生活の中で、それをどのように行うのか。

・地元や近隣から人手をどう集めるのか。

一人ができることは大したことでなくても、多くの手が集まればきつと大きなことができるはずです。

長田区のみなさん、どうか『これからの長田を考える会』に集まってください。そして、共に考え、共に行動しようではありませんか。』

まだ時間がある

要するに、まだ時間があるから考えましようということなのである。『考える会』にしたのもそこからきている。いずれは『創る会』にするつもりであった。(が、未だにそのままである。)

見出しに「緊急提案!!『これからの長田を考える会』を作ろう!」を付けて、呼びかけ文が最終的にできたのが二十七日。そして、第一回目の会合を三月三日に決定した。

呼びかけ人には、「デイリーニーズ」を引き継ぐ松本さん、ピースポートに土地と建物を提供している田中さん、そして、やはり長田の事業家で、田中さんと同じようにピースポートの活動に感銘を受け、ボランティアたちにいろいろと差し入れなどをしていた南運送社長の南研泰さんに加わってもらった。

さあ、PR活動である。さっそく松本さんにチラシを作ってもらおう。そのチラシは「デイリーニーズ」の配達の際に配る。別にチラシ部隊も出動する。

拍手で迎えられ感激

二十七日には、ピースポートのコネで朝日新聞と日本経済新聞の取材を受ける。生まれて初めての新聞取材。

うまく伝えることができただろうか。

同じく二十七日には、長田区に集まったボランティアグループによる「長田ボランティアルーム」(通称「長ボラ」)のリーダー会議(毎日午後四時から。この日が三十回目だった)でアピールさせてもらう。万雷の拍手で迎えられる。大感激であった。

12 いろいろな思い

二月の二十八日には、「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」の第三回全体会議でアピールする。ここには、被災地で活動している多くのボランティアグループが、横の連携をとるために集まっている。「連絡会議」自体はその場の提供と調整役に徹している。

地元への関心は？

『考える会』は、ピースポルトと同じように、地元への引継ぎを考えている多くのグループから注目を浴びているらしい。それはそれで気が引き締まる思いであったが、気がかりなのは、どれだけ地元の人に関心を持ってくれているのか、どれだけ集まってくれるかであった。

前日(二日)に簡単な打ち合せをする。進行は私。メインの議題は、長田区でのボランティアの活動内容を地

元の人に知ってもらうこと。そして、そのうちで、我々に何ができるのかを考えること。活動内容の報告は梅田さんと、当日来てくれる他のボランティアグループに頼むことにする。会の主旨説明は私が担当となった。

会合に先立つ、呼びかけ人の挨拶は松本さんと田中さん。南さんには、会に到着しだい挨拶してもらう。地元の人には自己紹介をしてもらうことになった。

朝日の夕刊に『考える会』の記事が載った。短いが、内容を適切に伝えている。さすがだ。自分の名前を見るのは、ちよつと照れくさい。活字になった年齢は、自分で思っているより年寄りになった感じがする。

いよいよ当日である。場所はピースポルト本部一階。(事務局は二階に移っていた。)開始は午後一時。十二時過ぎから、ぼちぼちと人が集まってくる。やはり、ボランティアが多い。そして、取材陣。地元の人ばかり来てくれるだろうか。

一階と二階をうろうろする。少し落ち着かない。緊張しているのか。元々、さほど緊張するタイプではない。本番には強い方であった。上がり性の友人には、よく「得な奴ちゃ」と言われたものだ。二階で、梅田さんに「がんばれー」と言われて、「みんなのパワーを」と叫びながら降りていく。入り口は靴だらけ。会場はいっぱい

あった。

開会の言葉。呼びかけ人の挨拶。順調にすすんでいく。地元の人を自己紹介が始まる。長田区だけでなく、須磨や垂水からも来てくれている。名前だけでなく、それぞれの被災体験も話してもらおう。みんなのいろいろな思いが、じんじんと伝わってくる。

「今でも悔いが」

ひとりの男の人が立った。この本部の向かいの喫茶店の経営者で宮本と名乗った。歳は私と同じくらい。被災後しばらくして、窓からすぐ前の御蔵通りが燃えだしたのが見えた。プロパンガスのボンベが爆発している。知っている人を助けようと、家を飛び出したが、すでに火は猛烈な勢いであった。近づくこともできない。消防士に寄るなど言われて、見ていただけであった。

「あの時、なんで助けられることができなかったのか。今でも、悔いが残っています。だから、今日ここに来ました。」

隣で梅田さんが泣いている。会場のほとんどの人が涙を流していた。

13 分かち合い

三月三日の『これからの長田を考える会』第一回会合は、結局、地元（長田区だけでなく近隣の区からも）の人が約四十人、ピースポートや他のボランティアを含めて延べ百二十人余りが集まってくれた。長田の人がもう少しいればいうことなかったけれど、短期間の告知活動を考えれば、大成功だといってよいだろう。

何かせねば、で結集

この日集まった地元の人の思いは、みんな同じであった。何かしないといけない。でも、どうすればいいのか分からない。また、一人では何もできない。『考える会』の呼びかけ文が、そんな気持ちに響くものがあったのだろう。

自己紹介では、そういう思いや被災の状況、また今の状況などについて切々と話してくれて、どの話も胸を打つものがあった。被災の個人的な体験を語り、みんなそれを分かち合うことができたという意味では、今から思うと、この自己紹介が一番成功だったかもしれない。

震災からの立ち直りや復興は、こうした体験の分かち合いや悲しみの分かち合いということから始まっていく

のだろう。

しばらくは、毎週土曜日午後四時から会合を開くことを決めて、無事に第一回会合は閉会した。会合が終わった後、地元の人に残ってもらって、新聞の編集や会の運営などについて少しだけ具体的な話をして解散した。

主力メンバーそろう

現在の『すたあと』の主力メンバーは、この時に来てくれた若い女性たちである。看護婦、学生、家事手伝いといったいろいろな層の彼女たちが、第一回会合の次の日から時間の許す限り来てくれたおかげで、会が成り立ち、そして運営することができたのである。

『考える会』の発足は新聞やテレビ・ラジオで取り上げられ、関心のある団体や個人から接触があり、いろいろな情報が寄せられるようになった。ピースポート本部の一階に事務局を置き、電話やパソコンを準備し、形だけは何とか整った。後は、中身をつくることであつた。

『考える会』の目的は、呼びかけ文にあつたようにボランティア活動の引継ぎ、被災者向け情報誌「ウイクリーニーズ」（ピースポートの「デイリーニーズ」を週刊化したもの）の発行、そして畳敷きのピースポート一階（フリースペース「なごみ」と命名）を地域住民に解放して

地域の問題を考える「場」を提供したり、各種イベントを行うことを柱としていた。

四月一日に『すたあと』と長田を考える会として再スタートするまでは、ピースポートの全面的な協力のもとで、不十分ながらその目的を何とか果たせようと思う。たとえば、第一回・二回の会合に、避難所から参加していた御蔵通りの主婦たちが、自治会再開のために動いて、見事に再建を果たしたことなど。

当初の目論見通り、『考える会』がさまざまな情報の受発信の場所になり得たから、そうしたことができたのである。

14 引き継ぎ式

いよいよピースポートが撤退することになった。期日は三月三十一日。四月一日の『これからの長田を考える会』第五回会合は、ピースポートとの「引き継ぎ式」を行うことにした。

三日の第一回を含めて、三月中に四回の会合を開くことができた。その間に、新たな地元の人参加も少しずつではあるが増え、事務局の体制も何とかなつた。活動資金という大きな問題はあつたけれども（現在もある）、それなりに会は動いていた。



気長にいくしかない

いつまでもピースボートに甘えていてはいけな
『考える会』 自体が自立しなければ、われわれのボラン
ティア活動もおぼつかない。ピースボート神戸の本部
長・梅田さんは、随分と心配してくれて、何人か残して
援助を続けるぐらいの気持ちを持っていたのだが、撤退
する方が『考える会』のためになると押し切った格好に
なった。

ピースボートが撤退した後、一度は必ず落ち込むだろ
うし、下手をすればつぶれるかもしれないが、その時は
その時で、また一からやり直せばいいというぐらいに、
割とのんきに考えていた。

それは、被災地の復興にはかなりの時間が必要とされ
るし、この活動も長期戦で気長にやるしかないという思
いがあったからである。四月一日の引き継ぎ式は、ボラ
ンティアと地元住民が分かれて座り、ピースボートから
の言葉、「目録」の授与、そしてわれわれからの言葉へ
と進む。地元は参加者全員がひとりずつ送る言葉を述べ
た。

「長い間、本当にありがとう。」

へたな言葉などいらない。伝えたいのは、この気持ち
だけであった。

最後に、ピースボート神戸の責任者のひとり、山本ジュニアより新しい会の名前『すたあと』を送ってもらって、引き継ぎ式は終了した。

ピースボート撤退

二日の朝、ピースボート神戸のメンバーたちはそれぞれの地元へ帰っていった。

彼・彼女たちボランティアが教えてくれたのは、コマーシャルの言葉ではないけれど、「人を救うのは人しかない」という、頭では分かっているけれども、実践することの難しい、しかし当たり前前の事実であった。

もちろん、ボランティアといってもいろんな人間やいろんなグループがいて、いろんな思いや思惑があり、現実には、ボランティア同士の諍(あらそ)いや、被災者との摩擦もあつたであろう。だから、ボランティアというだけで、そっくりそのまま、丸ごと美化するつもりはない。

しかし、彼・彼女たちがいなくなつたら、被災地の住民は、瓦礫(が・れき)の山から、そのまま立ち上がることもできなかつたにちがいない。そのことは忘れないでおきたい。

『すたあと』の原点は、他地域から駆けつけてくれた

ボランティアたちが教えてくれた清新であり、その課題は、それを被災地に根付かせることである。

15 道のり

地震から、「ようやく」というか「はや」というか、五ヶ月が過ぎようとしている。被災地の生活は、十分に落ちつきを取り戻したとはまだ言えないが、徐々に復旧に向けて歩み出そうとしている。しかし、復興への道のりは遠くて険しい。

ハードより心の問題

では、復興のメルクマールをどこに置くのか。解体が済み、瓦礫(が・れき)が処理され、更地になってビルや住宅が建つ。これで復興とは言えない。そんなことはみんな分かっている。

産業基盤が復旧し、雇用が確保され、安定した収入の元で安心した生活ができるようになる。これは復興のための条件ではあるが、復興そのものではない。(現実には、この条件の実現すら、日本を取りまく現在の経済状況では難しいものとなっている)

「元の場所」で「安心して」住めるようになること。これである。「安心して」というのは、建物などのハー

ド面で防災が整備されていることは言うまでもない。重要なのは、「心」の問題である。

「笑顔が戻る」なんていう陳腐な表現は、できれば避けたいが、そういうことなのである。そのためには、まず、地震の恐怖から立ち直ることができるかどうか。

地震の怖さは、建物や道路を壊すことではなく、われわれの心を痛めつけることである。それは、地震やそれに伴う火事によつて、命や財産が失われることから来るだけでなく、それ以上に、地震そのもの、つまりわれわれの生活の本源的な基盤である自然、あるいは「地」が揺れ動くことから来る恐怖であるように思える。

人間が拠つて立つ基盤が崩壊する恐怖と言つてもいい。もちろん、人間は結構しぶとくて、時が経(た)つにつれて、この恐怖感は薄らいでいく。しかし、いまだに、余震や近所の解体などで揺れるたびに、身がすくんで凍り付いてしまう人は多いはずだ。

今までの生活のあり方の反省の場合は困るが、地震の怖さは「喉(のど)元すぎれば熱さを忘れる」式でいきなりいけるものではない。

次に大事なものは、「関係」の復活である。どこにどんな人がいて、どこにどんな店があつてというような、人の息吹きを感じることができるような関係が元通りにな



って初めて、人々は活気づき、喜怒哀楽が生まれるのである。とりわけ、そこで働き、そこで住んでいる人が多かった長田区などではそうである。

長年住んでいた場所から移るのをいやがる人（とくに高齢者）が多いのは、その場所のできた、あるいは作り上げてきた関係に住み易さがなくなるからである。「元の場所です」としているのは、そういう意味である。

民主主義の原点に

復旧・復興に向けて、課題は山積している。目の前のこと、三年先のこと、十年先のこと。何が重要で、何が必要でないのか。行政批判だけでなく、われわれ自身がビジョンを持ち、意見を述べること。そして、その代弁者を選ぶこと。今こそ、民主主義の原点に戻る時である。

（おわり）

後日談を少し。

「すたあとと長田を考える会」は「すたあとと長田」となって現在も活動を続けている。（インターネットでも見れる。）私自身は、昨年の六月に代表の座を降りて、神戸商大の先生たちが中心になって四月の終わりから始まった「長田の良さを生かしたまちづくり懇談会」に合

流し、その幹事役となった。長谷「寅さん」を呼ぶきっかけを作ったのはこの懇談会である。現在も、月二回のペースで開いている。

代表の座を降りたのは、ボランティア活動を通じて知り合った青年が、長田区から神戸市議会選挙に打って出ると言う話になったので、その手伝いをするためであった。手記の最後の文句はその選挙を意識したものである。

（みたに まこと・本学商学部教員）

この原稿へのご意見・ご感想は、

三谷真の電子メール

CXP_03307@niftyserve.or.jp まで

編集部より

以上の文章は、一九九五年の五月中旬から六月中旬まで、「復興にかける」三谷 真さんの記録」というタイトルで一五回にわたって毎日新聞阪神版に掲載された三谷先生の手記の後編です。



■短評■
パニック

開高 健著
新潮文庫／定価四四〇円

私は普段あまり読書はしないのですが、今回この書評に短評を書こうと思ひ、周りの人におもしろくて読みやすい本を紹介してもらひ、開高健の『パニック』を読むことにしました。

内容は、大繁殖したネズミと無力な人間の戦いについてです。一二十年ぶりに笹が実をむすび、その実をエサにしていたネズミが大繁殖します。しかし、エサが失くなってしま

つたため、ネズミたちが植栽林や穀物を食べ始め、人々は多大な被害を被ります。やがて飢えたネズミの大群は、エサを求めて町のゴミ捨て場や市場の裏通りなどまで押し寄せます。

そのため、人々の間で、伝染病のデマが流れ、人々はパニックに陥っていきます。さらに失政への批判がされ、官僚の腐敗がもたらがり、人々の心理的パニックは政治的パニックへと発展していきます。ところが、ネズミは飢えのため、平常心を失くし、発作的に集団になって走つていき、行手にあつた湖につき進んでいったため、溺れて死んであつけなく自滅してしまいます。ネズミの死により、人々の心理と政治のパニックも消えていってしまいます。

その中で役所の山林課に務めている主人公の俊介は、一年前から鼠害の発生を予測し、上司にその旨を伝

えます。しかし、単なる空想に過ぎないと思われ、相手にされません。ですが、実際に鼠害が起こり、俊介は鼠害対策委員会で、ネズミと真正面から戦うことになり、人々から英雄視されていきましたが、実際は良心からネズミと格闘していた正義感に燃える主人公というわけではあ



りませんでした。本当は、この戦争ごっこのスリルを味わい、自分の力をじかに確かめたかったからでした。主人公は飼育室の動物たちが、最初は猜疑心の深い動物が人間の前でエサも食べないけれど、しだいに人間にこび、人間に支配される動物に対して倦怠を感じていました。

しかし、ネズミと格闘することで、日常の倦怠から脱出し、勝ち目のない戦いを生き生きとしていました。けれども、ネズミの自滅により、また元の倦怠に戻っていきます。無機質な社会に戻るより仕方のない人

間の寂しさが感じられました。

この小説では、ネズミの大繁殖という自然現象に圧倒されて、手をこまねいている人間の姿が描かれていて、人間の無力さがうきほりになっているように思いました。

また、ネズミの自滅により幕を閉じたけれど、何の解決にもなっていない政治問題が、そのまま忘れ去られるという人間のいい加減さも描かれています。小説の中だけに限らず、実際に鼠害などが発生した場合も、喉元過ぎれば熱さを忘れるというように、その時取り上げられた問

題などは、本当に忘れ去られるのではないかと思いました。

この小説を読んで、私の一番印象に残ったのは、腹黒い上司などの描写でした。「課長は胃がわるいのでひどく口が匂う。…まるでどぶからあがったばかりのような息…生温かく甘酸っぱい匂いだ。…この男はくさりかけてるなと思わせられる。」

など、人間の醜悪な部分に対してまでこと細かく、リアリティーのある描写がされていて、この描写のおかげで、読み終えた後には、まるでその映像を見たかのような満足な気持ちになり、内容とともに視覚的にも非常におもしろく読むことができました。

この小説は、読み易く、おもしろかったので、これからも開高健の作品を読んでいきたいと思わせられる小説でした。

(本野 栞)



■短評■
幻想の未来



岸田 秀著
河出書房 / 定価二二〇〇円

読者のあなたにとって今守るべきものは何だろうか。或いは、何を信じて日々を送っているだろうか。両親、恋愛、友情、自分、成功、世界の变革？人は心の中に各々幻想——信じる対象が規定した主観の世界——を持たなければ、人間らしく生きる事ができない。というのは、幻想と現実間の軋轢や摩擦の中から人生で大切なものを一つ一つ増やすことができ、だんだんと垢まみれの「愚

かなる者」になってゆけるからである。ところが、現代人（特に若者）の守るべき対象は専ら自分の内部に隠れている。「神聖な」或物であつて、守るものの為に卑屈にならざるを得ない人間達の姿ではない様である。そんな私達（二〇歳前後）の心の構造を露わに説明づけてくれようとするのが、私の紹介する岸田秀著『幻想の未来』である。



本著は、旧来人間関係とその絆の中に信仰を持ち安定した自我構造を持つていた日本人が、西洋人の様な「近代的な自我」に感化されてしまったという所から出発する。ここに言う信仰とは、宗教に限った概念を指さない。個人が何としても守らねばならぬと無意識で感じている対象は、基本的に他者と自分を関係づける方法の恒常性に支えられており、この内省世界での関係づけの論理は客観的には不合理で、因果関係があるとは思えず、妄想的ですらある。この過程が人の無意識下で行われ、意識上では盲目的に信じる事ができる（信じていると意識すらしない）という意味で信仰と呼んでいる。「人の意見に左右されず、人の期待や要求に引きずられず、人に頼らず、しっかりとした自分自身の判断・信念・主張——要するに主体性——をもち、理性的に行動する」強い自我

をもつ人間像——それが私達の馮か
れている信仰である。しかし、これ
程空疎な人間の形容があるだろうか。
主体的、理性、信念、そのいずれも
実体から遊離した概念である。何者
かを信じ追求する現実の人間の営み
がなくては、そんなものは人に肥に
ならない。単なる言葉のレトリック
である。現在の若者の多くはその言
葉により翻弄されてきた世代だろう。
主体性や信念は日常自然と衝突する
現実との葛藤や苦悩と対面する事で
実感できるのであり、葛藤や苦悩を
抑圧した、又はその経験に至らない
幼少期に要求された「自分らしさ・
積極性・生きがい」という概念は、
当時は信仰の対象になったものの何
と薄べらな実相のない言葉だったろ
うかと思うのだ。しかも、能力↓自
分らしさ↓個性等、移り変わる社会
の要求に葛藤多き思春期の若者はう
んざりし、彼らの心は葛藤や苦しい

体験を意識上に昇らせない様プロゲ
ラムされてしまっている。現代の若
者は言葉のレトリックに捕われて、
逃れたいと思いつながらその内省活動
を萎縮させているのではないか。こ
れは余りに悲観的すぎる解釈かもし

れない。ただ∞の田中康夫「な
んとなくクリスタル」に描かれた感
覚的生き方、その奔放な一面の延長
にある現在の若者の姿は、意識下の
叫びをカムフラージュしている様に
思われるのである。



岸田氏はそこまでは言及していないが、やがて現代人が自分の中に信仰（幻想）＝眞の自己を追求するに至って、現代人の逃れられぬジレンマは完成したとしている。集団への依存を捨てて個人という自律的存在を信じた現代人の哀しいまでの姿がそこに説明されている。皮肉な話だが、何かにつけて多用される「本当の」とか「ハイパー・スーパー」、「より高次の」等の形容詞ほどあてにならない言葉はない。そこには、「私の思考を超えた未知の、しかし確実にある筈のもの」という思考の放棄と盲目的信仰しかないからである。それでも、この「本当の自分」という幻想によらなければ現代の人々の心は安堵する事がなかったのである。私達は「本当の自分」が何なのかよく分かっているないので、他人にこれを指摘されないかと脅え、他人不信で、一定距離以上の接触を図ろう

としないと氏は続ける。しかも、本当の自分は絶対的に正しいと信じているので、強いナルチシズム傾向を意識上に昇らせている。そこで、本当の自分に実相がないという事がかなりの心的負担になり、このイメージを多少の好意を抱く他者に投射するという方法をとる。しかし、他人とのコンタクトが不十分で情報収集をされておらず、専らイメージ先行の歪んだ他者像を形成している。勿論、私達は誰も友人や恋人の心の全てを知ることとはできないのだが、内面世界でのみ通用する妄想的ルールが外の世界に持ち込まれている点に現代の人間関係の特殊な点を見出せるのである。

キラキラ光り色彩りも鮮やかな若者文化の影で、異常なブームや物への執着（タマゴツチやエアマックスの例）、「援助交際」＝売春や薬物、動機のない集団リンチ、ストーリーカー

等々暗い歪んだ心理が培われている。苛々する、むかつく、スカツとしたという擬態語で表わされた彼ら又私達の心、私のこの叙述も又「悪く矛盾に満ちた世界」に打ちのめされた翼の折れたかわいそうな人間の説明づけでしかないかもしれない。未分化な人格構造では自分の状況や感情を説明できずに、いつも都合のいい言いわけで時々を陵いでいるからである。

本著は、専門書でないので心理学を知らなくても読める。やや古いが、痛快な言回しと明解な論旨によって、最近の社会現象はどんな心のメカニズムを孕んでいるのか、自分なりの説明付けをする手がかりになる著書であろうと思う。

（はなばたけ）

新入生歓迎セミナーへ行こう



第
2
回

4月5日(土)～6日(日)
京都伏見林松院にて

参
加
教
員

山村 嘉己(文学部)
三谷 真(商学部)
(敬称略)

※現在複数の教員に参加
をお願いしています。

第
3
回

4月19日(土)～20日(日)
高槻セミナーハウスにて

参
加
教
員

小川 悟(文学部)
桑原 尚史(情報学部)
野口 太郎(工学部)
(敬称略)

※現在複数の教員に参加
をお願いしています。

申込方法：組織部まで

TEL 06-368-7530

編 集 後 記

新入生の皆さんは今まで本を読む習慣があつたでしょうか。本を読むというのはなかなか時間が掛かり、受験勉強などでどうしても読書離れになりがちではなかつたでしょうか。

しかし、大学入学をきっかけに読書を始めようと思つていゝる人は多いのではないかと思います。

ところが、いざ読書を始めようとして、あれこれ読んでみても自分にあつた本を見つけるのはなかなか難しいものです。そんな自分にあつた本を見つげるために今回の特集「読書案内」がお役に立てれば幸いです。読書の先輩である教員の方々から「読書を始めるきっかけになつた本」「新入生の皆さんに読んで欲しい本」などをその本にまつわるエピソードを交えて紹介していただきました。

その紹介していただいた本を読み、一人でも多くの新入生が「これだ!」と思える一冊を見つけて頂ければと思います。

(城之内)



104号



- 〈特集〉 読書案内
 ●本への接近
 ●「本が読めない」
 ●二番街のパフェ賞味
 あれ
 〈連載〉
 梁 永厚／芝田啓治／
 芝田 稔／山村嘉己

107号



- 〈特集〉 戦後50年
 ●国連50年と日本
 ●大阪大空襲と戦後50年
 ●被爆問題と天皇制
 ●戦後教育50年考
 ●終戦50周年フィリ
 ピンの場合
 ●国民経済の黄昏
 〈寄稿〉
 ●震災と復興
 〈連載〉
 山村嘉己／蘆田東一／
 芝田啓治／芝田 稔

105号



第105号
1994.10

読評編集委員会



- 〈寄稿〉
 ●バリソンとは何か
 〈連載〉
 梁 永厚／山村嘉己／
 芝田啓治／芝田 稔

108号



- 〈特集〉 読書案内
 ●孤独の日々に良書に出会う
 ●「脱学校の社会」
 ●反面教師としての私の経験
 ●目的設定型読書と快楽追求
 型読書
 ●ことばに惚れる
 ●「歴史体験」としての読書
 〈寄稿〉
 ●震災二年目のモノローグ
 〈連載〉
 芝田 稔／山村嘉己／
 芝田啓治／梁 永厚／
 蘆田東一

106号



- 〈特集〉 読書案内
 ●法学へのきっかけ
 ●モンテスキュー著
 「法の精神」
 ●文系学生のための数
 学的発想のスヌメ
 ●「山の人生」
 〈寄稿〉
 ●林羅山の法・政治思
 想と幕藩体制(1)
 〈連載〉
 梁 永厚／芝田啓治／
 芝田 稔／山村嘉己

109号



- 〈特集〉 教育問題
 ●大学改革を考える
 ●大学はどこへいこうとしているか
 ●大学教育の落とし穴
 ●我が国の科学技術政策と高等教育
 ●情報社会における教育を考える
 ●近代日本における朝鮮語の
 教育と研究
 〈寄稿〉
 ●金文輯と「犬糞倉衛」
 〈連載〉
 芝田 稔／山村嘉己／
 芝田啓治／蘆田東一／
 三谷 真

季刊 『書評』 1997年 4月 通巻110号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎368-7530 or 368-1121(内線74355))
頒 価 250円